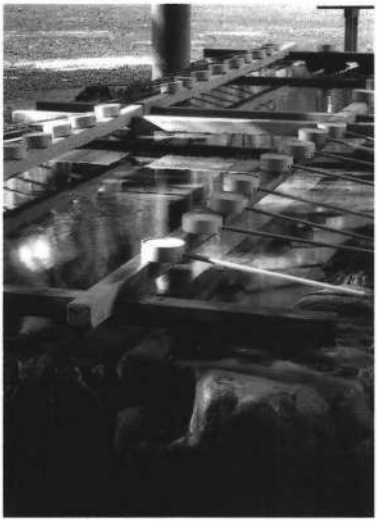
剣のこころ







講話集

剣のこころ

第十九回　神道講演全国研修大会　愛知大会

表紙の写真（熱田の杜）

御挨拶

神社本廳総長　工藤伊豆

第十九回神道講演全国研修大会の開講式にあたり、一言ご挨拶申上げます。

神道講演全国協議会の皆様には、平素より神社本庁の諸施策に対し、格別なるお力添えを戴いてをりますこと、有難く厚く御礼申上げます。

さて貴会は、神道講演を通じて斯道の興隆に貢献されることを期して、昭和四十六年より本研修大会を開催してこられました。爾来三十有余年、地道に研修を重ね、会員相互の研鑽を続けてこられましたことは、洵に意義深く、喜ばしく存ずる次第であります。その成果は、会員各位の奉仕神社における日々の社頭講話に現れ、教化活動の要となってをりますことは、斯界にとりまして実に心強い限りであり、たゆみない研鑽に対し、深く敬意を表するものであります。

現在、青少年をめぐる犯罪が社会問題化し、教育の改革が声高に議論される中で、戦後永らくもてはやされた個人偏重の生き方を戒め、私どもの祖先が営々と培ってきた価値観

を見直す気運が生じつつあります。わけても敬神崇祖といふ言葉に表される神道の心は、四季の祭りを通じて地域や家庭の秩序と調和を保ち、共同体の安寧と発展に寄与してきた伝統と相俟って、脚光を浴び始めてゐます。この時にあって、神道の精神を平易な言葉で氏子崇敬者に説き聞かせ、伝へてゆく神道講演の意義は、弥が上にも増すものと確信してやみません。

どうか会員の皆様には、教化活動の第一線に立つとの自覚のもと、斯道の興隆、ひいてはわが国の発展のため、尚一層のご尽力を賜りますやう、切にお願ひ申上げる次第であります。

終はりにあたり、貴会の益々のご隆昌と、参加各位の愈々のご活躍とご健勝をお祈り致しまして、ご挨拶と致します。

序

アーア宮の熱田の二十五丁橋でエー
アー西行法師が腰をかけ
東西南北見渡して
これほど涼しいこの宮を
たれが熱田とヨーホホ
アーア名をつけたろうエ

幕末に大流行し、今に伝えられている「名古屋甚句」の一節である。板石が二十五枚太鼓橋風に並び、架橋年代は不詳であるが、名古屋では最古の石橋という二十五丁橋が境内南方にある。この橋に、花に生き花に死んだ漂泊の歌人として名高い西行法師が腰をかけて、木陰涼しいこの宮を誰があつたと名付けたかとつぶやくのである。

ものの本によれば、この後日譚には、白衣を着た人が出迎えて

〝やよ法師あずま（東）の方にゆきながら
なぞ西行と名のりそめけん〟

と言ったので、法師おどろき逃げ去ったという。

当神宮に伝わる西行伝説を持ち出したゆえは、昨夏、当神宮を会場に開催された第十九回神道講演全国研修大会・愛知大会に感銘を受け、その雄叫びの熱気を思い起こしたからに他ならない。

まさに、熱田をあつくした人々が集ったのである。

講演実習に模擬講演・講演の夕べ、さらに意見発表に講録作成と息つく暇のない研修内容。総勢四十八名が、睦び合いながらも一人一人が真剣勝負のような気迫で取り組んでいる姿。又、期間中に同士がかけつけ、旧交を温めかつ激励される一場面にも遭遇し、はからずも石井壽夫・佐古幸嬰両先生が神道講演を通じて斯道の興隆発展に尽瘁された尊い志を、皆々様の姿からしのばせて頂き、かつ教えられた次第である。

神社界の将来が、かかって人の如何によるとすれば、まさしくこの神道講演全国研修大会に心を寄せられる方々をおいて他はない。

熱い熱田でより熱く研修を積まれた各位に敬意を表し、愈々の御活躍を念じ、宿主の故をもって大会会長に祭り上げられた私の責を塞がせていただきます。

愛知大会会長・熱田神宮宮司　小串和夫

目
次

御挨拶　神社本廳　総長　工藤伊豆
序　熱田神宮　宮司　小串和夫
大会記念講演
熱田歴史散歩　熱田神宮　権宮司　二槁一彦　1
第十九回神道講演全国研修大会・愛知大会
「お神酒あがらぬ神はない」―松尾の神や永遠に守れる―　生嶌經和　13
常識　村田和弘　19
共生　畠田明彦　24
乃木大将と私　―御神護拝戴奇蹟大霊験―　相原牧雄　28
感謝の心　村田佳子　33
「お年寄り」へのお願い　武内弘康　39
神話に学ぶ　―よみがえれ剣の魂―　大野康孝　43
祓ひあれこれ　市来忠恕　47
日本武尊の御西征・御東征について　荒木房雄　52
熱田まつりについて　佐藤和夫　56

熱田神宮宝物館こぼれ話　安江英男　60
初宮詣の後で　河野誠　65
『ことば』　原茂子　69
保護司になって　黒田明司　74
この国に生まれて　西野敬一　79
所懐　藤野功　83
感謝と奉仕について　冨樫厚　87
夢の中へ　山本行恭　92
蘇れ教育勅語　寺本正徳　97
神さまによろしくね　木下久榮　102
靖國を思ふ　松坂公宣　111
神々の集まる処　牟禮照子　116
感動を共有しましょう　中木屋豊　120
神を思うとき　山本秀典　124
狐の狛犬　田代壽興　128

「つくる会」の教科書について　近藤政彰　133
子供の教育　菊池宣行　138
神仕への心　近藤哲朗　142
身代り　―英霊に感謝の誠を―　芦原久雄　146
社会と自己と　矢田部盛男　151
都心の森の恩恵について　高羽伸浩　156
伊勢チャンとスサノオのみこと　小泉美智子　160
「公（おおやけ）」ということ　山下裕嗣　164
昭和天皇を仰ぐ　秋野義正　168
佐古幸嬰先生を偲びて想う　古川雅恵　172
神宮大麻は地球を救う　渡邉知宣　175
「ふりつもるみ雪にたへて・・・」の御製への思い　井上忠衡　186
英霊未だ甲冑の紐を解かず　木下鎌二　190
われら皆　同胞（はらから）　佐古一洌　201
春祭りの後で　芦原高穂　205

慰霊祭にて思う事　大島守彦　210
褌にみる日本人の粋（いき）　村田昭彦　214
鉄路の呻き声が聞える　河本文夫　221
神へのまごころと命のつながり　櫻井田鶴子　225
太鼓保存会青少年の部発足奉納にこと寄せて　川﨑太久美　229
「いのち」の大切さ　松吉宣和　234
三種の神器　村田和之　239
神道講演構成法　243
愛知大会の記録　247
あとがき　愛知大会実行委員長　村田和之　251



第19回　神道講演全国研修大会・愛知大会　　於 熱田神宮　平成15年 6 月25日～27日

第十九回　神道講演全国研修大会　愛知大会

と　き　平成十五年六月二十五日～二十七日

ところ　愛知県　熱田神宮

熱田歴史散歩

熱田神宮権宮司　二　橋　一　彦

第十九回神道講演全国研修大会愛知大会が熱田神宮を会場に開催されることになり、記念講演を依頼されました。その役目はとても果たせることはできませんが、与えられた一時間「熱田歴史散歩」と題し、熱田神宮の御鎮座の背景と信仰の一端にふれて、話をすすめてみたく存じます。

古代の熱田の宮は、名古屋城から南にのびる半島、熱田台地の先端に位置し、東西は入江でした。この台地は南北に約四㎞、東西約〇．七～一㎞、海抜五～一〇ｍで、断夫山・白鳥古墳（御陵）、高蔵古墳群があり、「熱田町旧記」には約三〇基の古墳があったと記されています。また、玉の井・森後・神宮内遺跡、高蔵・新宮坂・神宮南門貝塚等もあり、まさに遺跡の宝庫と言えましょう。中でも高蔵貝塚は、東西約五〇〇ｍ、南北八〇〇ｍの地域に広がり、その特長としては、①弥生土器と石器との共存が実証されたことで、石器と土器の共伴関係を明らかにしたこと。②「魏志倭人伝」に、この時代には日本に牛、馬、

虎、豹、羊、鵲の六種の動物はいなかったと記されていますが、馬の骨が出土したこと。③櫛目文と丹塗（ベンガラ）で装飾された色彩土器の出土したこと。④遺跡の規模が大きく、弥生後期にも貝塚が形成されていること。一般には弥生時代には稲作文化が入り、水田耕作が行われて、集落は低地に進出しますが、ここでは前代からの狩猟、漁撈が行われ、特に漁撈が生業の主要部分を占めていたと思われること。⑤標準となる遺物を出土する標式遺跡であること。弥生時代の前・中・後期にわたる多量の土器を出土し、標式となる土器に「高蔵式」の名称が与えられていることです。

時代は下って低地に田畑が開けると、肥沃の大地をひかえたこの土地には、食料の生産が盛んに行われたに相違なく、古書等に「厚田」と記されているのをみても、豊かさと住みよさが裏付けられます。

一方、熱田台地から凡そ南にのびる海岸線を「あゆち潟」と呼んでいました。アユチは後に愛智（アイチ）という郡名の発祥になり、明治以降には、この名が愛知という県名になります。

大伴家持が越中国司として赴任されていた時、読まれた歌の中（万葉集）に「東風いたく吹くらし奈呉の海人の釣する小舟漕ぎ隠る見ゆ」があります。この歌の中で東風を「越

の俗語、あゆのかぜといえり」という註を付しており、以後、国語辞典では東風をアユノカゼと読ませるようになったといいます。

この歌の読まれた場所は、富山湾の西岸、現在の氷見市の辺りで、その場所に吹き寄せる風、即ち東風をこの地方ではアユノカゼといっていたことを歌の註が教えてくれます。

菅原道真公は「東風吹かばにほひをこせよ梅の花主なしとて春を忘るな」という歌を読んでおります。ここでは東風をコチと読ませていますから、チは風のことと解してよいと思います。アユチのチも風のことで、アユノカゼと読み、解釈してよいでしょう。

アユはアイ、アエと同義語で、ものが熟すること。また、御馳走のことをいいます。能登半島に残るアエノコトの民俗行事の次第をみる時、この語のもつ語義も理解できると存じます。

民俗学者柳田国男は、著書「海上の道」の中で、アユは浜に住む者が古くから遣っていた言葉であり、アユノカゼは沖から海岸に向かってまともに吹いてくる風であって、東の風とは限らないと言っています。アユは数々の海を渡ってきた船を無事に入港させる風、また、海から色々な珍しい物をもたらした渚に向かって吹き寄せる風のことで、珍しい物を吹き寄せて渚に住む人々の生活と心を豊かにした風が、アユノカゼであったと言ってい

ます。

古代の熱田から南にのびる海岸線には、めでたき、珍しき物をもたらす風が吹き寄せており、この地方ではその風をアユチと言っていたのではないか、よってその風の吹き寄せる海岸線を「あゆち潟」と呼ぶようになり、その名を後世に残したのではないかと言っております。

万葉集に高市連黒人の歌、「桜田へ鶴鳴きわたる年魚市潟潮干にけらし鶴鳴きわたる」と、詠み人知らずの一首に年魚市潟を読みこんだ歌があります。

熱田の宮は、有数の肥沃さを誇る濃尾平野を扇として、その要（カナメ）にもあたる位置にあります。要が強ければ強いほど団結は固いものです。また、めでたき、珍しい物（海の幸）をもたらす風、沖に漁に出た舟が入港しやすい風が吹いていた海岸線に位置します。地理的にまたとない好条件を備えた位置と土地柄に熱田の宮が鎮座されたことは、熱田の宮の鎮祭を考える時、まことに意味深いものがあると存じます。

次に、蓬莱・蓬州・蓬莱島（蓬ヶ島）と呼ばれた熱田の地から鎮座の条件を考えてみたいと思います。

蓬莱は、もともと中国の伝説にある三神山（サンシンセン）（蓬莱、方丈、瀛州（エイシュウ））の一つで、東海の中に

あって仙人が住み、不老不死の地とされた霊山でありました。司馬遷の「史記」には、秦の始皇帝は徐福という仙術士を三神山に派遣して、不老不死の仙薬を求めさせたとあります。

日本の蓬莱とされる地は二十余ヶ所ありますが、その中でも富士、熊野と熱田が最も名高く、熱田には不老の薬を求めんと徐福が上陸したという記事が惟尚得岩（イショウトクガン）（室町時代の僧）著の「東海瓊華（ケイカ）集」にあります。

蓬莱の想像図は、東京国立博物館所蔵の「蓬莱山蒔絵袈裟箱」（平安時代重要文化財）に書かれているように、大海を遊泳する大きな亀の上に、奇岩怪岩が巡り、老木が生い茂るものであったと思われます。

「熱田宮秘釈見聞」（南北朝）には、熱田の宮の地下に金亀が住み、その亀の背に大宮（本宮）が建てられた、頭の部分に源太夫社（摂社上知我麻神社）、頸の部分に八剣宮（別宮）、尾の部分に高蔵宮（摂社高座結御子神社）が建てられ、この熱田の宮を蓬莱島というと記されています。この記事と同じように、巨大な亀の甲羅の上に熱田の宮は建つということが「尾張名所図会」（江戸時代）の亀井山円福寺の項に見えます。

熱田が蓬莱の仙境であり、蓬莱島は巨大な亀の上にあるということを、かようないい伝

えによって伝播しようとしたのでしょう。更に、それを裏付けるように熱田神宮周辺の寺院には、亀のつく山号（大亀山、亀宝山、亀眼山、宝亀山、亀腹山、亀足山、金亀山、亀命山、亀岳山、亀井山、亀頭山等）が多くありますし、熱田神宮に奉納になっている宝物の鏡、鏡箱等には松、亀、鶴、浜、竹と、おめでたい図柄の蓬莱鏡が多くあります。

こうした伝承と熱田の地の背景を考え併せてみますと、あゆち潟に面し、老松、古杉の生い茂る熱田の森が、海に岬のように突き出て、靄がたつと雲上に小高く浮かんで、さながら島のようにみえる姿が、往来する旅人の瞳に、音に聞く蓬莱として写ったことから、徐福の上陸の地としてまことに相応しい場所であり、蓬莱島と擬せられたのでしょう。また、太古、尾張国造の館、大高氷上山の地より北方を望めば、海上に蓬莱の仙境とおぼしき熱田の森が望め、その地に熱田の大宮を定めた経緯も何となく理解できるような気がいたします。更に、日本書紀に蓬莱山を「トコヨノクニ」と読ませています。伊勢の神宮の御鎮座について、天照大御神様は「是神風伊勢国、則常世之浪重浪帰国也、傍国可怜国也、欲居是国」（この神風の伊勢の国は、すなわち常世の浪の重浪よする国なり、この国はうまし国なり、この国におらんと思う。）と申しております。常世国は日本でいう理想郷です。伊勢、熱田の地に地理的条件が備わっていることに、神様の御鎮座の社地として定められ

た所以を感得せざるを得ません。

鎌倉末期の比叡山の僧、光宗の「渓嵐拾葉集（ケイランシュウヨウ）」に「蓬莱宮は熱田の社これなり、楊貴妃今熱田明神これなり」という一文があります。これは熱田に楊貴妃の伝承があったことを物語るものです。

室町中期成立の「雲州樋河上天淵記（ウンシュウヒノカワカミアメガフチノキ）」の記述にストーリーをつけてみますと、次のようになります。

唐の六代皇帝「玄宗」が日本侵略を企てたのを日本の神々が察知し、すぐ八百万の神々を招集してその対策を相談されましたが、大唐が相手ではなまやさしい方策では防げそうにありません。この際、熱田の大明神に御出馬願うほかに方法はあるまいと、衆議一決されました。そこで熱田の大明神は支那へ飛び、楊貴妃に姿をかえて玄宗の後宮に入ることになります。後宮の美妃三〇〇〇が色あせてみえたほどの艶麗さで、楊貴妃はたちまち玄宗の心をとらえ、「地にあっては連理の枝、空にあっては比翼の鳥」と誓うまでになります。当然、玄宗皇帝は日夜楊貴妃の御機嫌うかがいに忙しく、日本侵略などということをすっかり忘れてしまい、政治をもかえりみなくなり、その虚をつかれ、反乱を起こした安禄山によって長安の都はおとしいれられ（七五九年）、玄宗皇帝は蜀に逃れ、楊貴妃は逃げる

途中、馬嵬坡（バカイハ）で殺され世を去ります。これで玄宗が日本を攻める心配がなくなりましたので、任務完了と大明神は安心して、もとの姿にかえって熱田へお帰りになったという筋書きです。

この熱田大明神が楊貴妃に化身したという伝説により、〇楊貴妃はもと神州のまわし者、〇日本を攻めなさるなと貴妃は言い、〇玄宗は尾張ことばにたらされる、〇三千の一つは熱田へ御遷宮、などの川柳が読まれています。

川柳が庶民の文芸であったとすれば、これらはいかにこの伝説が広く世に流れていたかを物語るものといえます。

これまでの話は前編で、この後編は、楊貴妃を失った玄宗は、一度は楊貴妃を見殺しにしますが、なんとしてもおもい切れなく、あれこれと楊貴妃のゆくえを探し求めた結果、不老不死の楽園東海の蓬莱にいることがわかります。そこで使者を遣わして呼びもどしてこいと命じます。使者は苦労の末、やっと蓬莱である熱田の宮へ辿り着く、そして東門（春敲門）の扉をたたいて楊貴妃こと熱田の大明神に玄宗の意を告げます。玄宗を骨ぬきにして日本侵略の野望をくじき、立派に目的を達成して帰国された熱田大明神は、もともと天上界に住む私は、仮に地上へ下っていたのだから再び地上へ戻る訳にはいかぬと告げ、使

者を玄宗の許へ帰すわけです。

この伝説が、さも真実の如くに墓まで出現します。

室町中期の僧、万里集九（バンリシュウク）が文明十七年（一四八五）九月九日、熱田に立ち寄り楊貴妃の墓に詣でた時の詩が「梅花無尽蔵」に残されています。また里村紹巴（ショウハ）も「富士見道の記」に、永禄十年（一五六七）八月八日熱田に参詣、墓を訪れ、「いささかにしの方に、楊貴妃のしるしとて、五輪石塔苔に傾て立たり」と記しています。熱田神宮に残る「享禄古図」（一五二八～三一）には正殿の西北に五輪塔が描かれています。しかし、将軍綱吉公により貞享三年（一六八六）の御造替がなされた折、荒唐無稽な伝承があってはかえって神威を傷つけるとされ、撤去しております。

楊貴妃の伝説は、唐の詩人白居易の「長恨歌」を下敷きにしてできていると想像できますが、その筋書きを引き写したものであっても、また、如何に熱田大明神との結びつきが荒唐無稽であるにしても、この伝説が生まれ、幾百年にわたって広く浸透していった背景には、この伝説を受入れて育てあげた土壌があったはずであります。つまり、熱田の大神様なら、このぐらいのことはあっても当然だ、という信仰の一面があったことは見逃してはならないと存じます。

熱田神宮の中世の信仰の背景の第一は、熱田を蓬莱島とする信仰です。秦の徐福が不死の霊薬を求めてきたといわれる蓬莱は、不老不死の神仙が住む国であり、幸福に満ちた仙境であると考えられておりました。熱田の宮が蓬莱だとされたことは、ここが不老不死の聖地であり、いいかえれば、大神様の神徳が人間究極の願望である不老不死にさえおよぶと信じられていたことを示しているものと思うからです。

近世の学者の中には、手厳しい批判をする人もおりますが、その批判を受けながらも、六～七〇〇年の間、絶えもせず流れてきた伝承の背後には、大神様のお力を戴ける場所こそこの世の楽園であり、人間究極の願望をかなえて頂けるという大神様への信頼と敬仰の一面が存在していることを無視することはできません。

第二は、熱田大明神が楊貴妃になって唐土へ飛んだのは、日本の危機を救うためであったとする点です。楊貴妃の伝説があらわれてくる時期は、蒙古襲来（元寇の役一二七四・一二八一）の後の国家を守るという意識が高まりをみせた時期であります。よって、熱田の大神様は国家をお守り下さるのだという信仰が、この頃の人々の心に根強く染み込んでいたと考えられます。熱田神宮の祭典の中にも、神輿を西門に出し、西方の皇居を遙かに望んで、皇室の御安泰と天下の太平をお守りになることを約束される皇城鎮護（神約祭）

の祭。また、平将門の乱を平定されるために、大神様自らお出ましになられたとする神事が伝わっていることは、熱田の大神様が日本の守護神、国家鎮護の神だという信仰の深さを物語るものであり、大神様に寄せる限り無い民衆の信頼をも窺うことができます。

第三は、熱田大明神が絶世の美女になったという点です。この伝承の肝要な点は、大神様が美女に化けて使命を達したというところにあります。この話ですぐ思い出されるのは熱田神宮の御祭神の一柱、日本武尊が女装して熊襲を征伐されたことであります。日本一強いと誇っていた熊襲の首領を、武力で討ちはたすことは甚だ困難でありました。そこで尊は女装して娘になりすまし、首領の油断をみすまして討ってしまいます。この女装の尊はたいへん美しかったので、熊襲はすっかり騙されて、油断しきっていたのであります。こうした日本武尊の御事績、御生涯は社頭に詣でる人々によって常に回顧され、偲ばれたことでしょう。その尊の姿が無意識のうちに蓬莱の信仰とも、国家鎮護の信仰とも重なりあって、いつしかこのような楊貴妃伝承が纏めあげられてきたのではないかと考えられます。

これまで話してきた蓬莱信仰、楊貴妃伝承は、沃野をひかえ「厚田」と記されていたように、肥沃な土地、また、御馳走を運んでくれる風の吹き寄せるあゆち潟の地理的背景に

よって生まれでたものであることは、御理解頂けるのではないかと存じます。

地理的条件に恵まれた土地には、ほのぼのとしておおらかな説話、伝説が生まれ、育まれ、心を豊かにしてくれる現象が生まれるものと思います。まさに、熱田はその見本のようなもので、熱田の歴史を繙けば熱田の宮に心を寄せた人々の姿が見えてきます。そんな姿から熱田の信仰の一端を垣間見ることができるのではないかと考え、長々と拙い話をさせて頂いた次第であります。

御静聴を頂き、ありがとうございました。

「お神酒あがらぬ神はない」

―― 松尾の神や永遠に守れる ――

生嶌經和

お酒の飲み方にもいろいろあるようです。昔なら、冬は熱燗、夏は冷たくひやしたビールというのが定番でした。最近ではこうした日本人のお酒の飲み方も大分変わってきています。今は、家庭に帰っての晩酌でも、飲み屋さんでも、「とりあえずビール」というのが、まずお決まりのコースのようです。これにはいろいろ理由があるそうで、「仕事のあと、乾いた咽喉を潤すのに最適」、「さっぱりとした気分になる」とか、その爽快さが好評の理由のようであります。そのほか、「熱燗へのウオーミングアップ」「咽喉のアルコール消毒」とか、人それぞれの思い入れがあるようです。いずれにしても「とりあえず」咽喉を潤し一息いれたいというのが、酒飲みの本音のようです。

ある酒屋さんのキャッチコピーに、「ビールは咽喉を潤し、お酒は心を潤す」というのがありました。なかなか言い得て妙である、と感心をいたしております。ビールの咽喉ご

しの爽快感は最初に申した通りでありますが、いざじっくりと腰を据えて語り合ったり、胸襟を開くにはお酒が向いているのかなと思われます。

さて、「お神酒あがらぬ神はなし」という皆様おなじみの諺にありますように、神様とお酒には、昔から深い関わりがあります。松尾大神様はご承知のように、古来「お酒の神様」「醸造の祖神」として、全国から幅広い信仰を集め、現在も日本酒に限らず、酢・味噌・醤油、またビール・ワインに至るまで数多くの醸造家・酒造家に崇敬されております。

毎年の御例祭と醸造祈願の祭に、大蔵流・茂山社中によって奉納されます狂言「福の神」には、「松尾の大明神は、神々の酒奉行、是へ進上申さねば、世の神々の受取らせぬやい」という一節があり、室町時代には既に全国的な信仰を集めていたことが窺われます。

この信仰のもととなる数々の故事伝承が伝えられていますが、例えば、

神代の昔、八百万の神々が分土山（松尾山）に集い給いて、神議りをされた。しかし、当時はまだお酒というものが無かった。そこで松尾大神が、山田の米を蒸し、御手洗の泉より湧き出る清らかな水を汲み、一夜にしてお酒をお造りになり、大杉谷の杉の木でこしらえた器で、神々を饗応せられた。神々は、

盡せしな甕の酒を汲上げて豊の円居をするぞたのしき

とうたわれ、大いに喜ばれ給うた。
という故事が伝えられています。

また、聖武天皇の御代、天平五年（七三三）、社殿背後の御手洗谷より霊泉が湧き出た時、松尾の神の託宣があり、「諸人この霊泉を飲めば、諸病を癒し、寿命を延ばすことを得べし。また、かの水を以って酒を醸し、我を祀らば、寿福増長・家門繁栄すべし」と仰せられた、とあり、以来酒造業に従う者、当社に祈願を籠め、この水を汲んで持ち帰ること、あとを絶たぬようになったと云われております。

これは、現在も「亀の井」という湧泉が境内の奥深くにあり、酒屋さんが参拝の折に汲んで帰られ、酒の元水として混和して用いられるという風習が今も残っています。

実際に醸造神と仰がれるようになったきっかけはと申しますと、松尾社は、千三百年前の大宝元年（西暦七〇一）に秦氏が勅命を受けて、現在の地に創建したものです。秦氏は、5世紀頃に大陸から移住してきた渡来民族です。彼らはこの地に定住し、山城・丹波の国の開拓に従事し、河川を治め、農林産業を興した技術者集団でもありました。その秦氏がもともと松尾山におられた神様を、自分たちの氏神として信仰したのが始まりとされています。

松尾の神様が、平安京の鎮護の神として、朝野の尊崇を集めたのも、彼らが大陸からもたらした文化、経済力・技術力が大きく貢献したものといわれております。その数多くの技術の中に、酵母を用いた酒造りの技術があり、それが松尾大社を中心に、全国へ広がっていったと考えられます。

「神」という言葉の語源には、古来数多くの説があります。その中に、「神」は「黴」、「噛む」、「醸す」が語源であるとする説があります。このことは、「口噛み酒」などがありますように、醗酵や醸造学の知識のない時代には、酒を醸すということは人力の及ばない神秘の産物に他ならなかったわけであります。このため、酒は人が造るものではなく、神が造るものとの認識が生れたといわれます。そして、「酒」は「神の醸したまうたもの」、「神からの賜り物」・「神の御業」として尊重されてまいりました。

一方、「お酒」という名前の由来はと申しますと、これもまた諸説ございます。

まず一番目は、「酒」は「栄え水」から、「サカエ」、「サケエ」、「サケ」となった、とする説。二つ目は、「栄えのキ」（キはお神酒のキ）から、キがカ行の転声でケ（サカエノケ）となり、これからノが取れ（サカエケ）、カエがつまってケとなり（サケケ）、ケケの重複がひとつにまとまり「サケ」となった。三つ目には、「さける」という意味から。お酒を

飲めば、風寒邪気を避けることができる。つまり「避ける」からきた、という説。また、酒のことを古語では「クシ」という場合もあります。「クシ」は「怪し」、「奇し」、つまり木や石のくぼみに落ちた果物などが自然発酵し、その液体を飲むとなんともいい気分になる、不思議なことだ、ということから、「クシ」と呼ぶようになった。ちなみに、酒の神様のことを「クシの神」（久志能加美、久斯榊）ともいいます。どれをとっても、なるほどお酒の功徳をよくいい表しているといえましょう。

「酒こそは千代をやしなふ生薬　松尾の神やとはに守れる」という和歌の額が松尾大社の社務所の一隅に懸かっております。これは、明治時代の出雲大社の大宮司であられた千家尊福翁の歌であります。この方は、貴族院議員、東京府知事、司法大臣も勤められた著名な方でありますが、皆様よくご存知の「年のはじめの　例とて、終なき世の　めでたさを～～」という「一月一日」という儀式唱歌を作詞されたことでも有名でございます。

先の「酒こそは千代をやしなふ生薬　松尾の神やとはに守れる」という和歌は、「酒というものは、千年の齢を保つ不老長生の薬である。何故ならばその酒を醸し造られた松尾の神が、行く末かけて守られているから」という意味であります。

「酒」は「栄える」という景気のよい言葉でも有ります。どうぞ皆様、冷たいビールも

良し、熱燗も良しですが、くれぐれも飲みすぎには注意をしていただきまして、松尾の大神様の恩頼を充分お戴き下さい。

（松尾大社　権宮司　生嶌經和）

常識

村田和弘

幼い子どもを持つ親は、子どもによく、次のようなしつけをします。
「はい」といえるようになりなさい。
「ごめんなさい」と謝りなさい。
「わかりません。教えてください」といいなさい。
そして「ありがとう」といえる子になりなさい。
これら四つの言葉は社会生活の基本で当たり前の事、言い替えれば人間生きて行く上での常識なことだと思います。
どんな人でも幼い時から、家庭の中や幼稚園・小学校等で繰り返し言われてきた事ではないでしょうか。言い方を変えれば、「素直な心になりなさい」という親の願いがこめられていると思います。
昔から「親の背中を見て、子は育つ」と言われてきました。親の行動がよき見本となって、

子どもが成長するからだと思います。しかし今の世代、昔の大家族の様に親子・家族で過ごす時間が大変少なくなっています。今の時代、大半が「勤め人」になり、少子化の問題、妻はパート、子どもは塾に通いカギっ子になり、祖父母は老人ホームへ入所、結果、昼間の家には誰一人住んでなく家庭での交流もなく、家が「ホテル化」している状況。不登校、不出社など、家庭をとりまく問題が多く指摘されています。これも、大東亜戦争の敗戦の後、急激な高度経済成長に世の中が豊かになった後遺症だと言っても過言ではないかと思います。お金にばかり気を取られ心の教育を忘れていた日本、教育には学校教育と社会教育、家庭教育がありますが、今こそ家庭教育の大切さを取りもどさなくてはいけません。

さて、大人になった私たちは、名前を呼ばれたり、用事を頼まれたら、すぐさま「はい」と答えているでしょうか。公衆のなかで、あるいは家庭内の身近な人に「ごめんなさい」といえてますか。そして、年を重ねても「わかりません。教えて下さい」と謙虚に質問できるでしょうか。

最近外祭に出た時の話しですが、地鎮祭の中で施主の方に鎌を渡し草を刈る作法をして頂く時がありますが、その時の出来事です。普通、鎌を持って物を刈る時には鎌を手前に引くようにして物を刈るのが当たり前だと思うのですが、この施主の方は鎌を持ち外へ押

し出す様にして使われたのです。普通、鎌を見たら刃の付いている方が切れるのだから刃の付いている側で切るのが常識だと思います。施主の方も家を建てる年齢ですから二十歳そこらの若い方ではなく四十歳を越え子どもも何人かおられる立派な方なのですからそれくらいの事は知っていてもおかしくはないと思うのですが・・・。

子どもの教育は全て学校にまかせっぱなしで家では何も教育を行っていないのが今の世代の現状だと思います。昔であれば、おじいちゃん・おばあちゃんと一つ屋根の下に住み、しても良い事悪い事等、色々な事をじかに教わり覚えていった事だと思いますが、今はどうでしょう?。都合のいい時だけ物事を頼み用事が終われば「はい、さようなら、またね・・」

事情はともかく、こんな事でいいのでしょうか?。

我々神社界では、国旗掲揚・国歌斉唱は当たり前の事でありますが、私の住む広島県での学校教育現場では大変はずかしいことながら色々と問題が起こっています。

平成十一年に国旗・国歌についての根本法が成立し、教育現場における国旗掲揚・国歌斉唱の期待が大きくふくらみかけた矢先の出来事でした。

今年三月九日、尾道市のある小学校で民間校長先生の自殺事件がおこってしまいました。

広島県では昨年、全国最多の民間人校長として七名の校長先生が起用され、「学校に新風を吹き込む」という華やかさの陰でこの悲劇は起こったのです。

この亡くなった校長先生は、広島銀行東京支店副支店長から小学校長に転身された方で、就任以来国旗掲揚や年号表記の問題をめぐって教職員と激しく対立し、疲労困憊（こんぱい）した後、校内で自殺されたという事件です。

公立学校において、特に校長を悩ませているのは、入学式・卒業式等の儀式における「国旗」「国歌」の扱いであり、「学習指導要領」には、儀式においては国旗を掲げ国歌を斉唱することを求めているのに、学校現場においては「国旗」・「国歌」に対し異常と思えるほど反感を抱いている教員が少なくなく、職員会議で「校長！」「教頭！」などと野次が乱れ飛ぶのが今の広島県教育現場の現実であります。

当然、私たち神社界も指をくわえてただ黙っているわけではありません。

私の兼務する高乃宮神社（石井寿夫先生の胸像が建立されている）に近くの小学生が、社会勉強で勉強に来られます。神社の境内には県下で一番の大きさと言われる「山のさざれ石」国歌の二番で歌われている「海のさざれ石」と両方のさざれ石が奉安されているという事もあり小学校の生徒・学校の先生・保護者等、色々な方が参拝され勉強し宮司の話を

聞いて何故ここに両方のさざれ石があるのか・・・　色々と生徒を始め参拝者の方に教化活動を行っています。

当たり前の事、当然の事、常識な事が忘れ去られ、荒廃してしまった今、我々神主の出番であり神社神道の力が必要な時であります。

明治天皇御製

たらちねの庭の教えは狭けれど　広き世にたつもといとぞなる

（広島県　長束神社　祢宜）

共生

畠田明彦

本日は「共生」と題して、自然愛護を通じての青少年、特に小学生に対する教化についてお話をしてみたいと思います。

現在、地球の温暖化が深刻化する中で、世界中がエコロジーに取り組んでいることは皆さんご承知のとおりです。最近皆さんがご奉仕されている神社の杜の環境は如何でしょうか。酸性雨による森林被害、有害廃棄物による汚染、開発による樹木伐採等、憂慮すべき環境破壊を身近に感じておられる方も少なくないと思います。このような環境問題は汚染或いは破壊防止が先決問題である事は言うまでもありませんが、同時に地球に優しい環境づくり、即ち活力ある森林の造成と保全が必要ではないでしょうか。

森の中でも神様が坐します森を「鎮守の杜」と申します。そこは信仰の場であると同時に日本人の心のふるさと、心のオアシスでもあるのです。この「鎮守の杜」を守り育て後世に伝えて行くことは、単に自然保護だけに止まるものではありません。日本人の「心」

を守り伝えていく事に通じると私は思います。

さて前置きが長くなりましたが、皆さんは「緑の少年団」という組織をご存じでしょうか。これは国土緑化推進機構の提唱により、次世代を担う青少年に、緑化推進活動を通じ、緑の大切さ、生命の尊さを認識させ、日本の美しい自然を守り育てるため結成されたもので、全国植樹祭でも活躍しています。

現在全国で四、一三一団、三二九、六三八人、京都府下では五八団、一、七九六人の小学生及び中学生が活躍しています。私の奉職している松尾大社でも、鎮守の杜の保護と子供たちへの教化の一環として、去る平成八年十一月に「まつのお緑の少年団」を結成致しました。そして私がその初代団長を務めさせて頂きました。

少年団の活動を簡単に説明すれば、二、三ヶ月に一度、土曜或いは日曜を利用して、約二、三時間の活動を致します。内容は自然観察、バードウォッチング、緑の募金、植樹、清掃奉仕等です。また一泊二日のキャンプや野外炊事も行います。出席のノルマはありません。ボーイスカウトより自由が利く案外ラフな組織です。

しかしながら、その結成には大変苦労致しました。結果的に当少年団は七〇名の団員でスタート致しましたが、正直言ってご造営の寄付金を集めるより子供たちの確保の方が困

難を極めました。その理由はただ一つ。子供たちが多忙過ぎるのです。私が小学生の頃は土日と言えば、〝遊ぶ〟と決まっていました。ところが今は塾です。塾があるから土日はだめ。それが断りの理由です。「勉強の気分転換のために丁度いいですよ。」と勧誘してもなかなか思うようには行きませんでした。

そして約五ヶ月間、氏子崇敬者や市会議員の協力を得て各方面に団員を募集し、漸く結成式に漕ぎつけたのです。

何度目かの活動をしている時に感じた事があります。自然観察の最中でした。ある団員が蟻を踏みつけて遊んでいるのです。もちろん私も幼い頃にそういった経験はありますが、それには害を及ぼされるのを防ぐと言う理由がありました。又面白半分で殺してしまった時には後悔の念がありました。しかし、今の子供たちの行為には蟻も「生物」であると言う感情が欠如しているように思えます。何の感情もなく殺しているようにその行為からは受け取れたのです。

思えば最近の犯罪は凶悪かつ残忍なものばかりです。神戸の小学生殺人事件も然り、池田小学校の事件も然りです。猟奇を極めています。今は「心がない」「心が闇」のサイコパスが横行する時代と言っても過言ではないでしょう。その要因は一言では言えないで

しょうが、やはり幼少期の環境と教育が影響している事は確かだと思います。そのような中で神道人として何が出来るでしょうか。青少年、特に無限の可能性を秘め、まだ素直に物事を受け入れられる心を持った小学生に対する教化こそが重要ではないかと思います。

神道と自然は切っても切り離せないものです。自然の驚異を体感し、自然を学び、自然を尊び、自然を愛する事でそこに神の息吹を感じる。全ての命は神様から頂いたもの。そしてそれは自然の優しい抱擁と厳しい叱咤の中で、遠い祖先から連綿と受け継がれたもの。人は決して一人で生きているのではない。家族や友達、そしてなにより「自然」に抱かれ生きている事を認識させなければならないと思います。

自然と触れ合うことにより、神様を感じ、命の尊さ感じてもらえれば教化一歩前進と言えるのではないでしょうか。今後この「緑の少年団」を通じ子供たちの教化を更に展開したいと思います。

（京都府　松尾大社　権禰宜）

乃木大将と　私

――御神護拝戴奇蹟大霊験――

相原牧雄

私は万物の霊長の人間に、生れさせて頂きました上に、天地八百万（あめつちやおよろず）の神々様より、まことに洪大無辺の御神徳を賜りました。

お蔭様で数えて九十才！このように元気潑剌としております。

本日は、乃木の神様より、お守り戴きました、数多い大霊験の内の、二つの実話を畏みて申し上げます。

私は、終戦の翌年七月五日に、中支那の南京から復員帰国、その日の真夜中に、乃木の神様は、私の夢枕にお立ちになり、「戦争に負けたというので、戦死者や戦病死者は、犬死だっ！と、暴言を吐く者が大勢いるが、あれで良いのか？黙って聞いているのか！」と仰せであります。

毎晩「そうでございます」と、申し上げながら・・・・泣きました。

その真夜中のお声は、その年も暮れて、昭和二十二年の春まで続きました。そこで、心に深く覚悟致しました。「全国の英霊を御慰問し、各神社に巡拝して、日本の再建を御祈りしよう！」と、決意。

家族には「適当な職業を見出すために、戦友の家々を訪ねたい」と納得させて旅立ちました。それは昭和二十二年四月三日、神武天皇祭の佳き日でありました。

翌日、伊勢市に到着、外宮内宮、神都（かみのみやこ）の各神社に参拝、涙と共に祖国の再建をお祈り申し上げました。

明る日に上京、皇居二重橋前で土下座して号泣、明治神宮、靖国神社に黙祷、四月六日夕方、乃木神社に参拝、祖国の再建、皇室の弥栄、英霊の御安鎮を黙祷申し上げつつ泣き伏し、その夜は境内芝生の上に、正座合掌、野宿参籠の祈願中・・・・真夜中の夢枕で、ご神霊の乃木大将が「明日は成田へ行き、断食祈願をしなさい。必ず道は開ける」と、勿体なきお声を頂き、夜明けと共に顔と手を洗い清めて、御神前に参進、心からの御礼を申し上げました。成田のお寺に辿り着いたのは七日の夕方でありました。

大きな板の表札に、「成田山　神護新勝寺」とあります。全身全霊が感動！神秘霊妙！です。此処はお寺なのに「神が護る！新しく勝つ！」と書いてあります。・・・・そのと

き、改めて弘法大師の御威大！と、乃木大将神霊の御愛念！に、合掌を捧げました。「あ あ大日本は神の御国なり！」と、心の中で雄叫びました。

翌日より断食を開始！「速みやかに日本国を再建せしめ給え！清らかに、わが大和民族を中心とする、万国永遠の平和を、成し遂げしめ給え！」と大きな大きな、お祈りを始めました。

生水だけを頂き、一日数回は井戸水を全身に浴びて、心も躰も清め、高い石段を登り、本堂の大前に端座してご祈願の毎日です。神佛の広大なる御力を賜りまして、三七―二十一日間の、大祈願の断食行を完遂させて頂きました。

満願は、昭和天皇様、御誕生日の佳き日の朝です。天地一切の神佛に心からの、御礼を申し上げました。

安心して夢うつつの時、乃木の神様から、「一念凝ったら何でも出来る！」と、お告げを戴きました。私は「神様！恐れ入りますが、もう少し長い御神示を賜り度い！のでございます・・・」と申し上げますと、「この言葉、短かけれども噛みしめてみよ！」と、お優しい勿体ない御声に、「ハイ」と言上しつつ平伏して、「有難とうございます！」と、幾度も、厚く御礼を申し上げました。この勿体ない御神示拝受を、お寺の総代さんで製薬

会社の田村社長様は、とても祝福して下さり、ご親切に、「貴殿が、英霊ご慰問の旅に出られての、汽車賃や御食事代には、お不動様のお告げで調合製薬した特効ある胃腸薬『恵日錠』を、入用と思われるだけ、幾らでも持って出て下さい！ご遠慮なく。」と、実に、愛国的なお言葉を賜りました。お蔭様で資金面での心配なく、六ヶ月の長旅が、無事完成！したのであります。神佛は実在せられて、天地一切を、見通しされておられます。私は勿体なくも、何時でも何処でも、守りに護って頂きました。

○　○　○　○　○

それから旅に出て、野や山に伏しながら、村々を巡り、英霊の御安鎮と御遺族の勇気恢復のため、祝詞を奏上し御経をお唱え申し上げて感謝され、人間不死の霊験談を報告！神社に参拝して、只管、祖国再建祈願の日夜でございました。

夏も過ぎて九月十三日になりました。「ああ！今日は、明治天皇様御大葬の日！乃木大将は御殉死！神の世界にお帰りの日！」と思いまして、利根川河口近くの海岸で、太平洋を眺めておりますと、全身全霊が動き出し、砂浜の上に、杖、白衣、下着の総てを置き、素っ裸で、夜明け前の暗い海の中に、さぶさぶと入りまして、身も心も洗い清め、畏みて

アマテラスオホミカミ・アマテラスオホミカミ・・・・・と最尊貴な大御神様の大御(おおみ)

名奉唱に全身全霊を捧げ奉りつつ、時間も空間も忘れてお祈りしておりますと、・・・・ああ「日の出！」であります。

その時！正に神の御声「汝の求めている古神道説明の書が、二軒目の家にある。拝借して読みなさい！」との仰せ―有難い御言葉通りに、二軒目の金井様より、神道霊書十五、六冊をお借りして、村の神社に参拝祈願。終ると、拝殿の下に防空壕跡の穴倉があります。謹みて祈念―そこに入り、それから七日の間、読書勉強に無我夢中。時々持参の生米を少し噛り、穴倉から一歩も出なかったのが、天佑神助！でございました。

その翌日からは大型台風キャサリーン号が大暴れで、全く無惨極まる大地獄！ああ死者四千人―。何時もの如く野宿の旅をしていたら無惨！にも、必ず死んでおりました。

乃木の神様！八百万の神々様！に守って戴きました私は、只管、神明に奉仕させて頂き、神の国日本の真姿顕現に、微力を捧げて、有意義なる人生を、続ける覚悟でございます。

合掌

（広島県　切幡神社　宮司）

感謝の心

村田佳子

昨今、家庭の中に様々な問題を抱えた御家族が大変多いように感じます。子どもへの虐待、老人への虐待、夫婦間での争い、引きこもり、暴力と、挙げればきりがありません。これらは、何らかの原因から起こった心の問題を、克服しないと、解決が難しいように感じます。

心に問題を抱える子の親は、自分達の力だけではどうしようも出来ないと感じた時、精神科、神経科に相談に行く事も多いと思います。私の知人のある夫婦が、子どもに精神的面で問題を抱え、お医者さんにかかった時の事です。一通りの診察の後、その医師は、

「薬さえ飲めば直りますよ。だけど、御家族も薬を飲まなければいけませんね。」

と言ったそうです。結論から申しまして、この家族は、益々精神的に辛い状態へと陥ってしまいました。先づ第一に、自分は心の病ではないと思っている子どもが、病人というレッテルを、自分自身が受け入れる前に張られてしまった事。そして第二に、子どもだけの問

題だと思っていた両親が、あなた達も異常な状態であると決めつけられてしまった事。当然医師の言う事を信じる事が出来なかったそうです。薬が有効なのは、私も十分承知しています。しかし、あなた達はおかしいと言われて、はいそうですかと答える人が何処に居るのか。

このままでは家族が崩壊してしまう。駄目になってしまう。どうか助けてほしいと依頼を受けたのでした。

所謂、引きこもり、不登校の子どもを抱えた家族は、精神的にも肉体的にも本当に辛い思いをします。口論が殴り合になる事もしょっ中で、夫婦の疲労は見るに耐えないものがありました。それにも増して、心の奥深くに問題をしまい込んでいる子どもは、どうやって助けてあげれば良いかと、私自身も悩みました。

私が神主である事を御存知の家族ですので神主として真剣にこの問題に向かいました。この子は、中学の時不登校となり、高校にも通っていませんでした。常に家に居る状態が五年以上も続いていましたが、最近、やっとの思いで通いはじめた通信制の高校を、止めると言うのです。

「自分は成人したんだから、学校を止めるのに親の許可なんていらない。自分の意志で

決めるんだ。親なんて関係ない。」この言葉に対して、母親が言ってはならない事を言ってしまいました。

「親は関係無いというのなら、だったらこの家を出なさい。お母さんはもうあんたの面倒を見たくない。」

すがり付くような子どもの目は、決して家を出たいわけではないと、必死で訴えていました。私は子どもに、親の他に自分の事を真剣に考えてくれる人は居ないのだという事と、その親に協力してもらう為に、自分の気持ちを伝えなければならないという事を一生懸命に話しました。そしてこの家庭に、何が足りないのか。答えは一つ。

感謝の心です。

〃お父さんやお母さんに感謝してるかな。感謝してるかなんて難しく聞かなくても、

「いつもありがとう。」

っていう気持ちで生活してるかな。一日に一度でいい。お母さんにありがとうって伝えてごらんよ。やっぱりね、人はどんなに頑張っても、一人では生きられないんだ。確かに、この世に生まれて来たら、いつかは自分の力で生活する努力をしないといけない。あなたは今、自立したいって強く願っているよね。それは、人間として当然の事だし、そうしな

くてはいけない事だと思う。だけど現実には今すぐには無理だよね。あせらなくていいじゃない。お父さんやお母さんは、助けてくれるし、協力もしてくれるよ。だったら、ありがとうって言って甘えようよ。自分がしっかりと自立出来るまで、助けてもらおうよ。どう？

「ありがとうございます」

という気持で暮らせそうかな。人はね、自分以外の全てのものに、生かされて生きているんだよ。自分が今ここに居るのは、自分だけのお陰じゃないよ。支えられてここに居るんだよ。あなたも本当は、お父さんお母さんにありがとうって思ってるよね。

日本の神道ではね、全てのものを素晴らしいと感じて敬う事を信仰を通して教えてくれてるんよ。信仰と言ったら難しいけど、神棚は知ってるかな。神棚さんには日本の神様の中心の神様や、地域の神様、ご先祖の神様がお祀りしてあってね、そこは手を合わせて、自分が生かされているという事に感謝をする場所でもあるんだよ。神様は必ず、その感謝の気持ちに、そうかそうかって答えて下さるよ。それはね、いつも感謝の気持ちを忘れずにいると、どうもしなくたって自分の気持ちに素直になれるから。何が幸せかに気付く事が出来るのよ。

そして、神様が本当にいらっしゃる事が実感出来るといいね。

お宮参りだって、どうして出かけるのかね。赤ちゃんが産まれたら初宮参り、七五三って、先づ無事に産まれた事を感謝して、三歳、五歳、七歳と成長出来た事をあらためて感謝して、生かされて生きている事をお礼をしに、お参りするんだよ。

お正月だって、去年一年間ありがとうございました。今年もどうぞよろしくお願いしますって、神様にもだし、自分の周りの人にも言うんだよね。年が改まる時に、生かされている事に感謝をして喜び合うんだ。

そうだ。成人式には行かなかったって言ってたけど、お父さんとお母さん、着物も作ってくれたって言ってたじゃない。素敵じゃないの。せっかくだから成人出来たお礼を神様に奉告に行ったらどう?家族そろって神社にお参りに行っておいでよ。お父さんもお母さんも、本当に喜んでくれるよ。

それから、お父さんお母さん、是非、ここまで育ってくれてありがとうと、神様にも子どもさんにも感謝をして来て下さい。〃

六時間にも及ぶ説得の末、その子は、にっこりと笑ってくれました。

「お宮参りに行ってみようかな。」

そして私をありがとうございましたと言って送り出してくれました。私は、この子を説得

出来て良かったと思ったのはもちろんですが、何よりも、七年以上もこの子を見捨てず、見守り続ける両親がいるというありがたさを知り得た事に、感謝せずにはいられませんでした。

日本の心は感謝の心です。ありがとうございました。

（広島県　長束神社　権禰宜）

「お年寄りへのお願い」

武内弘康

先ず、この度私の言う「お年寄り」とは大東亜戦争の記憶がある方とさせて頂きます。

私は小学生の頃、「皆さんのお爺さんや近所のお年寄りの方で、戦争に行った人に当時の様子を訊きましょう。そして、授業で発表しましょう。」といったことがありました。その時に私は初めて、父にそのことを訊きましたが、父は、「そのようなことは人前で話すことではない。」と、叱られてしまいました。

私の父は大正十三年の生まれでした。そして、平成二年、私が高校一年生の時に他界しました。私は父が五十歳の時の子供ということもあり、非常に可愛がってもらいました。私の記憶の中で、叱られたことは殆どないような優しい父でした。

父の葬儀の後に親戚の人から聞いた話ですが、父は昭和十七年、十八歳の時に自ら志願し、戦争に行ったそうです。父は長男ということもあり当時の周囲の人達は止めたそうです。しかし、その葬儀の時、当時の父を知る親戚は、志願したことに対して、「あの時は

非常に勇敢だった。」と褒めていました。

現在の日本政府は、隣国との大東亜戦争に関する外交で非常に腰の低い姿勢です。私はそれが、決して「悪いこと」とは言いませんが、「情けないこと」だとは思います。

現在の十代・二十代・三十代の日本人は、どれだけ当時の戦争のことを知っているのか？殆どの人は学校で学習した程度しか知らないと思います。それも、小・中・高等学校の歴史の授業では、それぞれ僅か二・三時間程度しか学習していないのではないでしょうか。もちろん、私もその一人です。だからその外交姿勢が、「それでいいのか？それとも、それではダメなのか？」判断できないのです。しかし、お隣の大韓民国では、多くの時間を使い子供達へ戦争の歴史を教えている上に、徴兵制まであります。そのため、同じ世代でも、知識はもちろん、政治へ対する認識に至るまで、我々とはまったく違う考え方を持っているでしょう。

このままでは、これからの日本人は大東亜戦争とは何か？益々解らなくなっていくでしょう。これは大問題です。そうならないためにはどうすればいいのでしょう？一番大事なことは、もちろん学校・地域での教育です。しかし、それを教えなければならない立場にある学校の先生や、教育委員会に携わる人達がどれだけ理解し、どれだけの知識がある

のか?私の想像では、全体的に期待できる知識と理解度があるようには思えません。早い話、今後の教育機関に期待するのは難しいと思います。

もし、本当に学校での教育に期待することができないのならば、どうすればいいのでしょう?私は各地域での教育に期待するしかないと思います。現在、学校教育は基本的に週休二日制です。また、長い長い夏休みもあります。その休みの間に各町内会ではいろいろな催しを行っています。そうです、ここで「お年寄り」の出番なのです。

私達の世代が大東亜戦争について学ぼうと思えば、図書館などで読書をしたり、ビデオやDVDを見れば勉強できます。しかし、それは戦争を総括・総合した上での一般的なことであり、戦争を実際に体験した「お年寄り」の生の声を聞くことは、今後、時間が経つに連れてだんだんと出来なくなっていくのです。

どうか「お年寄り」は是非、各家庭で、各地域で、それぞれが体験したありのままの戦争を伝えていって頂きたいと思います。戦場へ行かれた方はそのお話を、空襲に遭われた方はそのお話を、疎開をされた方はそのお話を是非して下さい。子供達には、実のお爺ちゃん・お婆ちゃんはもちろん、幼い頃から接してきた近所のお爺ちゃん・お婆ちゃんの生の声が心に残るはずです。また、各地域の老人会では、小学校や子供会と交流を行って伝え

ていって下さい。

そして、我々神職は、それぞれの神社でその機会を作り、その場所を提供するなどの協力をしていくべきだと思います。

最後に、「お年寄り」は私の父のように無言で通さないで下さい。忘れられてはならない歴史は、絶対に忘れられてはならないのです。

（京都府　松尾大社　権禰宜）

神話に学ぶ

――よみがえれ剣の魂――

大野康孝

しきしまの　大和心を　みがゝずば　劔おぶとも　かひなからまし
身にはよし　はかずなるとも　劔太刀　とぎな忘れそ　大和心を

「劔」と題された明治天皇の御製です。

伊勢の神宮に次ぐ名大社、神代の往昔より連綿と三種神器の一つ「草薙劔（くさなぎのつるぎ）」を奉祀される熱田神宮に、神道講演研修の由をもって御神慮と大御心を仰ぎまつりつゝ、神の縁に導かれ、ひそかなる感激を胸にいだきつゝ、馳せ参じました。

手弱女に扮装して熊襲を討ち、天叢雲劔（あめのむらくものつるぎ）をもって蝦夷を平らげ、武勲輝かしくもあわれついには、白鳥と天翔られた雄々しき悲哀の大英雄・ロマンあふるゝ日本武尊！　そして尊の為に、その使命達成の犠牲とぞ走水の海に身を捧げ、海神の怒りを鎮められた大和女の大理想・弟橘媛との物語り、草薙劔の神名の御由来などなど…。

その遺された剣が三種の神器の一つとして『熱田大神』と斎き祀られ破邪顕正、千秋を

超えて今ここに鎮りますが、私はまた記紀に随所に躍動的に、かつ詳細に繰返し示された神の剣の弥業を拝しつゝ、殊更に、建速須佐之男命の雄々しき八岐大蛇退治の章が想いだされ、御神意が伺い偲ばれてなりません！

根の国の妣に会いたいと、青山を哭枯らし海川を泣き乾すまでに、荒れて凄まじきスサノオノ命は、父君イザナギノ命の禊祓の結果、天照大神・月読命と共に三貴神のお一人として聖なる使命をえて御生れになられました。

その禊祓いは、イザナギノ命御自身が必死蘇生の両刃の剣を我が身に突き付け、やはりまた、剣の性である秋水に身にゆだねられた深い厳しい、それこそ真剣きわまりなき大禊であつたものと拝します。

夜見の国より、必死の覚悟で十拳劒（とつかのつるぎ）を後ろ手にふりつゝ黄泉比良坂の幽顕の境を越え逃げ帰り来たりし命は、橘小戸乃阿波岐原にてのぞまれた禊祓いに、御身に付けし全てのものは投げ打たれましたが、大事なその大事な剣を放されたとは記述してはないのです。

その厳しい禊祓いによってお生まれになったタケハヤスサノオノ命は、しかし、高天原にて乱暴狼藉の限りを尽くし、自ら招く災禍の結果、ついには追放の刑罰を科せられ、鬚を切られ爪をはがれ、着の身着のまま蓑笠に身をやつして、耐え難き艱難辛苦を嘗めつゝ

諸国を流浪さすらうことになられます。

その想像を絶す、苦難にうち勝っての断々固たる禊祓い！まさしく生命がけの徹底した猛反省とよみがえりの決意。父君イザナギノ命の神業にならっての、吾が身にむけた必死蘇生の両刃の剣、剣魂の発動による大禊！

厳しい御神業の結果、かくしてスサノオノ命は玉鉾の道に目覚め、より勝れる雄々しく優しき武勇の神とぞ昂まり給いて、ついには猛き貴き剣魂を発揮されるのです。

八岐大蛇退治をなされたそのダイナミックな情景と描写は、胸躍らせ血を沸かせます。命はこゝに奇稲田姫を救わんが為に、即ち稲作文化の確立と国土の平定がためにぞと治山治水の大事業を成し遂げ、製鉄集団たる異民族、荒振る神等をも平らげられたのでした。青山を哭き枯らし、海川を泣き乾かすほどのすさび荒ぶる神より、治山治水植林の国土平定の大なる聖使命に目覚められ成し遂げられたと、記紀は語りかけてくるのです。

奇稲田姫を娶られるとともに、命は結果として後にまた、ロマンに満ちた悲哀の大英雄日本武尊の物語りをえて『草薙劍・熱田大神』と仰がれる大名剣を獲得して、鉄の文化をも掌中に治められたと、説き明かし展開してゆくのですが、実に奇しき神の摂理です。

そうして神話は、愈々ドラマチックに雄々しく優しく、此処よりまた日本民族かくある

べしとの理念と大理想を説き明かしゆきます。

倭は国のまほろば　たゝなずく青垣　山こもれる　倭しうるはし

今此処に熱田の大宮の御垣の内の杜深く、神代を想い混迷の現下を憂うとき、まさしく『古を稽みて今に照らす』―神話に学ぶ・よみがえれ剣の魂―と雄叫びせずにはおられません。御神意の奈辺にあるかを、ひそかに仰ぎ慕い、深く拝せずにはいられぬのです。

恐れ多いことですが、日本武尊が伊吹山で神のいかりにふれ、病をえて崩じられたのは草薙劔の御佩しを帯びず、剣魂にご油断が生じたからであったのでしょうか。それとも、あえて身をもって、剣を宮簀姫に託し『草薙劔』の御神意をお示しになったのでしょうか。私はこよなく日本を愛し、そうして日本刀を賞で賛じ、片時も離すことがありません。本日ここにも、倭姫大神とヤマトタケルノ命の故実に神ならって、愛刀に添えて火鑽金と火打石とを収めた革袋とを携行して参りました。

冒頭に明治天皇の御製を掲げましたが、その御教えを心より奉唱して止みません。

しきしまの　大和心をみがかずば　劔おぶとも　かひなからまし

身にはよし　はかずなるとも　劔太刀　とぎな忘れそ　大和心を

（熊本県　本渡諏訪神社　宮司）

祓ひあれこれ

市来忠恕

本日は「祓ひあれこれ」と題してお話させて戴きます。私はこの道に入って今年で五年目ですが、奉仕は月に一度か二度という限りなく無職に近い状況なので、未だに人様から職業を問われる事があります。私が「神主です。」と答えると、大抵の方は「あ～あ、これね？」と言いながら両手で大麻を摑んで左右に振る仕種をされます。ひと振りナンボだなと言った人もおりましたが、察するに、神主と言えば「お祓ひ」というのが皆さんのイメージのようです。

ご存じの通り、神社神道のお祀りは修祓から始まります。所謂お祓ひですね。祀りをする場所で併せて行うのを例としておりますので、これは祭式の中の一部だと思われがちですが、実は、祭祀執行に当たり、予めお供え物や参拝者などの罪・汚れを祓ひ除く事を目的とする行事です。大きい神社では別に設けられた「祓ひ所」という場所で事前に行われています。その起源については、祓ひ詞に「掛けまくも畏き伊邪那岐大神、筑紫の日向の

橘の小戸の阿波岐原に禊祓へ給ひし時に生り坐せる祓戸の大神等」とあるように、黄泉の国から逃げ戻った伊邪那岐の命が阿波岐原の清流で身につけていた杖や着物を投げ棄てて汚れを祓ひ、さらに水に漱いで黄泉の国で被った死の穢れの禊ぎをしたという神話故事に由来します。この際、清流に身を漱いだ時に、八十禍津日神と大禍津日神が生まれ、次にその禍を直す神として、神直毘の神、大直毘の神など九柱の神が生まれます。「祓戸の大神」と称するこれらの神の宿る神聖なる依代が、大麻というわけです。大麻を振る際に、私が「軽くお頭をお下げ下さい」と言葉を添えるのも、これでご理解戴けるかと思います。

お祓ひに限らず、神道祭祀の様式の準拠とされているものは、所謂神話と言われるものですが、これは古事記という我が国に残る最も古い書物の中の上中下の上巻の部分、神々の系譜で言うと、天の御中主神から天津日高日子波限建鵜草葺不合命までの記述の部分を指しています。暦も文字も無い太古の時代からの言い伝え、人の記憶に頼った幾つもの氏族の伝承などが神の意志の表象としてまとめられたもので、遠い祖先の暮らしと知恵がシンボリックに叙述されています。私には現代の誰も気に止めない日本人の習癖などの原点が、この物語の行間に潜んでいるような気がしてなりません。一例ですが、集団の意志決定の手続きや指揮、命令という観点で注目に値する件が「国生み」を命ずる場面で出て来

ます。

〈此処に天神諸の命もちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に「この漂へる國を修め理り固め成せ」と詔りて天の沼矛を給ひて言依さし賜ひき。〉ここで言う「天神諸」とは八百萬の神を指すのでしょう。今日の組織社会では指揮命令系統の一元化は常識です。鉄則と言っても良い。現代風に言うと「取締役及び幹部社員の総意により」となりましょうか。こんな業務命令ってあるでしょうか。現代社会に蔓延る責任者不在の風潮と構造は、実は太古の昔にその原点があったのだと言えそうです。で、命の随にイザナギ・イザナミの両神は国生みを終えると、次々に山や海、木や風や五穀などの神を生みますが最後に火の神様を生んだため、イザナミの神は御陰（みほと）を焼かれてしまいます。御陰、分かりますね。〈遂に神避りましき〉という表現で書かれていますが、神話の世界では神様も死ぬ。面白いですね。で、イザナミの神は死者の国「黄泉の国」へ旅立った。

一方、最愛の妻を失ったイザナギの神の嘆きと未練はいかばかりか。諦め切れないイザナギは、妻の後を追って黄泉の国へ出掛けて行き、首尾よく妻イザナミと再会したまでは良かったのですが、その直後、イザナギの神が目にしたものは全身に蛆がたかれころろきた醜い妻の死体だった。腰も抜かさんばかりに驚いたイザナギの神。「よくも恥をかかせ

たな」と怒り狂ったイザナミの神は、黄泉醜女や悪霊邪鬼の軍勢など次々に繰り出してイザナギを追わせます。この追っ手からあの手この手でようやく逃れたイザナギの神は、最後まで追いすがって来たイザナミの神を黄泉比良坂で千引の岩で通せんぼして、離縁を宣言します。それから日向の地に降りたイザナギは阿波岐原の清流で禊祓をするという筋書きです。白状しますが、私はこの道に入るまで古事記の神話を知りませんでした。多分皆様も、殆どの方はご存じないだろうと推測しこの機会にお話させて頂きました。

ところで、神主はその名に示すとおり、神を祀る祭主ですが、その元祖は「神」を宿す「主」、即ち神の意を人間に伝える媒介者＝ミコトモチの意であったようです。この菱刈町界隈には今でもカトッシサンと呼ばれる祈祷師がいらっしゃるようですが、然るに私には祈祷師のような呪力も霊感もありません。滝に打たれたり、断食したり血の滲むような修行を重ねたこともありません。なればこそお祀りの依頼があれば、私としては唯々仲執持役として真心込めて奉仕するしか他に打つ手がない！と自戒しております。我ながらいつも不思議に感ずるのは、何故かその都度、「祓ひ詞」の声の勢ひや間の取り方などが微妙に変化する事です。ある時、急きょ頼まれて氏神祭を奉仕しました。参列したのは、椅子に腰かけたままのお婆さん一人だけでした。その後すっかりこの一件は忘れておりまし

たが、半年後、ある神社で例祭を始めようという矢先、満面に笑みをうかべて近づく方がいらっしゃいました。話を聞けば、実は当時、連れ合いのお爺さんは、永年寝たり起きたりの生活が続き、孫娘は、夜毎発熱があり病院を転々と変えてみたが原因不明。そこでカトッシサンの所に相談に行くと、氏神を粗末にしているからだという答えが返ってきた。そこで私の出番と相成った次第だとか。知らぬは神主ばかりでしたが、氏神祭をしたその日から、お爺さんは起きて生活するようになり、孫娘は元の元気を取り戻したとの事で、何度も頭を下げてお礼を言われました。後日談ですが、先月の十八日も、とある水神祭の準備しているところでばったり遭遇したその方から、孫娘の近況報告を戴きました。内心すっかり恐縮しましたが、神のミコトモチたる社会的使命を痛切に自覚させられた一件でありました。

ご静聴ありがとうございました。

（鹿児島県　南方神社　宮司）

日本武尊の御西征・御東征について

荒木房雄

本日は茲に愛知縣尾張の國名古屋熱田神宮に於きまして、日本武尊の御西征御東征と云ふことに就いて申し上げ度いと思ひます。御当社の御祭神に就いての事で有りますので恐れ多い事であると思ひます。神典古事記に依りますと我國第一代目の神武天皇様が都をば東の方へ遷されましてより其の御威光は次第に四方の國々に廣まって行ったわけで有りますが、都より遠く離れた九州の南の方には熊襲川上の建兄弟が皇威に叛き人民を苦しめて居ったので、第十二代景行天皇は之を征伐される事になりました。天皇は諸國を西東と廻り天下の形勢を良く知って居ったのであります。天皇は御身の長丈(タケ)二寸余と云われた大偉丈夫の方に御坐します方で御子さんが男女八十人から居られたと伝へられて居ります。兄は大碓命、弟は小碓命と申し御幼名を倭童(ヤマトオグナ)と申す方で、兄大碓命との間に何か出来事があったのですが、活発な方で非常に恐れられて居ったわけであります。天皇は此の小碓命をば御西征の途に向わせられた。小碓命は其の時十六歳であられた。命様は勅命を畏み、先づ

伊勢の神宮に参詣なされ、御姨君大和姫命に御別れを告げられ勇躍征途に向わせられた。此の時大和姫命は女の衣装と小太刀とを授けられた。小碓命は熊襲兄弟の酒宴に乗じて女装をして此の川上兄弟を討たれた。此の時弟の建が苦しい息の中から云われるに、自分は此國では一番強い者であると思って居ったが、貴方様は一体如何なる方ですかと問ふた。命は自分は大和國の景行天皇の子供の大和童（ヤマトオグナ）と申す者であると、此の時弟建は自分の名前を貴方に差し上げます。以後は日本武命と申されよと息絶えた。そうして帰途、出雲の肥川の辺にて熊襲を征伐された。此の事をば父君天皇様に御報告申し上げられた。そうして、やがて休む暇も無く今度は御東征の途へと向わせられること、成った。

小碓命は伊勢の神宮に参詣なされ、大和姫命に別れを告げられた。此の時天叢雲劒と火打石とを授けられ、勇躍出発された。そうして尾張の國主と其の娘美夜受姫とも御会ひして、やがて再会を約して次は相模（サガミ）の國主に会ったが、命を野原に誘ひ鹿狩と称して命をば焼殺そうとした。此の時天叢雲劒を以て辺の草を薙祓ひ火打石を以て反対に賊を焼殺した。此の劒をば草薙劒と云ふ。そして此の辺を焼津と云ふ。此の草薙劒は後に尾張の國の熱田神社に祀られることと成った。そして次は相模湾に差掛り、速水（ハヤミツ）と云ふ処で大暴風に会ひ、船は木葉の如くにゆれ、行くも退くも出来なくなった。此時妃弟橘姫命は御歌を歌わせら

れた。〃さねさし相模の小野の燃ゆる火の火中(ホナカ)に立ちて問ひし君はも〃と歌わせられた。之は海神の祟(タタリ)、怒りであると、私は女の身で戦場に立つことは叶ひません。背の君は難をまぬがれ上総国に渡り任務を果たされ、父君天皇様に御報告申し上給へと、ざぶんとばかり海中に飛込んだのであります。それは戀愛至情主義と云った様な事を乗越えた絶体絶命の捨身の行動であった。嗚々悲壮なる哉、やがて海は凪ぎて命は上総国に渡り帰途に此の相模湾に再び至り渺茫たる相模湾を望み、あゝ東(アズマ)はやと三度叫ばれた。それは吾妻と云ふ事である。足柄山箱根山此の辺一体を東(アズマ)の国と云ふ。それは宮受姫の事を憶ひ弟橘姫命(オトタチバナヒメ)の事を思ふ憶が秘められて居ったのであります。やがて宮受姫の元へと着き給ひ、国主とも御会し酒を汲田(クミカ)わされ数日滞在され、やがて姫をば都へ迎へませうと約し此の折、草薙(クサナギ)劔(ツルギ)を片身(カタミ)に姫に預けたわけである。そして別れを告げ、伊勢の尾津崎の市の松と云ふ処に先年置忘れて有った劔太刀が有った。此時命は辞世(ジセイ)の歌を歌わせられた。〃少女の床上に置し劔太刀その太刀はや〃と歌わせられた。やがて伊勢の能褒野に至り足が動かなくなった。そこで眞清水を飲み、息絶えられたのであります。そして速馬が飛び家族の方が掛付けられ御墓が建られ懇に弔われた。其の墓がむく〳〵と動いて其処から八尋の白千鳥と成って大和國の方へと飛んで行った。其処にも墓が建られたが命の魂は鎮る事は無く天空

へと舞ひ上って行った。それは父君天皇様へ御報告を申上げるためであると考えるものであります。命は生前中に天皇の御位に即かせられる事は無かったので有りますが、其の御子が第十四代仲哀天皇の御位に即かせられたのであります。日本武尊神去り給た御歳は参拾歳であらせられたのであります。正に神道の実践奉行者に御わし座す。偉大なる哉、日本武尊様であられせられました。以上御静聴有難ふ御座いました。

（北海道　尻岸内八幡神社　宮司）

熱田まつりについて

佐藤和夫

本日は当熱田神宮の年間約七十回に及ぶお祭の中で最も重儀とされ、熱田まつりと名古屋市民に親しまれている例祭の、神賑い行事についてお話し致したいと思います。

毎年六月五日、勅使をお迎えしての例祭当日、又はその前後に様々な神賑い奉納行事が境内外で賑々しく催されます。主な行事は、花火や献灯巻藁、又のど自慢大会を始めとする各種演芸、俳句・献書・写真コンテストなどの文芸、弓道・柔道・剣道・相撲の各大会や模範演武、献花・献茶・県内各所に伝わる棒の手等の伝統文化の奉納、地元各町内会の子供獅子等々です。現在これらの奉納行事の運営は熱田神宮奉賛会、特に熱田区内の奉賛会員が行っています。区内は七地区に区分され、地区毎に行事を分担し責任を持っています。

戦前、明治以降終戦まで、熱田まつりは官祭として定められ、祭当日は市内全小中学校、旧制八高までもが休日となり、多くの人々がお祭りに参加しやすい環境が整っておりまし

た。戦後、当然ながら官祭の枠は外され、休校も廃止される中、新にお宮と奉賛会が一体となり、新しい形の熱田まつりとして出発しました。当時全国の多くの神社が疲弊したように、当神宮も戦災により諸施設のほとんどが焼失、本殿を解体中という言語に絶する状況下にありました。その中で、地元の奉賛会員が食の足るを待ちかねて、戦前にも増した奉納行事を復興させた底力は、大神様の元に結実する郷土愛の発露でありました。

そんな奉納行事の中の一つに、けっして大規模とは言えないが、熱田区内小中学校対抗の相撲大会があります。地元の古老が口角泡を飛ばしながら、自身の子供の頃の熱戦を語る姿も、微笑ましいところですが、小中学校の先生方もその伝統に大変関心を持っておられ、奉賛会と共に運営に携って頂いております。大会開会式には、土俵祓いに神職が出向きます。そこには、学校教育と宗教との難しい問題はあるにせよ、各校校長先生以下生徒もそこに参列し、お祓いを受け、大会の無事と子供たちの健やかな成長を一緒に願う姿があります。

又、献書・献句大会の応募も多く、折につけ奉納の意味を話す機会ともなっています。又さらに、柔道・剣道・弓道の各大会は、各々県の連盟が実質的な運営を引き受けて頂き、武道精神の高揚と御神徳の発揚の一助にもなっております。

これらは、ほんの一例に過ぎませんが、奉納行事の数々は、熱田さんのお祭りだから、参加する・やってみようと言う行事が多い事に驚かされます。これは、皆様方にも各神社におかれましても同感される事と思います。

しかし又一方で、現在、年々歳々行われる行事を次代に伝える事の難しさも同感される事と思います。当神宮の奉賛会員も社会の高齢化と共に、高齢化が進んでおります。特に、お祭が休日でないと言うこともあり、次代にいかに伝えてゆくか…と言う事が、大きな課題となっております。自営業でない限り、会社を休みお祭に参加すると言う環境はまだ整っておりません。又、多くの人々が長い伝統のなかで作り上げてきた行事が一旦中止中断してしまうと、そのノウハウも含め再興する事は大変難しい事であります。

例えば、当神宮の奉納行事の中の献灯巻藁は、現在神宮各御門前に据え付けられますが、嘗ては、巻藁船と言う形で宮の渡し付近を巡行いたしておりました。その上は大山と呼ばれる山車でありました。今、山車や船の形に戻す事は、全く現実味がありません。

このように、祭りの継承には大変難しい点がございますが、しかし今、様々な試みも行われております。例えばこの巻藁については、地元小学校が奉賛会の方々を講師として招いて何コマか授業を開いております。この小さな試みが将来大きな成果を上げるものと信

じております。

以上お話申し上げましたが、神賑わい行事には地域社会における文化的側面も多々ございます。地元の皆様と共に、お祭の継承と発展の為に尽してゆきたいと思います。

（愛知県　熱田神宮　宮掌）

熱田神宮宝物館こぼれ話

安江英男

本日ここにお集りの皆様は、この熱田神宮の境内に宝物館があることをご存知でしょうか。

境内のほぼ中央に位置し、一際目立つ奈良の正倉院風のコンクリート製校倉造の外観を持った建物。それが宝物館です。

その開館は古く、昭和四十一年十二月。展示室のみでなく附属施設として講堂、会議室、応接室等も備え、県内では徳川美術館や明治村等に続き四番目に、昭和四十三年、登録博物館の認定を受けました。また平成八年には文化財保護法の規定に基づき、公開承認施設としての承認も受けています。

館内の収蔵品は、御皇室をはじめとして郷土の三英傑や地元の尾張藩、さらには一般庶民に至るまで、幅広い層からの献納に依るものがほとんどで、その数は全部で約四千点にものぼります。

中でも古神宝類・刀剣・和鏡・古文書・仮面等には著名なものが多く、国宝を含む重要文化財・県指定文化財の総数は、七十七件、一七六点にも及びます。

私は現在その宝物館において、附属施設の講堂や会議室等を、当神宮の崇敬団体に加入されている方々にお貸しする事務を、主な業務としています。

しかしながら一方で、博物館学芸員の有資格者として展示品の入替業務や、館内の受付カウンターにて拝観券や図録の販売に当たることもあります。

これからお話しするのは、私が宝物館の受付業務に就いていた、ある日の出来事です。

当神宮の宝物館は、展示室の入口と出口が同じ場所で、そのすぐ側に受付があるのですが、宝物の拝観をおえて展示室から出て来られた二十名ぐらいの団体から、矢継早に次の様なご質問を受けました。

「宝物館のどこに草薙神剣が展示してあるの。」

また別の人からは

「あの掛軸とこの日本刀、どちらが値段が高いんや。」

またさらには、

「狭い展示室やなぁ、二階には展示は無いのか。」などなどと・・・。

中には、回答する必要があるのかなと思いたくなるような内容の質問もありましたが、常日頃拝観者への答弁は神道教化の修練の場と自戒しておりますので、時間をかけて丁寧にお答えしようと思いました。

しかし、折悪く百名程の別の団体が入館して来られ、受付前が狭いため入観者への業務を優先して、質問への答えをほんの少しだけ待っていただこうとしたのですが、バスの出発時間のためかそのまま駐車場へと進んで行かれてしまったのです。

本日はそのお詫びもかねて、質問の回答と私の宝物への思いを皆様にお話し致したいと思います。

まず、草薙神剣は宝物ではありません。御神体と申しまして神様の依り代です。神様が宿られていますので、宝物館では無く、御本殿で朝夕お供物をしてお祀りをしています。恐れ多いことなので私どもも決して目にすることはありませんが、年間八百万人もの人々が当神宮に訪れるのは、紛れも無く、そこに神様がみえられ、その尊いご神徳に依るものと思います。

次に各展示品の価値の優劣についてですが、宝物館内の展示品はほとんどが献納品の為、優劣のつけ様などありません。それは、展示品の一つ一つが、献納された方々の真心の結

晶だからです。人々の神様を崇拝する心に、どうして優劣をつけることが出来ましょうか。

また、展示品の一点一点を美術鑑賞するだけではなく、真心で拝観すれば、拝観者の心が宝物に宿る心に呼応し、もっともっと複数の真心が、宝物から伝わってくると思うのです。

時代時代の最高技術を用い、時には親子数代によって作品を完成させた製作者の真心。己の浄財により作品を購入し、それを神様への供え物とした献納者の真心。

献納された宝物を細心の注意を払って保存し、今日に残した先人達の真心・・・。

私達学芸員も宝物の取り扱いや保存において、様々な注意を払います。

例えば、鉄や銅など金工品を取り扱う場合には、通常手のひらの汗で錆ないように、手袋を着けて作業します。しかし、すでに錆が進行している物品については、物品の表面が剥落することを防ぐため、錆の度合いに依っては素手で作業する場合もあります。

また、湿度は概ね六十パーセントを理想に管理し、日本画など光による劣化が考えられる物品には、紫外線を発しない蛍光灯を用いて照明します。

これらは謂ば学芸員の宝物への真心です。今日、平安時代や室町時代に献納された宝物を拝観出来る喜びを、今度は我々の子孫に確実に伝承して行きたいのです。

この様に宝物一つにもたくさんの真心が宿っています。ですから拝観される方も真心をもって宝物を見ていただきたいのです。

私どもは来館者を見学者とは呼びません。大神様の宝物をつつしみと敬う心でご覧になられる拝観者とお呼びするのです。

さて、大量生産や大量消費が叫ばれた時代はバブル経済の崩壊によって、環境破壊という遺物を残して終わりを告げました。その様なおり、ＴＶ番組に見られる様に古美術品がブームになっています。このブームが単に古美術品の金銭価値を問うのではなく、物に宿る心に気付き、万物に宿る神々に感謝する日本人古来の敬しみのある心を取りもどす機会になればと切に願います。

（愛知県　熱田神宮　宮掌）

初宮詣の後で

河野　誠

只今、めでたく初宮詣のお祭りを納めさせて頂きました。誠におめでとうございます。

さて、祝詞の中にありましたように、お子さまはご両親様の愛の結晶ですが、神様の思し召しで、そのみたまを受けて生まれて来られたのです。即ち子供さんは神様よりの授かりものなのです。だから大事に大事に育てられるのは勿論ですが、親の個人的な所有の子供でなく、神様よりの授かりものだと言う事を何時までもお忘れなくお育てくださる事を先ずお願い致します。

○痛いの痛いの飛んで行け

ところで、赤ちゃんが転げて、頭を打ったり、手や足など軽い怪我をして、痛がって泣くことが往々あります。その時、お母さんは、痛い処をさすりながら

「痛いの痛いの飛んで行け」

と大きな、力の入った心のこもった声で言うと不思議に泣き止むものです。ところが、弱

い声で、「痛いの痛いの飛んで行け」と言ったのでは、泣き止みません。これは、言葉には霊力がある事の証です。この言葉の力を上手に使って、よい子にお育て下さい。

○歩かせましょう。

又「這えば立て、立てば歩めの親心」と言いますが、歩く事は生きて行く上の大切な基本動作です。人は歩く事によって、行動範囲も広がり、生命維持もできるのです。物を見る事、音を聞き分ける事、物の臭いを嗅ぎわける事、舌で味覚を感じる事、皮膚で触覚を感じる事等の五感と同じように歩く事は大切なのです。また、どの機能も訓練する事によって伸びるようです。田舎の山村に育った子供の脚力は都会育ちの子供より、うんと強いものです。私は神様より与えられた能力は、大切にして、伸ばすことをしなければならないと思います。親の都合で、歩かすよりは、先ず車に同乗させる親御さまをよく見かけますが、神様より授かった力を充分に伸ばすような子育てをして頂きたいと思います。

○子供との触れ合いを大切に

テレビによる養育も、限度を越すと如何なものかと思います。テレビを見るのも大切ですが、大自然に親しませる事も是非忘れないようにして頂きたいと思います。子供との会話、子供との遊びも大切だと思います。昔ならば、子育ての仕方としては当たり前の事が、

現在では、物質文明の進化発展に伴い、兎角、時代遅れと見なされています。神様より授かった機能を素直に伸ばす事を忘れたような事が多くなったようです。おふくろの味が何々ショップの味になったり、お母さん達はテレビに子育てを任せて、余裕の時間を楽しんだりしている姿を見ると、これでいいのかなと一抹の不安を懐くものです。とは言うものの、教育ママになって、子供の尻を叩いてハッパをかけなさいと言うのではありません。神様より授かったものは何かと考え、充分に天性を伸ばす事に勤めて頂きたいと思います。

○手をたたきましょう。

人気歌手が入場するとき、観客は拍手で迎えます。芸能人は観客の拍手が何よりの宝だと言います。講演会においても、講師を迎えるときは、拍手で迎え、講演終了後は、拍手で感謝の心を表します。幼子がやっとの事で立てると、親は手をたたいてほめ、喜びます。それを見ていた子供も、自分で手をたたいて喜びます。手をたたくという事は、世界中どこでも嬉しい時に行うようです。手をたたいて、親の喜びを子供に伝え、同時に、ほめる言葉をなげかけて下さい。愛情の表現は、言葉と体で表す事が大切です。

○信仰心を養ってください。

幼い時から、神仏に手を合わせて拝む事を親御さんが子供に見せて、体で教えることは

大切です。私は、母が法華の信者でしたので、母の背に負われて、毎月三キロの山道を、朝真っ暗な中を提灯をたよりに、大立場の観音さんに詣った事、今でも昨日の事のように覚えています。『三つ子の魂百まで』と言います。

「ありがとうございます。」

という感謝の言葉。

「御苦労様でした。」

と言う人をねぎらう言葉が自然に何時でも出るように、親御さまが日々手本を見せて上げてください。これは、親から子供にあたえられる一生無くならない大切な宝だと思います。それでは、七五三の宮参りを始め、人生の節々には、お蔭様でと是非氏神様にお礼のお参りが出来ますよう祈念してご挨拶とさせて頂きます。よくお参りくださいました。有り難うございました。

（広島県　齋島神社　宮司）

『こ と ば』

原　茂子

二十数年前、朝日新聞の片隅に〝カウンセラー養成講座、受講生募集〟於・大阪府立勤労婦人ホームと記した小さな記事が目にとまりました。

昨今は、こころの病や、こころの癒しといったことに、多くの人たちが関心をもつようになってきましたが、この道に入門した当時の私は、カウンセラーって、どんなことするのかな、臨床心理の勉強をすれば、他人の思っていることが良く解るようになるのだろうかといった単純な認識でした。

ところが、カウンセリングの先づ初めの研修は、自分を知る、私自身を知るという作業の連続でした。自分は何者か。三年・五年と月日を重ねていくうちに、今までこれが自分だと思っていたことは、実は自分のほんの一部分にすぎないということに、気づきました。

第三者が、認識している私も私自身です。

自分に都合のいい見方の場合は、「あ、そうです。」と素直に受け入れますが、自分が認

めたくない場合や、自分が気づいていない全く思いもつかない私であった場合は、「あ、そうです。」と受け入れることが出来ません。けれどもそれも間違いなく私自身なのです。

そしてもうひとつの私が居ます。それは第三者も私も気づいていない私です。心の奥底にひそかに棲んでいる何者か、これを明らかにすることが、自分を知ることなのだと、最近、やっと思えるようになってきました。

そして、誰も知らない私の全てを、神様だけは、御存知なのだ、とも思えるようになりました。

自分探しの旅を続けながら、私は、自分の住まいのある町で、電話相談員として、女性の悩みの相談をうけています。

私たちは、普段はほとんど無自覚で喋っています。物のなまえや、事務的な伝達のことばは、変えるわけにはいきませんが、心の伝達をつかさどる言葉、大事な思いを伝えることばは、〝癒し〟とか〝共生〟とかへの心配りと共に、大変重要です。

「この間はありがとうございました」と言いながら、電話の相手におじぎをしたことありませんか。ことばにつれて体が動いてしまう。自然にそうなりますよね。その反対に、ことばは「済みませんでした。」と謝りの言葉なのに腕組みをしていたのでは、相手は怒っ

てしまいます。

自分の思いを伝えるとき、ことばそのものは全体の七パーセント、それに声の高低・強弱・抑揚をつけても四十五パーセントしか伝わらないそうです。身振り・手振りや目や顔の表情など体全体の表現が加わって、初めて百パーセントのコミュニケーションができるのだそうです。

相手が見えない電話相談は、受話器から聞こえてくる声だけが頼りです。私が話す言葉は、相手の心に添ったものでありたい。いつもそう願っています。そんな時に思い起こすことばは、言霊。ことばに神様がお宿りになっておられる。という有難い神道の教えです。

私が話すことばに、神様のお導きをいただける様に祈る気持でいっぱいです。

「相談員さん。私の娘は三歳なのですが、とても利発です。それに引き換え私は、動きが鈍く子供に付いていけません。おまけに、体も弱く薬を手放すことが出来ません。昨日もスーパーに行って、子供を見失ってしまいました。雨が降ってましたし、生きた心地がしませんでした。以前にもこんなことがあって大さわぎになったんです。あっちこっち探しながら、家の近くまで来ると、近所の奥さんが『子供を預かっているよ。ぐしょ濡れでかわいそうだから・・・』とのことでした。子供一人、満足に育てられない私は母親失格

です。こんな母親のところへ生まれてきた娘がかわいそうで・・・。私の家になんか生まれてこなかった方が、あの子は幸せです。娘が大きくなったら、こんな頼りない親を恨むでしょう。どうしたらいいんですか。」と泣きながらの訴えです。子育てへの自信の無さ、これからの生活への不安を、息つく暇もなく語ります。「娘さんのこと心配なんやね。子育ては気の休まるときが無くて大変やね。だけど、貴方の家に生まれたこと、決して不幸じゃないよ。第一、この世に人間として生まれさせてもらったことは、最高にしあわせなことだと思うなあ。その上に、地球上には、たくさんの国があるのに、こんなに穏やかな気候で四季のある日本に暮せ、みんなが自由に生きていける日本で生活できるなんて、とってもありがたいと思うのよ。だからお母さんが、少しくらい出来が悪くても大丈夫。そんなことより、もっともっと大きな幸せがあることを、少しづつ娘に話してあげてね。貴方一人が子育てに悩んでいるんで無いよ。お母さんの多くが、それぞれに大変な思いをしながら子供と関っていると思うよ。又いつでもお電話してね。」内容は端折っていますが、相手と直接会ってする面接相談は、目に訴えることが出来るのですが、電話相談は目ではなく、心に訴えるのです。

私達は、日常の暮しの中で、心に残ることば・忘れられないことばに出会います。心に

矢のように突き刺さって、いつまでもこころの傷になるひと言もあれば、こころに温かいぬくもりと、勇気を与えてくれるひと言もあります。

細い細い一本の電話線でのつながりですが、クライアントが、私のことばの中に、少しばかりの希望の明かりを感じてもらえたら・・・とてもしあわせに思います。そしてこれからも、ことばに神様がお宿りになるという言霊のこころを忘れずに、もう少しの間、電話相談に関わりたい。そして電話の向こうの彼女に、いろんなことを教えてもらいながら、心豊かに日々の生活を送りたいと願っています。

（大阪府　夜疑神社　権禰宜）

保護司になって

黒田明司

先輩の神主さんから推薦され、断る術も知らずに保護司になってしまいました。去る平成十三年十一月熊本県の新任保護司研修会がありました。七十名の内十三名が神職でしたので少しは気が楽でした。保護司とは「犯罪をした者の改善及び更正を助け、犯罪予防の活動を助長し、もって社会を保護し、個人及び公共の福祉を増進する」とありますが、あまり予備知識もなく、具体的な活動も把握出来ず、私にこの努めが出来るのだろうかと大変不安な思いが始まりました。

そんな思いを抱きつつこの仕事が何時来るだろうとびくびくしていました。平成十四年の正月が過ぎ、二月の春祭りが済みほっとしていた頃、私にしてみたら突然、県の保護観察所から電話がありました。交通事件の十八才の少年が保護観察になり、母親と一緒に行きますので、よろしくお願いします、とのことでした。又々私は断る術を知らず、はい、判りましたと答えてしまいました。先輩や県の観察所の先生方に電話で尋ねたりしました

が、おろおろするばかりでした。まさに暗中模索の状態です。

二月十六日、いよいよ私の保護観察が始まりました。少年は道路交通法違反。暴走族です。動機は好奇心から。熊本家庭裁判所で二月十五日一号観察になりました。行政処分は平成十五年十月十日まで免許取り消しです。これを読んだとき、好奇心から暴走族？とんでもない奴だ。一年半位の免許取り消しで、罰金なし、少年院にも入らず、今の法律は甘いな、もっと厳しくせんならと怒りを覚えました。私なんかは騒音で明け方の一番眠い時期に目が覚め、翌日は一日中睡眠不足です。そう思うと益々腹が立つのです。

しかし気になるのは、両親の離婚と同じ時期に暴走行為をしていること。親が離婚問題でもめている姿は子供にとっては面白くないはず。そんなことが影響しているのではないかと思いました。

また定時制の高校に席はあるが定職に就いていないこと。家族は母親と兄、そして十八才で妻がいて、しかも四月には出産予定ということでした。私共の生活とは違い過ぎる程違う環境の人達がいることに驚くばかりです。

十八才といえば、私の娘と同じ年です。まだまだ人生先があり可能性もあります。何かわが子を見るような思いに駆られました。住所はお宮の氏子区域の借家です。神様の息吹

のかかったこの地域にこんな人がいて良いのだろうか、何とかしてあげたいとも思いました。

私は保護司です。犯罪をした者の改善及び更正を助けるのが務めです。健全な社会人になるよう努力する誓約書の遵守事項を守ることを確認し、毎月二回保護司を訪問し指導を受ける事を約束させました。

二月二十五日交通事件対象者指導要領に添って私の指導が始まりました。保護観察について、自動車と社会生活、安全運転、違反・事故の責任等の学習です。本人は今回の事件については十分反省しているし、道路交通法についても理解しているようでした。以前の暴走族仲間の誘いも無くなりました。

また、生活計画等については、仕事をしながら定時制高校に通い、子供が生まれるので責任をもった行動を取ると計画を立てています。私はこの少年になんとか自立した生活をしてもらいたいと思いました。

仕事の少ないこの時期にどうやって探すか心配しましたが、母親が建設工事現場の仕事を見つけて来ました。現場の仕事はきついときもあるが、仕事を通して社会との繋がりと社会に役に立っていることを指導しました。又その収入によって妻や生まれてくる子供を

養っていく責任があることも諭しました。将来は車の整備の資格を取りたいというので、その為にも学校は休まず真面目に通い卒業をするように奨めました。

車の運転ができず不便であるが、家族は比較的協力的で、妻はお弁当を作り、仕事現場や定時制の学校の送り迎え、また月二回の来訪も妻の運転です。四月には男の子が生まれました。七月には母親が新築した家に転居、同居の生活が始まりました。子供が生まれたこと、新しい家での生活が彼の心の切り替えになったろうと思います。

十月の来訪では、働いて数ヶ月たつが、こんなに長く続いたことはなく経済的にも安定した生活をしている。家族を養う実感がもてたという。十月十六日を以てこの少年は保護観察解除になりました。そこには本人の努力は勿論家族の協力や励ましがあったからだと思います。

そして今年の正月、勤め先の会社の人達と初詣に来ました。私は他の参拝者と同じように新年の挨拶をしました。その姿は一回り大きくなったような充実した生活を送っているように見受けられました。

私は神主です。毎朝日供祭で皇室の弥栄、国家の安全そして氏子崇敬者の幸せを祈っています。私にどれだけの力があるか分かりませんが、彼の保護監察に立ち会えたことで青

少年の健全育成に寄与でき、神主としての役割を感じる思いを致しました。

（熊本県　四山神社　禰宜）

この国に生まれて

西野敬一

今日は私なりに感じている、この国の人々の素晴しさを少しお話させて頂こうと思っております。

日本人は複合民族、雑種民族であると言われております。日本では十数万年もの昔から、数多くの血の文化の融合が行なわれてきました。それはこの日本の地で生まれた民族、シベリアから北海道へ入って来たアイヌ系の民族、中国朝鮮から入ってきたツングース系の民族、ベトナムなどから北上して来た東南アジア系の民族、そして島づたいに入って来たポリネシア系の民族。この五つの民族から生まれたのが日本人であります。そしてここで一つ素晴しい能力が生まれました。それは遺伝子の中で五つの異なる人々の気持ちが解かりたくなくても解かってしまう、つまり多種の人々の気持ちを理解する能力があるということです。よってイエスとノーとが明確に言えなかったり、優柔不断だとも言われ、また日本人は特色がないと言われるのも、多くの色の光を集めると透明に近づくのと同じこと

で、これら全て我々の遺伝子のなせる業であります。何らかの共通する遺伝子をもつ他民族を理解し「和する」能力がある人々、これは日本人だけのもつ素晴しい能力なのではないでしょうか。

そして次に私達の言葉、日本語についてですが、今世界で話されている多くの言葉が子音言語であるのに対して、日本とポリネシアの言葉だけは、母音言語であります。奈良の医大教授のお話によりますと、子音言語を使う人々は、左脳が言語や理性を右脳が情感をつかさどるという脳が左右別々の働きをするようですが、日本人など母音言語を使う人々は、左脳だけで理性も情感もつかさどるという二つの機能を持っているとのことであります。闘争的ではなく相手に合わせることの出来る融和の脳を持っているとも言われておりました。またこの日本語を組み立てる音についてですが、音の要素の一つに音素という最小単位があるそうです。英語にはその音素の数が四十五・ドイツ語で三十九・フランス語で三十六あるそうです。しかし日本語には二十三しかないそうです。つまり私達の日本語は音声に恵まれていなく、一つの言葉でいくつもの多くの意味があり、その場の雰囲気や相手を理解しようとする力がないと会話にならないという、非常に難しい言葉であるわけです。このように日本人は感情こまやかな、多種多様の難解な言葉を駆使して、相手の心

を読み取りながら日常生活を送っているわけであり、この大変難解な日本語を操つる能力のある民族でもあるわけです。

そしてもう一つ、言葉と関係の深い耳についてですが、日本人の耳が正しく理解出来る音域は一五〇ヘルツから一五〇〇ヘルツまでだけだそうです。英語圏の人々は二二〇〇ヘルツから一〇〇〇〇ヘルツ・ロシアの人々は四〇〇ヘルツから二〇〇〇〇ヘルツまで正確に理解出来るそうです。ロシアの人に素晴しい音楽家が多いのはこの為でしょうし、日本人が英語を苦手とするのもこの為であります。しかしここでも神様は私達に素晴しい能力を与えてくれたのです。それは自然の音というのは五〇〇ヘルツ前後だということ。つまり日本人は世界の中で一番自然の音を理解出来る耳を持った民族であるわけです。

以上のように多くの異なる人々を理解出来る心、能力をもち、優しい思いやりのある心で難しい言葉を操る能力をもち、自然を心から理解出来る能力をもった私達日本人は世界に誇れる素晴しい民族なのではないでしょうか。これら全て四方を海に囲まれたいくつもの島々からなる国土、この日本の気候風土、自然から生まれたものなのです。そしてこの国の自然と共に生まれ、永い年月に渡り私達と共に歩んできたものが、日本人の根本思想〝神ながらの心〟神道であり、その現われが神社であり杜であります。

「この世の中に永く存在するものには存在する理由があり、それを大切に守れば人々はきっと幸わせになれる」ということが言われております。このものとはそれは〝自然〟でありましょう。自然とは〝変わらない進化〟。人間が作った法律やどんな規則より厳しいものが自然の法則であります。

世界において自然というものが見直されている現代、本当の意味で自然を理解し、それを多種の多くの人々に伝えることの出来るのはそれを伝える能力をもち、神ながらの心をもった我々日本人であり、それが我々民族の使命なのではないでしょうか。

日本人がこの世界に存在する意味を今一度真摯に受けとめて、私達に与えられた能力に自信と誇りをもって　そしてこの国の心〝神ながらの道〟を心のふるさと自然豊かな神社を通して大切に守っていって下さい。

（奈良県　橿原神宮　権禰宜）

所懐

藤野　功

皆さまには足元の悪い中、秋期例祭にようこそご参列下さいました。本日ご覧のように雨模様でありますが、実はこの雨には訳と申しますか謂れがございまして少しお話し申し上げます。この神社のご祭神はお伊勢さんの弟神であります素戔嗚命と申しまして、相当腕白な神様であったという事で、その非行を悔いての涙雨となり、例祭には雨が降るという事が当社の故実にも出ております。私も何度かご奉仕させていただいておりますが、殆どこのような天気で、しかし乍ら一日泣いてすっきり心も晴れるのか、翌日の後宴祭には快晴になる事が多かったと記憶しております。

さて今年の残暑は殊の外厳しいものがありましたが、此々最近の朝夕の冷え込みに少しずつではありますが、秋の気配も感ずるようになってまいりました。今年もお陰様で実りの秋を迎える事が出来ました。黄金色に実った稲穂や作物には、特に自然の働きの偉大さ有難さを痛感させられますが、そうした食物によって生かされている我々人間も、本来は

自然の一部であったと気付かされます。最近免疫機能の向上、ストレス解消という事で森林浴や中高年の軽登山が盛んに行われるようになってまいりましたが、人間はヒトの五百万年の歴史の中で、九十九．九九 パーセント以上自然の中で生活していた訳ですから、自然環境に同調し引き込み合い、そしてそれが快適だと感じ、又癒されていると感じるのは当然の事なのかもしれません。

私達人間は独りでは生きられません。生きる為に口にする全ての恵みや、それに携さわってくれている人々、家族や友人職場の人等多くの人との関わりの中で生かされているのであります。ですから自然から与えられる恩恵はもとより、全ての営みを神恩と感謝する生活をしなければなりません。感謝の心は謙虚さを生み、相手を敬い調和する心を育みます。しかし乍ら、哀しいかな飽食の中で食物は粗末にされ続け、人間関係が希薄になった為か生命が軽んぜられ、連日のように殺人が行われ、昨今、七輪を使ったインターネット自殺というものが、立て続けに報道されたりもしております。人権が声高に叫ばれ権利ばかり主張する人々、物が豊かになり生活が便利になるに従って、逆に心が貧しくなっているのが今日の日本人の姿といえましょう。よく自分が変われば、呼応して自分を取りまく回りも自然と変わってくると申します。病気が末期状態と告げられた人が、鳥の囀りや公園の

緑、子供等の歓声、街の喧騒等見聞きする全てが、美しく愛しく感じられるようになったと聞き及びます。心の有り様が変わると物の見方、感じ方も変わってくるのです。

さて神道には、仏教やキリスト教にあるところの教義・教典というものがないという言い方がされますが、神道は日本民族が発展してきた中で、自然発生的に生れてきた信仰というよりも、より身近な生活そのものの中にあったのではないでしょうか。小泉八雲が、赴任の松江の地で、人々が朝太陽に向って拍手を打つ姿に接し感動したという話を聞いた事がありますが、元々はこのような素朴な感謝の祈りから始まったのではないでしょうか。そして神々のご事績に習って身を修め、家を整え国を興そうという、個人よりも公を、争いよりも調和を重んじてまいりました。

郷土の聖人中江藤樹は、その著書『翁問答』の中で「孝は徳の本なり」として、自分の心や身体は父母から与えられたものであり、その父母も祖先から受けたものである。更にそれは天から与えられたものである。故に祖先を尊び天を敬うのも孝行であり、即ち心を正しく身体を健やかに保つ事も孝行であると説いておられます。

どうか氏子の皆様方にはこの感謝するという心根を、この氏神さまのお祭りに、又朝夕神仏に感謝の祈りを捧げていただく事から、ご家庭でもお示し下さればと念願する次第で

ございます。世間知らずの若輩者が、甚だ失礼な事を申し上げたかもしれませんが、大いなる自戒を込めてお話しをさせていただいたつもりでございます。お許しいただきたくお願いを申し上げる次第でございます。取留めのないお話しになりましたが、皆様のご多幸をご祈念申し上げご挨拶とさせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。

（滋賀県　多賀大社　権禰宜）

感謝と奉仕について

冨樫　厚

近頃神道の本質は、『感謝』ではないかと感じている。

初めは、神社で奉職すると言うことが一般の人と同じように単なる仕事と考えていた。

それは、家が神社でもなく、親族に神社へ奉職しているものがいるわけでもなく、まして私自身神社に特別お参りするようなこともない、又神社での仕事を覚えることで精一杯ということもその考え方をする要素になっていたかもしれない。

しかし、大學に通いながら神社に住み込み奉仕している時、同居の先輩から「冨樫君はたまたまここの神社に振り分けられたと思っているかもしれないが、ここの神社に来たということは、貴方自身ここの神様に必要とされているからここにきたんだよ。そのことに感謝しながら仕事をしなければならない」と言はれ、はっとしたことを今日もおぼえている。

又、大學を卒業してある神社に奉職し、その神社の宮司さんが、お参りに来られた方に

講話をされているのを初めて拝聴した時、その宮司さんが、よくよく言っておられたのが「感謝する」ということであった。

「日本のサービスは世界一だが、マナーは最低になってしまった。サービスとは、人々に対する感謝のしるしであって、商売の一つではない。ファミリーレストランでお絞りやお水が出てくるのは感謝の印であって、海外は有料が常識、なのに自分のところにお水やお絞りがこないことに腹を立てている大人がいる。現在の日本人は、サービスボケをしてしまっていて、気を使って好意で出してくれていることに対して感謝できなくなってきている。大人がそうだから、それを見ている子供はいずれ同じことをするようになる。家庭の崩壊も父親が仕事をし養ってもらっていることが当然のことのように感じ、それに対して感謝をせず、給料の多い少ないと文句をいう母親がいる。そんな家庭の中で、父親を大切に思う子供が育つわけがない。生きる事に精一杯だった昔は、産んでくれたことに感謝し、生かされていることに対して感謝していた。」と宮司さんは参拝者に講話をされる。

「今こそ大人が子供の手本となって、はずかしがらずに、感謝することをつまり『ありがとう』と言う言葉を積極的に使い、自らが発信基地となっていってほしい」と宮司さんは常に勧めていたことを覚えている。

人々は、昔から地域の鎮守様に対しさまざまなことを感謝し、又生活の糧となる自然の恵みにも感謝することでさまざまなお祭りが行なわれてきた。

正月、祈年祭、例祭、新嘗祭など人々の感謝の中で行なわれてきた祭事である。

神職にとって祭事を厳粛に行なう事は大切な奉仕であるが、祈年祭や新嘗祭などの意味を氏子崇敬者へ伝えていく事も大切な仕事でもあると感じる。

現在の安産、初宮、七五三、結婚式、厄除など私祭には違いないが、子供を授かったことに対する感謝、成長への感謝などを伝え、これからも神様のご加護をもって活かされるようお願いをするのである。

そのことが、祈祷にこられている方にも感じてもらえるよう簡単に且つ明確に伝えられるよう努めなければならない。

しかし、今の神社界においては様々なゴタゴタがあり、感謝し活かされて奉仕させていただいているという思いが何か欠けてきているように感じてならない。

神職が率先して感謝することへのこだわりをもち、氏子崇敬者に対して積極的に講話していかなければならないのに、現状では怠っているとしか感じられないのは寂しい限りである。

犯罪が多発し、凄惨なニュースが毎日のように話題になる。新興宗教が、蔓延り、社会の中で問題を起こし始め、経済面や社会面と両面において不安を抱え込んでいて、板ばさみの状態である。

そんな世の中だからこそ、生かされている大切さや感謝することへのこだわりを伝えていくべきである。

裁縫の専門学校が毎年針感謝祭をするように小さな物から大きなものまで様々なものへ感謝すること、又家庭の中でも、地域の中でも積極的に感謝の意を伝える手段『ありがとう』ということばを使うようにすることが、ぎすぎすした社会を少しでも変えていく手助けになるような気がするのである。

神職が家族を養いながら生活出来ることに感謝して奉仕するということを強く感じなければならないし、又会合にこられた方、研修でこられた方、参拝でこられた方に対し、この『感謝』の大切さを伝えていくべきであると感じている。

神社のご利益を宣伝して祈祷を増やす事も大事だが、それだけに固執せず、神道とはなにかという事をもっともっと発信することへも力を注ぐことも大切である。

神社は、この両輪を使いながら維持して行く事が基本であって、それが、奉仕神社から

感じられないと思はれたならば、今日神社界の怠慢とも感じられてもしかたがないといわざるを得ない。

（愛知県　真清田神社　権禰宜）

夢の中へ

山本行恭

青年部の定例総会に当たり全国各地より参加頂いた諸君達が、常日頃より敬神崇祖を実践されておられることに、深尽の敬意を表しこの国のやや腐敗しがちな精神性の立て直しに対し、更なるご尽力をされますこと、先ずお願い申し上げておきます。

御承知の通り、今や我が国の社会情勢は非常に厳しい状態であると共に、これらを匡そうとする人達の心をよそに、一部の人々は完全に気持を亡くし零落しきっていると云っても過言ではありません。

単に、人が悪いという訳ではなく、取り巻く環境が悪すぎるのです。即ち、環境という器が人の心を育み、世に役立つ人を輩出するのですが、正しい者がそうでない者に呑み込まれてしまい、正論を云えば逆に奇人扱いにされてしまう嫌いがあります。

幸いにして諸君達は、御先祖・両親を通じて崇高な精神を培われ、次代の日本を背負って立つべく大きな使命を共有した者同志の集まりですが、今後も更にその輪を拡げて頂き

狂瀾を既倒に廻らすべく社会復興を目差して活動を展開するために、今一度すべての基本を養っておかなければなりません。

先ず古典の再認識。誰しもがそれぞれの悩みを持っていますが、そのような困難にぶつかった時、その答えは必ず古典の中にあるのです。例えば〝晦に拠る者は能く顕を見、顕に拠る者は晦を見ず〟と自らの立場を逆に置き換えれば解決の道も見出せたりするものですが、扨このような尊い教えはどのようにして学ぶかです。勿論さまざまな方法はありますが矢張り古典という原点に戻って学ぶべきでしょう。諸君達の職場にせよ、営む事業にせよ必ず徳の心が無ければなりません。徳は即ちあらゆる事業の基いであり、その基本が未だに固まっていなければ、棟や屋根が堅く久しいはずは無いと同じようにです。事業とは決して企業に於けるナリワイだけではなく業(わざ)なのです。人を指導するのも業、自らを修めるのも業であるのです。

次に道徳の教育。人の踏み行うべき道とは何なのか。生まれて今日までの数十年間、如何に道を守って来たか、或いは否かは個々人に相違はありますが、押し並べて正しい境遇に育った者は、例え今が裕福ではなくても、明るさと素直な心を持っています。ではその根幹とはご先祖であり悠遠な神が存在するのであります。彼の高僧・高田好胤氏は遠い先

祖、近い先祖と使いわけをされました。小さな子供たちに神・仏の観念を詳しく説明しても理解してくれませんが、君達の家に在る仏壇と神棚のお社を例に引き素晴らしい教育を施されました。遠い先祖とは正に神なのです。決して神仏の名称に執着されなかった姿勢こそ、例え衣服は違っても日本人の本当の心が高胤氏をそうさせたのでしょう。

しかし現今はどうか。家庭に律がない。社会にも国にもモラリティがなくなっています。行政を預る人、企業の頂点に立つ人、青少年を教化育成する立場にある人。そして一家の主にさえ何か欠けているものがあるから世の中はおかしくなったのです。

結局必要なのは道です。道とは、人が考えたり行ったりする事柄の条理であり、物事のそうあるべきすじみち、人の行うべき正しい道、道理をわきまえることなのですが、今や親が子供を叱れない。親が子供に叱られるケースはあっても。厳しく云うと嫌われるとか殴られはしないかと尻ごみして、見て見ぬ振りをする。義を見てせざるは勇無きなり。とは云っても中々他所の子供には叱りにくいもんですけど。こんな事がありました。大変感動したんです。少し前、神社内の工事中箇所があってトラロープを張って防御はしてあったんですが、その場所に小さな子供が親の目から離れて足を落としてしまいました。スネの擦傷だけで大きな怪我にはなりませんでしたが、応急手当をして最寄りの医者に運ぼう

としたんです。そしたらご両親が、いやお母さんだったと記憶してます。まだ若い方でしたが、何を云われるかと内心本当にビクッとしたんですが、「子供が迷惑をお掛けして申しわけありませんでした」と詫びられたのです。胸が熱くなりましたね。そして、爽やかな気持になりました。これこそ単なる一例ですが環境という素晴らしい器の中で育てられた人の心ではないですか。この子供はきっと心の優しい、他人に思い遣りのある豊かな人になるでしょうね。親とは子供の鏡でなければならないのに、最近は親の顔が見てみたい子が多くなりました。残念です。親の存在は大きく、子供の模範であったはずなんですが、戦後の教育が日本を、日本人を骨抜きにしてしまった所へ、輪を掛けて道徳と云う科目が削除されてしまったんです。

しかし、諸君達はこの様な教育を受けた先生から学問を受けたとは云え、幸いにして正しい家庭環境の中に育ったからこそ、今こうして青年部の列に連らなっているのは本当に親の御蔭だと感謝しなければならないと思います。一時の栄華に永い余韻を引きずったまま、何時までも酔い痴れている青年や、家庭を人を環境を破壊することでうっ憤を晴らす青年が居ますが、彼等は何故、一体何時からこんな生活を始めてしまったのでしょうか。

皆さん、是非とも道を踏んで徳を分け与えることの重大さをかみしめて、この役目を背

負っていただきたいと願います。

私ごとながら、去る九月に宮司の大任を拝命致しました。以前の権宮司という立場とは大違いで、責任は誠に重大ですが、論語に「父在せばその志しを観、父没すれば行いを見る。三年、父の行いを改むることなきを孝と云う」と在ります。その足跡を査しつつ原点の基本に立ち返りまして、地に足を、現場に足を踏み入れるようにしております。それは先ず清掃からなんです。入口の手水舎は綺麗か、ゴミは落ちていないかなどと、誠に当り前ですが一日はここから始まるのです。

諸君、昔はよかった〳〵、と云うのは負け犬の言です。しかし我々は今、諸君らと共に成し遂げなければならない大きな夢があります。夢の無い人に未来なし。夢の無い民族は亡ぶと云います。こんな世情だからこそ敢えて、過去の素晴らしかった精神の時代に思いを馳せ夢を抱き、一本〳〵の糸を手繰って、一人〳〵が道を査し求めるべき時代が今なのです。

共に精進することを誓い合い、猿田彦大神の御神徳である御みちびきの随々精励致しましょう。

（三重県　椿大神社　宮司）

蘇れ教育勅語

寺本正徳

みなさん、今月もようお詣りでした。今日は、若干かたぐるしい話になりますが、〝蘇れ教育勅語〟と題して私見をのべます。

明治二十三年十月三十日、明治天皇様は、親しく国民に教育勅語を下されました。

この明治二十三年は、いまと同じ様に、若者の心は乱れ、学校教育も希薄に、国民の国家に対する忠誠心も、宗教心も欠除の目立った時代だったと記録にあります。

明治天皇様は、この事態を大変にご心配になり、国家の将来のためにと、時の枢密顧問官の、元田、井上の諸侯にご命じになり、国家に対する忠誠心、忠孝を中心とする倫理に併せ教育に関する教育勅語の草案を練らせ起草されたのが、明治天皇様の発する〝教育勅語〟であります。

教育勅語は、朱子学を下敷きに漢文で書かれているために一般人には難解な文でした。だが、今般発刊されました、全国敬神婦人連合会の、〝教育勅語の平易な解釈〟という

ご本により、国民道徳の基本、世界人類の道標とも申すべき、〝道徳理念〟を知ることができます。

戦前、戦中の日本国民は、教育勅語の理念を柱に心を一つに、ひたすら道義立国の道を歩んでまいりました。

だが残念にも有史始まって以来の敗戦により、教育勅語の精神は、社会からも、学校教育からも、家庭からも完全に排除されました。

それから五十有余年のいま、青少年の心は乱れ、公徳心も薄れ、学校も社会も病みに病んでおります。

この前も、学校の先生と話しました。

先生の話されるには、「私達も一介の労働者です。目に見える教育は一生懸命にします。目に見えない教育までも積極的にするシステムになっていません」

というお話でございました。

みなさん、社会の病巣、学校の荒廃はここにあると思われませんか。

戦中までの日本国民は、教育勅語の理念を柱に、道義立国の道を突き進んできました。

〝教育勅語の平易な解釈〟というご本には、国民道徳の理念が、十二の徳で説かれてい

ます。（読み上げてみましょう）

一、子は親に孝養をつくしましょう
一、兄弟姉妹は仲よくしましょう
一、夫婦はいつも仲むつまじくしましょう
一、友達は互いに信じ合ってつきあいましょう
一、自分の言動をつつしみましょう
一、勉学に励み職業を身につけましょう
一、知徳を養い才能をのばしましょう
一、人格の向上につとめましょう
一、広く世の人々や社会のためになる仕事に励みましょう
一、法律や規則を守り社会の秩序に従いましょう
一、正しい勇気をもってお国のために真心をつくしましょう

以上

明治政府は、明治四十二年この教育勅語を世界各国語に翻訳して発表しました。諸外国では、いまでも教育勅語の理念が教育の場に生き、生かされていると聴き及んでいます。

教育勅語の理念を受け継いだ日本国民は、あの焦土と化した国を、アッという間に世界の工業国、経済大国に発展させたではありませんか。

だが残念にも、物で栄えても心が亡びました。それも一重に戦後の日本に教育がなかったの一言につきます。

例えば、靖国の問題一つを取ってみても、内政干渉もはなはだしい他国の言動に右往左往するばかりです。

「日本には、古くから、国家のために殉じた人を神と祀り、讃え崇める伝統的美風、美わしい文化があるのです。祀られた神に、永く永く感謝の誠を捧げる。これが日本人の魂であり、心なのです。」

今日の日本は、余りにも
輸入文化に毒されてはいませんか。
即席の知識人に振り回されはいませんか
誤った教育で迷える子羊になっていませんか
道徳理念までも失ってはいけません。

〝蘇れ教育勅語〟を話すために、このご本を使わせて戴きました。

手に取って見て下さい。

最後に教育勅語の理念を、いま一度家庭に、社会に、学校に蘇らせましょう。

松平定信侯というお方の歌に

こと足れば　足るにも慣れて　なにくれと　足るが中にも　なほ嘆くかな

というお歌がございますが、物の満ち足りた昨今、深く反省させられる歌ではございませんか。

蘇れ教育勅語、蘇らそう教育勅語の理念、声高く訴えます。

ご静聴ありがとうございました。

合掌

（大阪府　稲荷神社　禰宜）

神さまによろしくね

木下久榮

私には、熊本に十一才と九才、そして五才の孫がおりますが、三人共とても元気な男の子でございます。

昨年の秋、末っ子でわんぱくの子が、大騒ぎを起こしてしまいました。

それは、保育園でのでき事でございます。

お友達とどんぐりの実で遊んでおりましたところ、どんぐりの実が鼻に入ってしまったのです。自分でとり出そうとさわっているうちに、どんぐりの実は、どんどん奥の方に入ってしまい、びっくりした孫は、先生に助けを求めました。

驚いた先生は、孫をつれて耳鼻科に急行され、知らせを受けた両親もまた大慌てで病院にかけつけまして、一同祈るような気持でお医者様の処置を見守っておりました。

でも、どんぐりの実はなかく出てきません。お医者様は、いろんな方法を試みながらどうしたらいいかと、首をひねっておられる御様子、まわりも気が気ではございません。た

だ事ではないと感じた孫も、まっ青だったそうでございます。
そういう緊迫した状況の中で、お医者様は根気強く処置を続けられ、そのおかげで奇蹟のように、どんぐりの実の取り出しに成功、やっとどんぐりの実が出て来たそうでございます。
どんぐりの実が出て来た瞬間、緊張の糸がほぐれて皆ほっと胸をなでおろしたという電話が、娘からかかって参りました。
事の一部始終を聞きまして、主人も私もまた「本当によかった。これこそ、神様のおかげ。」と胸をなでおろした事でございます。
ちょうど電話で娘と話しております時に、電話の向うに孫の明るい声が聞こえましたので、電話口によびまして、
「どんぐりの実がでてきて、よかったね。神様がお医者さんに、お力をかして下さったおかげよ。これから　八幡様に、『ありがとうございます。』とお礼のおまいりに行ってきますね。あなたも、神様におまいりしなさい。」と申しましたら
「おばあちゃま　神様によろしくね。」という弾んだ言葉が返って参りました。それを聞きまして、思わず笑ってしまいましたが、どんぐりの実が出て来たことを、誰よりも喜

び安堵している様子、感謝している心が伝わって参りまして、じんと胸にせまるものを感じました。

「神様によろしくね」と、ただそれだけの言葉ですけれども、その子にとっては危機を救っていただいて大変ありがたいと心から感謝している気持ちと精いっぱいのお礼の気持をあらわす言葉だったのでございましょう。

それは、子供らしく素直で、この子に一番ふさわしい心情表現のように思います。

それに、このような言葉がとっさにでて参りましたのは、この子が日頃神様を身近かに感じている証しではないかと、ちょっと身びいきな見方をしております。

近ごろは、「神様は、必ずいらっしゃる」という神様の存在を信じる心や神様を畏れ敬う気持が、薄れているように思います。

神様のお姿を見る事はできませんし、またお声を聞く事もできませんので、神様の実在を信じる事ができないのかも知れませんし、実感が湧かないのかも知れません。

それに、第二次大戦後は目に見えないものや不思議なもののお力を否定して参りました。

しかし、ある科学者が遺伝子の働きの中に神様のお働きを見たとおっしゃっておりますが、人間の力を超えた偉大なるお力をもった方がおられるからこそ、自然の摂理は驚異的

であり神秘的なのです。私達が、人間業を超えた広大無辺のお力や不思議なお力に守られ、導かれ生かされている事を認めないのは、ごう慢であり、不遜だと思います。科学万能主義では困ります。神のおん手の尊いことすばらしいことを認識して、謙虚にならなければなりません。

ニュースなどを見ておりますと、中東の人々は、「神様のお加護によつて助かった。」とか、「神様に守っていただきたい。」などと、日常の会話の中で普通に話しておりますが、素直に神様の存在を信じ、心から神様を信頼し、人間は、神様のふところの中で生かされているという強い信仰心を持っていて、神様を身近かに感じ、神様の事を人々の前で話すことに何の抵抗もないようでございます。この信仰心の強さには感心してしまいます。

これは、外国でのでき事でございますが、飛行機が無事に着陸した時、私のとなりの席におられた外国の方が胸に手を当ててお祈りしておられました。無事に着陸したことを神様に感謝されたのでしょう。とても印象的でございました。

国が違い、一神教と多神教という違いはあっても、人間として、信仰心を持つ事の大切さに変りはございません。なぜ、そんなに信仰は大切なのでしょうか。何度も申しますように、人間業を超えた高い能力や不思議なお力をもった方がおられ、その方を神様とおよ

びし、その神様のやさしくて大きいふところの中で私達は生かされ、守られ、恵みを与えられているわけでございますから、この事を認め、受け入れなければなりません。驚異的で神秘的な世界に目を向ける事によっておのずから神様の存在を信じ、尊び、畏れ敬い、謙虚になり、祈りの心が生まれます。これが信仰の前提でございます。

このように感謝の心と神様を信じる心があれば、守られ、生かされ、恵みを与えて頂いている事への感謝をし、神まつりをして敬神の誠を捧げ、更なるお加護を祈るようになります。

神様にすべてをゆだね、家族の平安と幸せ、家庭の繁栄をお願いし、神様を心のよりどころとして、神様との一体感を持ち、神様を信頼しながら生活する事は、とても大事な生き方でございます。祈る事により元気や勇気を頂き、苦境を乗り切る力を頂く事もございましょう。さまざまなお助けを頂く事もございましょう。

信仰心があると心が安定して、精神も強くなります。

それに、神様を身近かに感じ、神様と向きあう事によって身を正し、神様の御心に恥じない行いをするように心がけるものでございます。

信仰は、生き方の基本ではないでしょうか。

ところで、私達は、神様にお守りいただいている事を特別意識いたしませんが、日常生活の中で、危なかったけれども、大事にならなくてよかったと思う事がございます。そのような時、ただ「よかった。」と胸をなでおろすか、「神様のおかげ」と神様に感謝の気持ちを持つかは、さまざまでございます。

また、何かがあった時、単なる偶然として気にとめないか、神様の御配慮によるものと受け止めたり、感謝したりするかは、個人の考え方、信仰心をもっているかいないかによっても異って参ります。

これは、若い女性のお話でございますが、いつものように出勤はしたものの忘れ物に気づき、どうしても自分のうちに帰らなければならないような気持になり、上司の許可を得て家に帰り、玄関をあけますと、シチューのいい匂いがふあっと広がっていたそうでございます。

朝、シチューを火にかけたままにしている事を思い出し、慌てて火を止めて胸をなでおろしたという事でございますが、忘れ物に気づいて家に帰りたくなった事を気にもとめず単なる偶然と考えるか、神様のお加護によるもの、御配慮によるものと感じるかは、人それぞれでございますがこの女性は、これこそ神様のおかげと感謝したという事でございま

す。このように偶然とは思えないような不思議な事が、私達のまわりには、多いのではないかと思いますが、特別自覚する事もなく、案外気づかないまま過しているのが現状ではないかと思います。

私達が意識するしないにかかわらず、いつも神様にやさしく守られ、導かれている事を信じ、神様を身近かに感じ、感謝をしたり、お加護をお願いするという心は、簡単に自然に育つものではございません。

教え育てなければなりません。信仰心を育くむには教化が必要でございます。

しかし、今、その教える場がないのです。

以前は、家庭が信仰心を育くむ役割りを担っており、子供は大人の後ろ姿を見て育ち、神まつりの手伝いなどをしてその心を養いましたが、現在はそういう環境にないようでございます。

教育の場も宗教教育はさけておりますので、こういう状況のもとでは神様を信じる心をもつ事も、畏れ敬い、謙虚なこころをもつ事もできない人間が育つてしまいます。

その結果神様に感謝する事も知らず、神様の御心に恥じる行いを慎しみ、身を正すという気持がうすく、罪の意識がなく、わからなければ何をしてもいいというような風潮が生

まれ、「天知る地知る己知る」という人の道の根幹をなす考えが消えようとしております。

日本の神様の教えは、「清く明るく素直で心正しい生活をしなさい。まごころから事にあたり誠実に生きなさい。」という事でございまして、信仰心をもつ事は、個々の幸せのためだけでなく、道徳性の涵養につながります。

先日、TVを見ておりましたところ、海上保安庁に勤めて、命を張って第一線で活躍しておられる方の奥さんと、小さな子供さんが神棚に向って手を合せ、「お父さんをお守り下さい。」と一生懸命にお願いしている様子が放映されておりましたが、小さな手を合せておまいりしている姿から、お父さんの無事を祈る心が切々と伝わって参りまして大変感動いたしました。願いは通ずと申しますので、このような真剣な祈り、純粋な祈りは必ず神様の御心に届く事でございましょう。

神様を拝む心をもっている子供は、心健かに成長するのではないでしょうか。そして信仰心は、このようにして育くまれていくのではないかという気がいたします。

子供や孫に、折りにふれ、神様の大きなお力を尊び、神様を敬う心をもつこと、神様からお恵みを頂き、神様のふところの中で、やさしく温かく守られ導かれていますので、感謝の気持ちをもつこと、神様をおまつりすること、平穏な生活をするために神様のお加護

をいただくことができるように、祈ることの大切さを教えると共に、清く明るく素直で正しい生活に心がけ、まごころをもって、誠実に生きる事の重要性など、信仰の基本となる事をわかりやすく、納得のいくように教え、日常生活の中で、神まつりの手伝いをさせたり、一緒におまいりをさせたりしながら、実践を通して神様への親しみをもたせ、敬神の心情を育くみ、信仰心を培っていきたいものでございます。

（熊本県　大江八幡宮　禰宜）

靖國を思ふ

松坂公宣

靖國神社が、国事に殉ぜられた英霊に感謝する国民信仰に支えられた神社であることは今更いふまでもないが、しかし近年その靖國神社の真姿をことさらに曖昧にするごとき言説が横行し、心ある人々を嘆かせている。春秋の例大祭や終戦記念日に際しマスコミが、閣僚等に対して「公人・私人いづれの立場での靖國神社参拝か」といふ質問を執拗にくり返すなどは、その好例である。昨年も八月十五日を前にしてマスコミは、小泉内閣の閣僚を追及した。話によると靖國神社に詣でるのは好ましくない。まして公人としての参拝は許されぬとの感情をむき出しにし、あたかも踏み絵を踏ませるような態度で詰問する新聞記者もいたらしいが、しかもその質問に対して閣僚の大半も、なぜか曖昧な返事で言葉を濁していたといふ。靖國神社参拝について、一々公私の別をただすマスコミの姿勢はもちろん非礼きはまるが、それに対して毅然として応対もできぬ閣僚のあり方にも、国民としてはただ呆れるほかありません。

さて歴代の総理が靖國神社を参拝しておりますが、小泉総理においても一昨年八月十五日に靖國神社を参拝すると公言してきました。靖國神社に祀られる護国の英霊に慰霊と感謝の誠を捧げたいといふ総理の断固たる決意に大多数の国民も共感していました。しかし、八月十三日の午後、小泉総理は靖國神社に参拝いたしました。小泉総理の靖國参拝に対する批判が強まったとしても、十五日の参拝を断固として言ってきた小泉総理のことですから、私も十五日に参拝されると信じていました。靖國神社に祀られている英霊は、我々国民にとって八月十五日とはどういう意味を有する日であるか、靖國神社、伊勢神宮にとって崇敬とはどのような意味をもっているものなのでしょうか。八月十五日という日は、いかなる意味をもつ日であるのか。それは決して終戦記念日などでなく、天皇及び国民が共に我が国の発展と世界の平和を祈り、心から追悼の意を表敬する日なのであります。これは多くの国民の理屈を超えた素直な国民的感情であり、それゆえ同日に靖國神社に参拝したいとの総理の気持ちに多くの国民は共感し、総理としての靖國神社参拝の意向を支持したのです。八月十五日といふ日は、戦没者を悼む国民的な特別の日であること、その日に、天皇陛下御臨席のもと執行される政府主催の式典に合わせて総理が靖國神社を参拝し、慰霊と感謝の念を捧げることなのです。そして戦前から今日迄ずっと全国民的信仰に支えら

れている靖國神社に、国民の代表たる首相や閣僚が参拝するのは、国が靖國神社に対して敬意を表する自然の姿ではないでしょうか。

ここで昨年朝日新聞の八月の空に掲載されました東京都に在住の高校生、坂田夏絵さんが投稿された「歴史を学んで平和を願う日」といふ題文をご紹介させていただきます。

戦争体験者にとって、八月六日と九日、十五日は忘れられない日に違いない。私にとっても今年からその三つの日は一番、平和を願う日になった。十八歳になって、やっと第二次世界大戦のことを本気になって勉強し始めた。小中学校では、時間数の足りなさから、近代史にはまるで手をつけなかった。政治経済の授業でビデオや資料を基に、私たち高校生が知らなくてはならないことを勉強する。事実を知るにつけ、何も知らなかった自分にあきれた。この機会に新聞や本を読んで、どんどん知識を増やそうと思った。戦争を体験した人が少なくなっている。次世代に、私たちが戦争を伝えなくてはいけないという思いが生まれた。私が戦争を伝えることによって、戦争で亡くなった人たちの悲しみが、少しでも癒えるような気がするからだ。

その思いは少し形を変えて私の夢となった。将来、日本にきた海外の人に、日本の素晴しさと共に、戦争のことを伝えたい。戦争をした国のどちらが悪いといった議論ではなく、

戦争のない、兵器のない、平和な世界をつくるために、六日、九日、十五日は、過去を振り返り、未来を思うためにあると思うからである。以上ご紹介させていただきましたが、私は、この坂田夏絵さんの文章を読んでみて所感として感じましたことは、とかく現代の若者は自己中心的で、人を思いやる心がないとか言われる方々が多くおられますが、少なくとも私はそんなことはないと思っています。この坂田さんのように、先の大戦で亡くなられた多くの方々のことを思う優しい心を持ち続けて、今の靖國神社の真姿を今後とも、子や孫の世代まで語り継いで、しっかりと自覚のある心を養うことが大切なことであります。

今日すでに戦後生れの者が、総人口の六〇%以上といふことを思うとき、その努力は決して容易ではないかもしれませんが、しかし靖國神社に昭和六十一年七月に復興されました遊就館の拝観者が再開いらいすでに二七〇万人を超えたそうです。その中でも若い世代の人が、たくさん訪れるということを靖國神社の神職さんにお聞きいたしました。

それは、私どもを大いに力づける事実ではないでしょうか。

今年も残り五十日余りで、八月十五日を迎えますが、我々は、あの大戦で亡なられた方々の前に恥しくない生き方をしなければと思う今日であります。

（鹿児島県　霧島神宮　権禰宜）

神々の集まる処

牟禮照子

宇宙は、人間にどんな働きをしているか考えた事がありますか?。地球は、太陽の周りを、三六五日と四分の一の周期で、自転し乍ら周っております。これが太陽暦です。月は、地球の周りを二八日間の周期で一周しております。太陰暦です。木星は又その外側を太陽の周りを十二年かけて一周します。十二支です。人間の標準体温は三六・五度だそうです。脈拍は、三六×二の七二、です。血圧は、一四四、呼吸は一分間十八回、波も十八です。これが人体のリズムなのです。又人体にはツボが、三六五個あります。宇宙と同じリズムによって、人体もリズムを繰返しております。それ故、人間の体は、小宇宙と云われております。太陽の周りを廻る地球は大宇宙であります。小宇宙には、三六五のツボ（経穴）があり太いエネルギーが縦に流れております。このエネルギー、つまり、気の流れが乱れますと病気になります。体に刺激を与え、気の流れを良くすれば病も癒されます。小宇宙に、ツボがあるなら、大宇宙にもツボがある、大地のツボこそ聖地と云われる処で、そこ

は大変気持が良く、大きなパワーを感じます。大地のツボは、神聖な場所であり、神々が集まる処なのです。此のツボが地球上に三六五ヶ所あるのか?、それが今、私の確めたい問題点なのですが、古代から世界の人類は、この清らかな聖地を、龍脈と申し、大地の気の流れを感じ、生気の最も集中蓄積する処の周辺の山、丘、凸地を求め、河、川、池、湖、海と、大地の生気の流れの在るところに都を造りました。そこは、四神相応の地でありまして、北に玄武、東に青龍、西に白虎、南に朱雀と、神様に守られた最も良い地相であります。皇居も、京都御所もそうした、地相を備えております。人類はこうした聖地に神殿を造り神々を奉齋し栄えてまいりました。

日本の神社こそ、聖地と云われるところに建立され、そこは正に神々のお集まりになる処です。

私が非常に感動しております出雲大社の神迎え祭についてお話をさせて頂きますと、旧暦の十月十日、この日は帰一日つまり、神の日に還る日で満月の日となります。夜七時出雲の稲佐の浜に、日本全国の神々がお着きになります。松明の明りの中、出雲大社の神職が全員稲佐の浜に、白の装束で、お迎えされます。夜七時、大ぜいの人々がお迎えする浜は白浪が浜に白くうねり乍ら、清らかな雰囲気の中、波打際に押しよせます。真白いさゞ

波となって、浜に打ち上げます。宮司様がお迎えの祝詞を奏上なされ、神々は二本の榊の神籬に結ばれた澤山の紙垂にお移になられます。神々は、こうして、出雲に上陸され神々しい空気の中に、恭しく、本殿までの道を延々の行列をつくり、全国から参列した人々を従えて境内十九社に迎えられます。全国では、この月、神無月ですが、出雲は、神有月となります。昨日まで唯の浜であった稲佐の浜は、神々をお迎えして、清々しいパワーと何とも云えない癒(いや)しの浜に変ったのには、唯々驚きでございました。翌日から一週間、全国の神々は出雲大社の境内の、十九社でお過ごしになり、人々に幸福を授けるご相談をなさるそうですが、この間、大社では、神在祭のお祭りが、毎日一週間、行われ、最后の日は、午前九時から神在祭、午後四時から神去祭が斎行されます。神去祭(からさでさい)が済みますと、二本の神籬は神々が去られ、唯の榊となります。まことに、神おわす時と、お帰りになられた後と、全然違(ことな)ります。神々は又、稲佐の浜から波に乗られて、全国津々浦々にお帰りになって行かれます。この神々の集まる御神域にみせられて、この時期、私は出雲を訪れます。神々の集まるところ、人々は集まります。そこで大きなパワーを戴くことが出来、気持が大変よいのです。大地のツボ！聖なる地こそ神々の集まるところです。皆様も一度、稲佐の浜で体験なさってみて下さい。

白波に乗りて来たれる神々を
迎える浜の夕べ清(さや)けし

（長野県　冨士浅間神社　禰宜）

感動を共有しましょう

中木屋　豊

フラミンゴの生息する、アフリカ大陸の自然は、雨期と乾期がはっきりしています。長い年月の間、雨期と乾期を繰り返し、低い土地に運ばれた岩塩が凝縮され、乾期には結晶となっています。十一月からの雨期になって、そこに湖が姿を現します。また、大地溝帯の火山活動は、ソーダを大量に含んだ湖を造りだします。有害物質を含んだ湖は、外敵を寄せ付けない、天然の［聖域］を造りだすのです。ソーダも大量の塩分も、当然フラミンゴに有害なものです。しかし、ソーダを含んだ湖には、大量のバクテリアが発生し、塩分を含んだ湖には、［藍藻（ランソウ）］という藻が育ちます。それらがフラミンゴの食料になり、繁殖活動が行われるのです。

彼らは、二つの方法で、その害から逃れるのです。その一つは、くちばしにあり、のこぎり状になっていて、バクテリアや藻だけを食べられるように、進化を遂げているのです。今一つは、真水の流れるところを知っていて、羽についたソーダや塩分を落とすことを、

忘れないのです。このとき外敵に襲われ、命を落とすことがありますが、集団で乗り切る努力をするのです。フラミンゴだけではありません。天然・自然の営みに合わせて、すべての命ある動植物は、進化を遂げたり、その恩恵を受けて、次の世代に命を伝えてきました。

江戸時代後期から明治にかけての国学者鈴木重胤先生は、日の出日の入り、月の満ち欠け、星座の運行、季節の移り変わりなど、一定の法則の下に存在するから、それを天然・自然という。人間にもそうした法則のようなものがあれば、たいした間違いもなく生活できる。それを「当然の道」と云い、先祖が歩いてこられた道だといっておられます。

確かに、人間も長い歴史の中で、様々な苦心と工夫や努力を続け、今日の発展した社会を、形成してきました。しかもそれは天然・自然との調和や共生の歴史でもあります。自然のもたらす脅威におびえつつも、恵みに感謝する、慎ましやかな生活だったはずです。科学技術が発展する中で、我々は少し思い上がったのかも知れません。

現在、農業の分野を中心に、音楽を利用した取り組みが、広く行われています。乳牛に聞かせれば、搾乳量が増える。鶏に聞かせれば、採卵量が上がる。豚に聞かせれば、死産率下がる。トマトに聞かせても、収量が増えるといった結果が、報告されています。中に

は、クラシック音楽を聞かせて、まろやかな焼酎造りを行う、醸造元もあります。本当に効果があるのでしょうか。あるのです。美しい音楽は、人の心を和めます。歌い継がれてきた民謡は、きつい労働で疲れた体を、癒す役割を果たしてきました。昔から音楽は、妊婦に聞かせると、胎教に良いといわれてきました。ところで、歌手の森進一さんの声は、決してきれいではありません。いわゆるだみ声です。しかし、歌はうまいといわれます。それではうまい下手は、何を基準にしているのでしょう。それは、聞き手の心を、どれだけ打つかです。歌うことで、相手に強く働きかけ、嬉しい時も、悲しい時も、心が揺さぶられると、感動して目から汗が出てきます。

少し悪い言葉として使われる、「よばう」の本来の意味は、呼び続けることです。好きな相手の名前を、呼び続け働きかける言葉が、相手に通じて初めて、目的を遂げることができます。言葉に魂が宿るからの結果です。

さて、「音」と言う字は、立つ日と書きます。太陽が立つ・あるという意味でしょう。私たちの目にするもの、肌に触れるものは、全て元素の組み合わせで出来ています。全ての元素は、原子核の周りを、電子がプラスマイナスのイオンを帯びて回っているので、振動して音を出しているのです。太陽の持つエネルギーがなせる業です。太陽がない状態を

「闇」といいますが、これは音が出ない状況を表しています。遠い先祖たちは、物事の「真理」を理解し、文字を定めたのではないでしょうか。文字だけではありません。我々の生活の根底に流れる、宗教的行事にも「真理」があるのだと確信します。信じるに値する、実体験がなくては、長い歴史を受け継ぐことは出来ないと、考えるからです。私たちは、常に祈ります。[祈る]という言葉は、強調の接頭語「い」と、述べる・告げる・知らせるなどの意味の、「のる」からできています。

私たちの祈りは、ある時は五穀の豊穣であったり、幸福であったり、世の中の平安だったりします。心からの思いや願いを、神様に伝えます。美しい日本語の[言霊]が、それを可能にしてくれます。天然自然が、私たちの働きかけに、全て反応してくれるのです。心からの願いや思いが叶う時、深い感謝の心が、自然に生まれます。感動します。今日から一緒に祈り、感動を共有しましょう。

（鹿児島県　稲荷神社　宮司）

神を思うとき

山本秀典

「さておよそ迦微（神）とは古御典等に見えたる天地の諸の神たちを始めて、それを祀れる社にまします御霊をも申し、また人はさらにもいはず鳥獣木草のたぐひ海山など、そのほか何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて可畏き物を迦微とは云うなり」

これは江戸時代の国学者本居宣長の古事記伝巻三の一説であります。

「尋常ならずすぐれたる徳のありて可畏き物を迦微とは云うなり」のすぐれたものというのはプラスにだけじゃなくマイナスにもすぐれたものを表わしているということです。天地創造の神、神社等に祀る神はもちろんのこと人間も木も草、海山すべてのものが良きにつけ悪しきにつけ平均から遠のいて尋常でないものを神というとのことです。

この一説は、八百万の神々を祀る神社神道の信仰をうまく表わしている言葉ではないかと思います。自然と一体した生活をしていた当時の人々は自然の恵みに感謝し敬い、超越した力に畏れ祈りを捧げていたと思われます。

しかし明治以降、日本の社会は西洋からの物質文明により自然を支配し、人間中心の社会を造り、自然と人間との関わりを希薄なものに変えてきました。自然の中から神を見出してきた日本人にとって、物質文明は日本人の心（精神）の中にある神の領域を蝕んできたといえるのではないでしょうか。現代人の社会、家庭環境においては江戸時代の信仰は頭では理解できても、心と体で本能的に感じることはできにくいように思われます。

ここで話は変わりますが、こうした人工物質中心の現代社会を築いた源である科学（物理学）と古来より人類が育んできた精神世界（東洋宗教思想）がどんどん近ずいているという興味深い話を紹介したいと思います。

科学のなかで中心的存在である理論物理学は十六世紀末にニュートン力学が地球上の物理運動をうまく表わし、それと哲学者デカルトの「物心二元論」（精神と物質は全く別の存在である）が重なり近代科学思想が確立されたということです。この思想は物質と精神は全く切り離して扱う考え方でこの思想では宇宙及び全てのものは数多くの異なる物体が組み合わされた巨大な機械として捉えるのです。これは医学にも適用され身体を精神と切り離した物質的機械とみなすようになったようです。こうして物質と精神は全く別なものとして認識し科学は発展していきました。中でも物理学は機械工学へ発展し産業革命を興し

人類を物質的に豊かにしました。
そして十九世紀にはいり物理学はこれまで解明されていなかった大きな宇宙と目に見えない小さな素粒子（原子、電子等）の世界へと向かっていったのです。宇宙空間はアインシュタイン等が、また素粒子の世界はボーム、ハイゼンベルグらの「量子力学」が理論づけました。まだこれら二つの世界はわからないことが多いようですが、おもしろいことに「量子力学」を切り開いたノーベル賞の科学者達は皆「量子力学を追求していくと、はるか昔の東洋の賢者達が説いた教え（仏教、ヒンドュー教、儒教、道教他の宇宙観、アメリカ他の原住民、アイヌ、日本神道の思想）にどんどん接近していく」と言っている点です。このことを詳しく述べることはできませんが、目に見えない素粒子の世界では原子は規則正しく運動せずこれまでの物理学とは異なる東洋的な精神世界に近い動きをするのだそうです。そしてこれからの科学は物質と精神を融合させて研究されるだろうということです。

これは単に素粒子の世界のことだけなのかもしれません。しかし科学がこの世の物事を分析し、探究し理解して行き着いた先に、東洋的思想哲学が見えてきたという点は大変興味深いことです。また目に見えない素粒子の集まりによってこの世のものは全て成り立っているわけですから、この世の全ての事象、物質の本質と捉えても良いのかもしれま

せん。このことと宇宙、この世、あの世といったすべての真理を説いた東洋思想哲学とが結びついてくるというのは偶然とは思いがたいことです。

これらの物質と精神を一体に捉えることは八百万の神を仰ぎ全てのものに神が宿ると信じていた神道的思想に結びつくことであり、私にとってはとても心に残る話でしたので紹介させていただきました。

さらにこの場では紹介できない他の資料を参考にしますと、この世、あの世のすべてのものは物質、空間、時間を超えた精神（不思議な力）のなかに存在しており、見た目は個別に存在していても、そうした目に見えない力ですべてが繋がっており互いに相関しながら生命を宿し固体を維持しているということです。

いろいろと紆余曲折してわかりにくいかと思いますが最後に以上の事柄を踏まえてみても、神を思うときは目先の我欲のみを祈るのではなく、すべてのものの恩恵により生かされていることに感謝し、目に見えない神（不思議な精神）の力を感じ畏れ敬う気持ちを持たなければいけないと思うのであります。大きく変化した生活環境のなか、我々はそうした感性を持てる心と体を養うことが大切なのでしょう。

（岐阜県　伊奈波神社　権禰宜）

狐の狛犬

田代壽興

心配されましたお天気も素晴らしい日和となりまして、かような中で初午祭ができましたこと、皆様とともにお喜び申したいと思います。これもお稲荷様の御神徳のお陰でしょうか、ありがたいことでございます。

さて、本日社殿まで登って参りましたら、大理石の素晴らしいお狐様が、まず目に留まりました。東京在住の「平野　謙」様の御奉納と伺いましたので、その旨祝詞にも奏上させてもらいましたが、その折り、区長さんより、「このお狐さんはなんと呼べば良かっでしょうか。狛犬では変だし。」とお尋ねがありました。

「ご承知のように狛犬は獅子の形をしておりますし、この狐は、神様に祈願者の心をお伝えするお使いの意味で、神使―神の使いあるいは神狐―神のキツネ、と言われております。」とお答えしたのですが、神使とか神狐ではちょっと判りません。そこで何か良い言い方は無いものかと考えてみましたら「狐の狛犬」という言い方をしている本を思い出し

まして、「狐の狛犬と呼んだら良いのでは。」とお答えした次第です。

お稲荷様と狐、よく油揚げ等がお供えされておりますので、お稲荷様の御祭神はお狐様ですか、と質問なさるお方がございますが、ご承知のように、お稲荷様の御祭神は「宇迦之御魂神」と申しまして、お狐さまではございません。

この神様は、五穀と養蚕を司る穀霊神とされております。宇迦之御霊神の宇迦は、食物の古代語「ウカ・ウケ」で、ウカノミタマとは、食物の霊を意味しています。その中でも、とりわけ「稲の霊」として、崇められてきました。伊勢の外宮、豊受大神宮に祀られている神様も宇迦之御霊神と申されます。

また「稲荷」という呼称の由来も、「稲生り」「稲が生育する・成長する」から来ており、収穫の上は肩に荷って神に捧げたので、「稲を荷う」という文字を用いたのだと言われております。

狐は、お稲荷様のお使い・神使とされておりますが、どうして狐が稲の穀霊である宇迦之御魂神の神使とされたのか、その背景にはいくつかの説がありますが、一般には①稲荷の神は、食物神でありますから、別名御饌津神とも言われ、ミケツという音から、キツネの古名「ケツ」が想起され、御狐・三狐となったと言われております。また、一説

には、

②キツネを田の神の先触れとみたからとも言われております。キツネが山から降りてきて、稲田の近くに食物をあさり、子ギツネを養おうとしたのは、ちょうど稲の稔った時期から冬にかけてであり、昔は、山の神が春に下って田の神となり、秋には山に戻って山の神になると信じられていたので、秋の稲田でキツネの姿を見たり、声を聞いた者は、何かしら神霊観をおぼえ、山にいる神霊の先ぶれと見てキツネを神の使と考えたということです。

御奉納の新しいキツネの狛犬は、参拝の皆様の願いを神様にお届けし、神様のお心を皆様にお伝えするよすがになると思います。

またこの外に、本年は朱の鳥居が四本、朱の幟旗が百本奉納されたと伺いましたが、街から見てみますと林立する朱の旗と鳥居は、まるでお城のようで、緑に映えて、ひときは目立っております。

お稲荷様の鳥居や旗はご存じのように「朱色」と決まって居るようですが、この朱の色いわゆる赤は「明け」の色で、昇り来る太陽の色、ものごとのはじまり、大地の生命力の象徴とされています。先ほど申し述べましたように、お稲荷様の稲荷は「稲生り」の縮まったもので、稲の一粒の種が、何倍、何百倍にも殖えるように、元々は稲の神、農業の神で

あったものが、広く殖産の神として崇められるようになり、商売繁盛の福の神としてはもとより諸産業の守護神としてあらゆる職業の人に信仰されるようになりました。

稲荷神社の数は、登録されたものだけで三万五千社あると言われ、全国で一番多く祀られている神様です。その他家庭で祀っているもの、商店や企業で祀っているものを加えると百万にもなると言われております。人気ナンバーワンの神様と言っても良いでしょう。最近では、企業の海外進出に伴い、外国にも稲荷社が祀られているそうです。

今日は牛深ロータリークラブの創立四十周年記念式典が行われるとのことで、県外のお客さんも見えられますので、赤い旗の林立には、びつくりなされるのではと思います。

この後、年男の皆様が奉納なされた餅投げが行われるそうですが、餅投げの賑わいは神様も喜ばれ、皆様のお心にご満足為されることと思います。

奉納は、皆様のお稲荷様に対する篤い信仰の心、崇敬心の表れでございます。

「神は人の敬によって威を増し、人は神の徳によって運を添ふ」という言葉がありますが、今日の経済不況の中にあっても、このように数多くの方が御奉納下さる皆様の篤き心をお稲荷様も大変喜ばれ、良い運をお授け下さるものと信じます。

今後とも、今日のような敬神崇祖のお気持ちで毎日をお送りいただき、それぞれのお立

場・お仕事で世のために頑張っていただきたいと希望いたしましてご挨拶と致します。ご参拝有難うございました。

（熊本県　牛深八幡宮　宮司）

「つくる会」の教科書について

近藤政彰

私が神職になって以来、神社界には大きな課題が二つありました。一つは「自主憲法制定」でありもう一つは「教育の正常化」でした。

「自主憲法」は当分の間無理だが、教育の問題、特に偏向教科書については、そろそろ何とかならないものかといつも考えておりました。ところが、この程「新しい歴史教科書をつくる会」が発足し、そこで作られた歴史教科書が一般に公開されました。これは私たちの念願であり、これにより正常化の糸口ができると大いに期待いたしました。しかしながら、この教科書は全国的な不採択運動により、採択ゼロに近い敗北を喫してしまいました。

そしてある日のこと、私の地元である飯田地方の新聞紙上におきまして、「新しい歴史教科書をつくる会」が執筆した扶桑社版の歴史教科書（これからは扶桑社本といいます）の不採択を訴えるアピールを決議した実行委員会（唐沢慶治会長―飯田地方の小学校の現

任教師―）のことを知りました。

これによると、扶桑社本は「歴史的事実における基本的な誤りが多々ある」とのことでした。私は新聞の読者のほとんどが扶桑社本を読んでいないことをよいことに、全く根拠のない中傷が公然と行われていることに義憤を感じまして、唐沢氏に対して一体どこが間違っているのかと手紙を書いて問い質しましたところ、十一項目にわたり指摘がありました。時間の都合上全部申し上げませんが、例えば、聖徳太子の業績として、「日本が大陸の文明に吸収されて、固有の文化を失うような道はさけたかった」とあるのに対して、「太子が日本の文化のあり方についてどのように考えていたかを知る資料はない。これは執筆者の希望である。」と批判します。

また東大寺の大仏の写真の説明として、「いくたびも戦乱による破壊にあったが、そのたびに修復され今に伝えられた。現在の上半身は江戸時代の補修。」とあるのに対して、「江戸時代に補修されたのは頭部のみ。いくたびもとあるが、戦乱による破壊は二度だけである。」と批判します。

さらにまた「源氏物語はやはり宮廷の女官であった紫式部によって書かれた。」これに対して「紫式部は後宮に仕える女性の役人の女官ではなく、中宮彰子個人の女房である。」

と批判します。

これらはすべて批判の名に値しないものですが、黙っておる訳にはいきませんので、一つ一つに反論をして新聞に載せてもらいました。実は、彼らにとっても、こんなことを問題にすることが目的ではありません。今までの教科書が一貫して採用した彼らのイデオロギーが、扶桑社本によって、美事に否定されているのが気に入らないだけのことであります。

扶桑社本が、読んで楽しい歴史書になっているのに対して、彼らは「物語」ならそれでもよいがと批判しますが、歴史とは正に「物語」なのであります。「歴史」とは史を歴ふるという意味で物語ることであり、英語でもHISTORY（歴史）とSTORY（物語）はもともと同じ意味であります。

彼らは史実史実と盛んに言いますが、これらをいくら並べても、それは教科書に綴じられている年表にすぎません。この事件は何故起ったのか、その結果どういう影響が生じたか、またこのことを当時の人たちはどのように考え、感じとっていたかなどを、正に「物語」として紡いでいく作業が歴史を学ぶということでありましょう。

現在飯田地方の中学生全員が（一人の例外もなく）使用している東京書籍版では、あの

秀吉の朝鮮出兵の際に日本の水軍を打ち破った李舜臣の銅像を写真入りで載せ、イラストでは、「李舜臣が英雄といわれるのは何故だろうか。」とキャプションまで付けています。

これに対してこの教科書には、日露戦争のとき、日本海海戦で驚異的な勝利をおさめて日本がロシアの属国となることを防いだあの東郷平八郎の名前すら載せていないのです。

何故このような取扱いがなされるのでしょうか。それは扶桑社以外のすべての教科書が今や一般社会では殆ど通用しなくなった社会主義の階級闘争史観に深く縛られているからであります。

ソ連から始まった社会主義幻想史観とアメリカに屈服した東京裁判史観―この二つを何とか克服して、まともな本来の歴史らしい歴史を取り戻して、日本が真の主権国家に立ち返ることを願って設立されたのが「新しい歴史教科書をつくる会」であります。

最後にこのつくる会が主張している立場の一部を紹介して終わりにいたします。

「私たちの教科書は自虐の克服だとよく言われますが、むしろ「非常識」の克服であったと考えられます。私たちは自分の歴史観を主張することよりも、日本の歴史教科書が全体として改善されることに目的を置いています。

私たちの影響で他の教科書が良くなるのなら、それも目的達成の一つであります。私た

ちは一つのイデオロギーに囚われるものではなく、イデオロギーに囚われた従来の一切の単調な歴史に反対するものであります。」

（長野県　七久里神社　宮司）
（新しい歴史教科書をつくる会会員）

子供の教育

菊池宣行

最近の若い世代では、全般的に倫理や道徳、公共心の欠如が目立ちます。空き缶を所構わず捨てたり、人目をはばからず地べたにすわりこんだり、車内で化粧をしたり、といった具合です。

また、一方では、人の命の重みが分からない子供等のニュースを耳にします。他人の命にしろ、自分自身の命にしろ、その場の感情で簡単に絶ってしまいます。

学校での荒れる子供等による学級崩壊も問題になっています。

日本の子供等がこの様になってしまった原因は、もちろん一つではなく、戦後の教育であり、経済が発展し物が豊かになり過ぎたため、子供等が我慢する力をつける機会を失ってしまったこと、また核家族化の進行に伴い祖父母から孫へ宗教的な習慣や情操の伝達が行われなくなってしまったこと等があると思われます。考えてみれば、この様な中で子供を教育する立場にある、親、学校の教師の苦労も当然のことかもしれません。しかし、次

の世代を担う子供等を教育し、正しい方向へ導いてやるのは、我々大人等の責任です。

こういった教育の問題を考えるにあたり、子供の「知育」「徳育」「体育」のうち、特に「徳育」に関しては、やはり親の責任において行われるべきです。最近では物事が他力本願になりがちで、子供の教育をその専門家である教師におしつけようとするかもしれませんが、何十人の生徒をかかえている教師にそこまで求めるのは難かしく、それぞれ違う個性を持っている子供の専門家は、やはり、その親でしかないのです。

子供がこの世に生まれて最初に出会う自分以外の人間は、母親、父親、兄弟であり、この社会を構成する最小単位の組織である「家族」の中で、この先の長い人生を生きていく為の知恵、社会のルールを学びます。親は子供が社会に出て行く前に、世の中にはやって良いこと、悪いことがあるということを、しっかりと教えなければなりません。

芥川龍之介の「蜘蛛の糸」という短編小説がありますが、私が小学生の頃読んだ時の印象が強く残っています。天国と地獄のイメージが分かりやすく描かれていると思います。

また、私がもっと幼い頃には、私の父が兄と私とを連れて、年に一回位と思いますが、実家の近くの禅宗のお寺に行き、天国と地獄をえがいた絵を見せてくれました。私が幼かったせいもあるでしょうが、とても恐く感じたのを覚えています。これらは仏教の教えです

が、「自分の人生の責任は自分自身にある」ということを教えるには最も良い教材であると思います。

しかし、さらに深刻な問題は、それは、まともな教育を受けなかった子供等が大人になり、人の親になってから、その子をどう育てたらよいのか分からない。という事態になっていることです。

先日の新聞の記事に、昨年度、長崎県内二ヶ所の児童相談所に寄せられた児童虐待の相談は、三百四件で、一九九〇年度の約十倍に上っている。とありました。また虐待の内容は「保護の怠慢・拒否」「身体的虐待」「心理的虐待」「性的虐待」等で、その主な虐待者は実母が最も多く全体の六四%だそうです。唯一絶対の愛だと思われていた母親の愛を受けられない子供等は、今後どのように成長していくのでしょうか。

この様な中にあっても明るい話題はあります。昨年の産経新聞に、「脳科学が教育を変えるか」という記事がありました。

脳の「前頭前野」と呼ばれる領域があり、そこで、行動の抑制や情動の制御といった精神活動をつかさどっていることが分かっています。つまり、「キレない」ようにするには前頭前野の働きを高めることが重要になる。ということです。東北大教授の川島隆太氏の

研究では、「足し算を一生懸命早く行う」と前頭前野を含む脳の広い範囲が活性化する。「漢字を覚える」場合、読んで覚えるよりも書きながら記憶した方が前頭前野が活性化し「読む(黙読で文章を読んで理解しようと努める)」動作の場合はさらに多くの領域が活性化し、「音読」に切り替えると、活性化領域は最大になる。これらの結果から「読み書き計算によって前頭前野の発達が促され、結果として行動の抑制や情動の制御ができるようになる。」これは、まだ仮説の段階ですが、非常に興味深く、期待できます。

始めに述べました様に、現代の日本は、子供を教育する環境としては、非常に厳しい状況にはありますが、子を産み、親となった若いご夫婦は特に、親としての自覚を持ち、その子の本当の意味での教育を真剣に考え、取りくんで頂きたいと思います。

（長崎県　諏訪神社　権禰宜）

神仕への心

近藤哲朗

私は、昭和五十二年にご縁をもちまして、本日の研修会会場の熱田の森に設けられております神職養成所を卒業させて頂きました。在学中に神職の心構え、神職としての姿等、身を以て学ぶ事ができました。そこで、神職とは何かという事を考えてみました。

古代人はすべての生物、又草木にも霊魂や精霊が作用し、大自然と関わり人の力ではどうする事も出来ない強力な力を崇め、その力自然よりの恩恵を神とする観念、自然崇拝が生じ、そして神を祀る神聖なまつりの場が神社の起源とされています。神道は、生活の中で祭祀中心に発達し発展したもので、キリスト教、仏教等のような教典によって発達したものではありません。神道は習俗の根底にあるものですから神職は伝統的な信仰を尊重し、又、祝詞の中に「恐美恐美母白須」の「母」は自省の助詞で、神の前で謹み謹み申し上げますが、まだ謹みが足りませんという言葉です。神社祭式も心と姿態とは元々表裏一体のものであるにも拘らず両者を切り離して考え「祭典奉仕は、至誠を神に捧げるのであるから、

奉仕の精神さえ充実していれば良い」という人もみられますが、これは大きな誤りであって姿態は心の顕現であることを知るべきであると指導要綱に記されています。

総代又氏子崇敬者が神社に参拝し、祭典に参列し、神職を見ています。神前奉仕は、この人等の仲執持ちとなって祈願をし、皇室の御隆昌、国の安泰を祈るものですから神社祭式は特に基本を学び、その一つ一つが繋がり、祭典になりますので基本が大切だと思います。そして社殿、境内を常に清々しく清掃する事。これは「無言の感化であり後ろ姿の教化」でもあり、御神徳の宣揚、神社よりの御加護を頂き信仰の中で重要ではないかと思います。鎌倉時代に武家法、諸氏の家制に踏襲されて作られた「御成敗式目」第一条に神社を修理し、祭祀を行うとあり、又、神社とは「神は人の敬によって威を増し、人は神の徳によって運を添ふ」これは崇敬者の皆様の御崇敬により、神の御神徳が増し、人は神様から徳を頂き、日々の生活の向上を祈願するものとされております。祭祀は神に対して正しい心で誠を捧げ、御稜威を畏み奉り、その御教へに神習ひ、神の御心を我が心とすることであります。そのために神職は祭祀にあたって心身の清浄を保つと共に、邪念を持たないこととされております。そして正しい伝統、古儀を尊び、古来よりの伝統の精神を後世に伝へなければならないと思います。

又、神社が守り続けなければならないものの一つに神の鎮まります鎮守の杜があります。神社新報に神社と寺院の森を比較調査した記事が掲載されていました。東京農業大学大学院農業研究科造園専攻の斎藤先生が社叢学会で研究発表されました。この研究によりますと東京都世田谷区内の神社五十四社、区内百十七寺院と比較する事で神社の社叢の特徴を明らかにしようとされました。この結果緑比率を神社と寺院で比較すると神社は平均約七三%、寺院は約三七%で神社の方が二倍近いことがわかり、神社の社叢は古来から神の鎮まります聖域とされ、地域の人々により保存・管理されてきた半自然的な緑地に対して、寺院の多くは庭園等人為的に造られたものが少なくないと分析されました。更に明治時代からの変遷についても調べられ、明治十八年にあった百五十五社の内四十九社が現存し、その数が三分の一に減少したのにも拘わらず、境内地が一、七倍になっている事に注目され、その要因の一つに氏子による境内地寄進があることを挙げられ、神社は氏子地域とのつながりが強い事がわかるとされました。

今日では青少年の犯罪が大きな社会問題となる中、心の環境づくりが重要視されています。子供は三歳位で人格が形成されるとする先生も見えます。子供の頃から自然に親しみ、森を通して自然を大切にする心、自然の恵みに感謝する心、そして神社での祭りを通して

人間関係が希薄になっている社会を心の触合いを取り戻すためにも神社の杜は今後一層重要性を増してくるのではないかと思われます。

万物は神々が生み出されたものであるという感謝と自然は神そのものであるという理解のもと神社の杜を末永く守り続けなければならないと思います。

私は常々、皆様から見れば当然の事だと思われますが、境内を清々しく掃き清め、参拝者に対して懇切丁寧に接し、再度参拝してもらえる環境づくりを考えております。そして、神職になった頃の初心の気持ちを大切に持ち続け、相互に尊重し合い、真心、誠の心、睦み合う心を以て心身共に健康で神祭りに御奉仕し、この日本の伝統文化を守り続け、敬神崇祖の心を大切にし、後世に伝へなければならないと思います。

（静岡県　小國神社　禰宜）

身代り

――英霊に感謝の誠を――

芦原久雄

皆さんは、『身代り』と言うと何を想像なさいますか?大部分の方々は『身代り地蔵』とか『身代り不動』などを思い出されたことでしょう。神社でも『身代り守り』などが頒布されていますので〝自分の代りになってくれる神や仏、ものなど〟とお考えになられていると思います。

本日私は、現在一般的には『太平洋戦争』と言われております先の『大東亜戦争』において自己の犠牲を省みず、我が国のためまた私たち日本国民のため『身代り』となられた護國の御英霊のことについてお話しさせて頂きますと共に私の考えの一部を述べさせて頂きます。

『生命は地球より重し』とはよく耳にする言葉ですが、明治維新以来多くの方々がこの一つしかない自らの命を投げ捨てて我が国の国難に殉じられました。なかでも大東亜戦争

において戦歿された方だけでも約二百十三万柱を数え、この方々が護國の大神様（御英霊）となられて靖國神社や各県の護國神社にお祀りされている訳でございます。

さて、御英霊のなかでも本日私がお話致しますのは、皆さん方名前くらいはご存知だと思いますが戦争当時我国が世界に誇った『戦艦大和』が最後に行った沖縄への特攻出撃の時のことでございます。

この出撃の際、艦内の若手の少尉や中尉たちの間で、「特攻死」の意味をめぐって激しい論争が戦わされたそうでございます。

学徒出陣によって士官となられた方達は「祖国のために散る、それはよく分かっている。しかし、いかに特攻精神で突っ込めと言われても飛行機の護衛も無く、燃料も片道ではただの犬死にではないか」とせめて納得できる死を願ったそうでございます。

それに対し、海軍兵学校出身の士官の方達は、「国のため、君のために死ぬ。それ以上になにが必要というのか。もって冥すべしではないか」と主張したそうです。ついには学徒出身の「腐った性根を叩き直す」と鉄拳の殴り合いが始まった時、若手士官達を統率するある大尉が、「敗れて目覚める。それ以外にどうして日本は救われるか？いま目覚めずしていつ救われるか？俺達はその先導になるのだ。日本の新生にさきがけて散る。まさに

本望じゃないか」と話されると、士官達の論争は止み、一致して戦場に臨まれたそうでございます。

つまり、特攻出撃された方達は自らの死を超越して我国の新生のため、また我々国民の行末のため、誇りのため『身代り』となる事に何等疑いを持たずに散華されたのでございます。これ以上の思いやりのこころがあるでしょうか？

時代こそ違え特攻出撃されたお一人お一人が現代の若者達と同様に、将来に希望を持ち、恋愛をし、友人と楽しく過ごすと云った様な私的な生活を持たれていたと思います。しかし、国の存亡がかかった重大事に際し、その総てをなげうって自らの生命を国に捧げられたのです。

万葉後期を代表する八世紀の歌人であります大伴家持の和歌に昭和十二年に信時潔（のぶとききよし）によって作曲された『海ゆかば』・海ゆかば　水漬く屍　山ゆかば草むす屍　大君の辺にこそ死なめ　かへりみはせじ・という歌詞ですが、この歌を軍国主義の典型のような見方をする方がおりますが、歌詞には、敵をたたきのめせとか外国を侵略しろなどと言った処は一ヶ所も無いのです。ただ只管（ひたすら）に公のための自己犠牲への決意を歌っているのです。戦艦大和と共に沈んだ戦歿者は『水漬く屍』であり、「日本の新生にさきがけて散る」とはま

さにこの歌の精神そのものであり、私達は今一度戦没者の御心に思いをはせる必要が有るのではないでしょうか？

当社の崇敬奉賛会の事業であります「戦争を語り継ぐ会」の御代表である戦友の方が「オレの戦友の中で自分が生還できたのは運が良かったからだと謂う奴が居るがそれは違うと言ってやっている。ただ運が良かったのではなく自分の隣や前で『身代り』になって死んでくれた戦友がいたから生還できたのだ。だから、生きている自分達は死ぬまで戦歿者に慰霊の誠を尽くさなければならないし、その精神を次の世代につたえて行くことこそ生き残ったおれたちの勤めなのだ。」とよくお話されます。私もこの方に同感でございます。

私自身は、戦後の生まれでございますし、本当の意味での御英霊の御事績やご苦労については存じ上げません。ただ私の家では、父が南方戦線に従軍しておりましたし、伯父は海軍機関兵曹長としてソロモン海上で戦歿しております。この関係で、祖父も神職の傍ら地元の遺族会長を勤めておりましたので、戦争のことや御英霊の事などある程度理解しているつもりでございますので若輩の身も省みず申し上げますが、私達が今日の様な平和な生活を享受出来るのも『身代り』となられた御英霊のおかげであります。ですから、御英霊に感謝する気持ちは勿論のこと、惰性で毎日を生きるのではなく、色々な物に感謝する

ことを忘れずに、一日々々を精一杯生きようではありませんか。

（静岡県　静岡縣護國神社　禰宜）

社会と自己と

矢田部盛男

古来日本では人格の成長や精神の確立が地域社会（ムラ）における「神祭り」を中心とした生活の中で行われてきました。

全国のあらゆる面での画一化に伴い、土地の神様に対する信仰の希薄化、地域によっては「神祭り」そのものが消滅しつつある傾向の中で、改めて古の姿を見つめ直し、日本人の、「私と公」の関係を考えたいと思います。

情報伝達技術の発達によるテレビや携帯電話、インターネットの普及、また政府の地方分権推進計画による、市町村の合併は、全国の地理的な差を驚異的に縮めました。今、日本では、地方にいながら情報を瞬時に得、最先端のモードを体験することができます。特にインターネット上を自由に行き来し、他の土地の知らない他人とリアルタイムでやり取りをする状況は、時間や空間を伴う現実との境をあいまいにします。誰もが覆いのない情報を見境なく吸収することができる。これは、生活上の利便性を飛躍的に発展させ、私と

いう個人の意識を促進する反面、日本人としての精神面においては非常に危険な状態を意味するとの指摘が久しくされております。果たして、日本人はこの長い歴史の中で、どのようにしてモラルを築き、それを継承し、国を守ってきたのでしょうか。

一般に日本人のアイデンティティを示す時（政治的な意味合いを除いた場合）、それは古い伝統や伝承に根ざした自国の文化や、信仰、または魂である、と言うことができると思います。古くはそれらに段階的なレベルがあり、家、地域、ムラ、国へと移動するに従い洗練されていきました。つまり、民間レベルでの文化が整えられ、洗練されて、中央に集まり、国の姿として示されるといった具合です。中央で「洗練される」とは言え、その基盤である各地方における伝統文化は日本人の素朴な信仰をそのままに表す源であったに違いありません。

こうした流れを踏まえて、自己から社会へと繋がる精神の行方を考える必要があると思います。

さて、古くは個人が成長し、より広い場所で認められるには、信仰的な空間が不可欠でした。つまり「祭り」です。家庭や、神社等で斎行される祭りでの人生通過儀礼を経ることで除々に集団の一員として認められたのです。

人格の形成についても、幼少から各家庭において日常行われました。更に成長すると、地域の集団と交流を深めるようになります。そこでは個人としての感情の制限や他人との協調性が求められ、家、またはムラという集合体としての感情、例えば怒り、憎しみ、喜びといった、公の共通意識や道徳観念が養われたのです。

我々が御神前に立つ時、そこには心に曇る一寸の邪も許さない厳しさを感じます。それはムラに鎮座する神社が、その地域の共通した認識を反映させた道徳を司る秩序の象徴であったからであると言えます。

こうして、自己から公なる社会へ、という過程の中に「神祭り」が深く関わり、次代次代へと継承され、更に地域毎の魂が集まって、国が形成されてきたのです。現代社会で家庭教育や地域交流の重要性が再認識されている所以もここにあると思われます。

現在では、地方の祭りや伝統行事が途絶えるなど、信仰に基づいた人格育成の機会が少なくなりました。それを通過しない若者は簡単に手に入る膨大な量の情報に基づいて自分を探求し、模索します。こうした環境で、集団の道徳感を維持することは大変困難であると言えます。

また神祭りの中断は、同時に、その土地に対する意識の希薄化をも促します。

沖縄の久高島には有名なイザイホーという十二年に一度行われる祭祀があります。かつて自給自足の生活が成り立っていた周囲八キロ足らずの同島では、男性の役割がさほど重要ではなく、専ら神々の神霊を受け継ぐ存在とされた神女（ノロ）という女性集団によって島が護られるという、経済社会以前の原始母系社会の姿が残されていました。イザイホーはナンチューと呼ばれる主婦が魂替えをしてノロの資格を得る、という祭祀です。そのナンチューについてはその島で生まれ育ち、在住しているということ、またその年令までが厳しく制限され、決められていました。

平成二年の暮れ、私は当時大学で教えを受けていた教授に連れられて久高島に入りました。前回から数えて丁度十二年目の午年にあたり、滞在期間中にイザイホーが行われるはずでした。ところが、過疎化が進み、既にノロとなる資格を有するナンチューがおらず、後継者不在の状態が続いていた島では、ついにイザイホーを行うことを断念せざるをえず、その様子がテレビでも放映され、話題となりました。沖縄開闢神話の聖地「神の島」として知られた久高島の、最も重要とされた祭祀は更に十二年後の昨年にも行われることはなく、昭和五十三年を最後に中断したままの状態が続いています。当時、逆に行わないと判断する事で厳しい戒律上受け継がれてきた魂を守ろうとしたノロの方々の勇気は注目に値

します。その複雑な心中を思うといたたまれない気持になるばかりです。

あえて自己を埋没させ、祭りと共にその土地の魂を繋いできた先人の心一つ一つが日本という国を作ってきました。その魂や道徳観を更に次代へと繋ぐ使命を神職は担っております。現代の日本各地に続く素朴な信仰の灯火を絶やさないようにする努力こそが、未来の日本を救う手立てとなるに違いないと信じてやみません。

（静岡県　三嶋大社　権禰宜）

都心の森の恩恵について

高羽伸浩

こんにちは、都心の森の恩恵について、お話しをさせていただきたいと思います。私は、名古屋に生まれ、名古屋で育ちました。幼少の頃は、神社とかかわらず、至る所で樹木は、鬱蒼としておりました。しかし、今日においては、皆様もご存じの通り、宅地整理や道路整備が進んでまいりまして、樹木も少なくなってまいりました。その中で、神社における樹木は、大変重要なものとなっていると思います。樹木の有り難さは、春に暖かくなってまいりますと、梅の花、桜の花が咲き、その後若葉による新緑の木々のすがすがしさ、秋には紅葉といった四季折々に、人々を楽しませてくれます。そんな樹木を神社においては大切に生育させていかなければならないと思います。そんな中で、私の奉職致しております、愛知縣護國神社では、官庁街の中に鎮座し、神社の森を維持してまいらなければなりません。先年来、記念事業と致しまして、境内整備工事を進めております。本年は境内桜樹の枯れ枝剪定と境内の東の杜樹木の剪定工事を行ないました。桜の枯れ枝剪定は、桜の

花をよりよく咲かせ樹木を保つ上で必要な作業であります。又、境内東の杜樹木の剪定は、大通りより、歩行者、車の運転者より、御社殿を直接見ていただける目的で行ないました。しかし樹木を切ることは神社においては、なかなかしてはならないことであり、必要な工事であったか、考えさせられました。神社を良く知っている関係者より、御社殿を見ていただける為の工事は、良くないとおっしゃられた言葉に、複雑な思いを致しました。しかし乍、剪定は行ない、見通しも良くなった境内は、依然として、大きな楠の木や椎の木が立派に立ち、低木もある状態は、神社の表玄関であるこの境内に相応しいと思います。当神社の大切な樹木を保つこと、神社の森を保つことには、樹木の剪定は、必要なことと考えるようになりました。そこで、樹木を管理するのにあたり、参拝者の皆様より、お賽銭とは別に、神社境内の樹木、ひいては神社の森の維持管理に対する、樹木管理費料として、一口金千円のご奉納をいただけるよう、浄財箱を設けたいと思います。看板にその趣意等目的を掲示し、ご奉納を願うことができれば良いと思います。それにはどれだけ理解が得られるか解りませんが、一口千円のご奉納いただいた方には、礼状葉書をお出ししたいと思います。一枚の礼状葉書しか出せませんが、樹木の育生等の難しさや大変さへの理解に対し感謝の礼状葉書を出したいと思います。

愛知縣護國神社におきましては、春になると桜の花がみごとに咲き、人々を楽しませてくれます。そして、ここ数年前より、紫陽花を植栽致しまして、この梅雨時には、美しく咲き、神社への参拝者も増えてまいりました。この桜や紫陽花の花の美しさだけではなく、樹木の有り難さを神社として、維持管理してまいりたいと思います。

神社には、必ず大木があります。二〇メートル近くの楠、欅、モミ、銀杏や杉、檜、松があります。この大木を一本と云わず、何本も各神社が保っている現状を把握して、特に都会の神社では、酸素の供給や公害への対策として、多大の貢献があると思います。神社の樹木による恩恵は、人に与える宗教的なものの中に、神社の森は無くてはならないものであり、有り難いものであります。酸素の供給や公害への対策への貢献は、国や地方自治体より、公共料金として逆にいただいても良いのではないかと思います。落葉樹の落ち葉の清掃を始め、毛虫への消毒や枯れ枝の処理等等さまざまな労力が必要となるのも、労力がかかればかかるほど、神社の森の尊さ、ひいては、神社の樹木による恩恵が生まれてきます。樹木は生きものであり、鳥居、燈籠、狛犬のような神社宗教施設に必要なものとは異なり、木が生き物であるように人にさまざまな生を与えていただいていると思います。その樹木に、鳥や虫が集い、樹木は花や新緑を人に感動させ、又心を癒すものであります。

これが神社の樹木の恩恵であり、恩恵をいただく為にも、樹木を理解し、その管理の大切さをこれからも考え研究し、より良い樹木の恩恵をいただきたいと思います。なかなかうまく話せませんでしたが、これを以ちまして、終わらせていただきます。ありがとうございました。

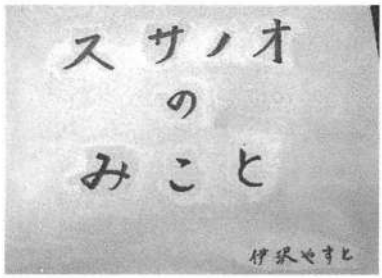
（愛知県　愛知縣護國神社　権禰宜）

伊勢チャンとスサノオのみこと

小泉美智子

私：伊勢チャン　今日は真っ白な園服を着た熱田園の良い子の皆さんにスサノオのみことの紙芝居をしましょうね。　**伊勢チャン**：ウレシイナー

私：伊勢チャンも静かに聞いて下さいね。　**伊勢チャン**：ハイ



それでは
始まり　始まり



スサノオは立派な神様になる為に旅に出ました。出雲の国のひの川に来ると箸が流れてきました。「あっ、川の上に人が住んでいるぞ！」



やっぱり家があった。
家の中から悲しそうな泣き声が聞こえてきました。



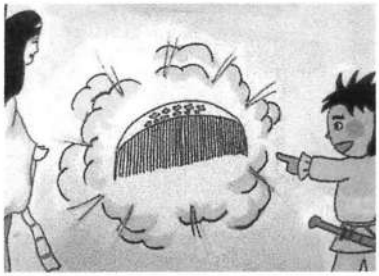
ヤマタノオロチに食べられてしまうクシナダ姫を囲んだ父母3人の泣き声でした。「よし、私がそのオロチを退治しよう。」とスサノオがいいました。



オロチの体にはコケや杉やひのきが生い茂りしっぽも頭も8つ目はらんらんとにらんで恐ろしい姿です。



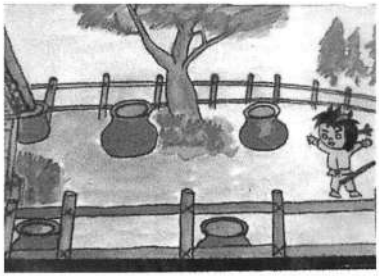
天照大神の弟スサノオがオロチを退治すると聞くと3人は大喜び。「クシナダ姫立ちなさい。」とスサノオが云いました。



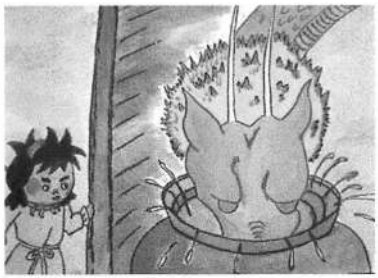
スサノオが「エイ！」と気合をかけるとクシナダ姫はたちまちクシに変わりました。



スサノオはクシを髪にさし父母に8つのツボに強い酒を入れ8つの入り口に置くよう言いました。



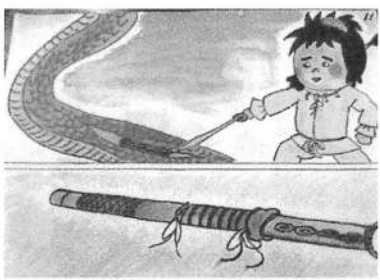
いよいよオロチがやって来て8つのツボに8つの頭を入れガブガブと酒を飲み眠ってしまいました。



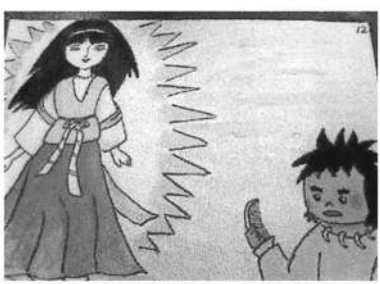
スサノオはかげでその様子を見て力いっぱいオロチの首をエイッ！と切りたおしました。グワォーとオロチは叫びました。



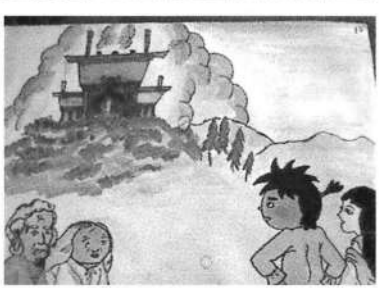
それでもオロチは別の頭をもち上げ襲いかかって来ます。スサノオは次々とそれを切りたおしました。



しっぽを切ったとき「カチン！」と音がしてそれはみごとな剣でした。クサナギノツルギと名づけられ熱田神宮のご神体としてお奉りされています。



出雲の国は平和になりました。スサノオが「エイ！」と気合をかけクシナダ姫は美しい姿にもどり二人は結婚しました。



りっぱな御殿で父母共4人でいつまでも仲良く暮らしました。

私：伊勢チャン　スサノオのみことはりっぱな神様になられよかったですね。

伊勢チャン：ウン　ヨカッタナ。ツギノシンワノ　カミシバイ　タノシミダナ

「公（おおやけ）」ということ

山下裕嗣

「公」を辞書で検索すると、国家・政府・役所や公共・社会・世間とあり、「社会の中でより多くの人に関係の有る事」「偏らない」「広く当てはまる」ともあります。対する言葉は「私」や「個」です。現代社会の個人尊重の風潮の中で、「公」と云う事が忘れられ、疎かになっているのではないでしょうか。

我が国の憲法の中にも「基本的人権の尊重」が三つの柱の中に謳われています。然しながら、現代の個人の自由や人々の平等には、本来の「公」の心とは違った、機械的な個人の尊重や画一的な人々の平等がまかり通っているのではないでしょうか。

人は老若男女それぞれが様々な個性を持って生活しています。それは千差万別であり、善し悪しで判断する事は出来ません。しかし、それぞれが自分の個性でのみ生活し、行動したならば社会は成り立たないでしょう。そこに「公」の心を伴って初めて社会が丸く収まるわけです。「公」の心の無い自由は「公正」な自由とは言えません。「公」の心の無い

平等は「公平」な平等とは言えません。

多くの団体や政府が自由と平等とを主張して、男女同権・雇用機会均等を大きくアピールして以来、確かに男性と女性はマニュアル的な観点では等しくなったように思います。然しながら、公平ではないと私は思います。公平と平等の違いは文字に表されるとおり、「公」を持っているか否かです。男女同権・雇用機会均等は機械的には等しくなりました。しかし心を持った「ひと」として男女を考えた時、そこには本質的な違いが見えるのではないでしょうか。男性と女性、生きとし生けるものとしてそれぞれの違った役割を持っているはずです。機械的に等しく考えるのではなく、「公」の心を持ってそれぞれの分を守り、自らの分をわきまえて生活して行く事こそが必要なのではないでしょうか。若干本題とはずれますが、近年ジェンダーフリーという言葉を耳にされる事が多くなったのではないかと思われます。簡単に申し上げますと、「男らしさ」「女らしさ」の性差を無くし、それぞれの個性で自分らしく生きてゆく事を理想とした考えですが、果たしてそうなのでしょうか。個性の尊重には頷けますが、性の差を認めないという事は如何なものかと・・。何れにせよ「公」の心がしっかりと認識されれば、解決できる問題ではないかと思います。ついでに申し上げますとバリアフリーが定着しつつある今の社会です。高齢者や身体障害者

が不自由な思いをしないように、スロープを設けたり障害をなくす設備が整いつつあります。大変素晴らしい事と思いますが、敢えて「公の心」という観点で申し上げますと諸手を上げてとまではいかないようです。確かにスロープの設置や段差の解消で車椅子生活を余儀なくされている身体障害者の生活は楽になりました。然しながらこの事で、健常者が身障者に手を差し伸べる心が薄らいだように思います。一人で多くの事が出来るようになり、介護の心が求められなくなっているように思います。勿論、身障者が自立できる社会が求められている事は頷けます。しかし形のみが先行し、心が忘れ去られているのではないでしょうか。

さて私ども神主は、少なくともお社でご奉仕している時は「公」の中で生活していると言えるのではないでしょうか。毎朝のおつとめにご神前にお供え物をし、国の隆昌とご皇室の安泰、氏子崇敬者の守護を只管に拝み奉る。日中はお出でになる氏子崇敬者の祈願の中執り持ちとしてご神前に祝詞を奏上し、大神様の御心を頂いた講話を参拝者にお伝えする。夕べにはお供え物を下げて一日の感謝の拝礼をする。一連の日常は「公」にある神職の生活であります。「公」が日常にある私どもは、今の個人主義社会に対して、何事の無理を課する事無く「公」を伝える事の出来る輩であると言えましょう。

「公」は自分以外のすべてです。一番身近な公は家・家庭です。老いた者、若い衆、男性、女性。家族は小さな「公」で成り立っています。家が集まると地域という「公」が出来上がります。またそれぞれの個人が勤める会社や、所属する団体もあります。家から始まった「公」は一つの民族としての「国」という「公」に繋がります。ですから単に国ではなく「国家」として家の字が使われる訳です。私たち一人一人は多くの「公」の中にそれを支える小さな力として「個」がある事を忘れてはいけません。また反対に「公」が有るからこそ「私」の居場所が有る事も忘れてはなりません。私たちの心は丸い物でありましょうし、丸い物で無ければなりません。それは私たちの御魂が丸く澄んでいなければならないと言う事です。「公」の中で常に「公」を意識しながらコロコロと転がる透明な心で無ければなりません。心に歪みが出来た時、心に不安が生じた時、人は澄んだ素直な心を求めて神社に詣でます。大神様の心は「公」の心であり、誰彼を問わず「公平」にそして「公正」に戴ける大御稜威であります。こうして神社に詣でる時に「公」という事を改めて考えて見ようでは有りませんか。

（石川県　白山神社　禰宜）

昭和天皇を仰ぐ

秋野義正

私は大正十四年の生れですから翌年は昭和元年です。私の人生は将に昭和と共に歩んだと云えます。私は戦争末期昭和二十年一月五日に十九才で岐阜の中部四部隊に入り、南方の飛行場爆破を使命にて生きて還らぬ決意でしたが戦局は悪く、輸送船も無く内地勤務となり、アメリカの上陸を想定し、対戦車肉攻の訓練を受けましたが八月ご詔勅を拝し、十月復員し、思ひもよらぬ神職として再び奉仕して既に六十四年となります。これ一重に昭和天皇のお陰と心から感謝しております。

昭和天皇が学習院初等科にご在学のご幼年時代、院長は乃木大将で、大変ご信頼になられておりました。或時乃木院長が「殿下靴下が破れたらどうなさいますか」とお尋ねになり「すぐ新しいものとお取替えになってはいけません。つくろえば立派にご使用になれます。決して恥ずかしいことではありません。」とお教えになりました。お服が相撲で破れてもすぐつくろい、院長さんが仰言ったと皆に誇らしげに話したということであります。

昭和二十年五月二十六日東京大空襲により皇居は焼失し、お文庫でお過しの時係の方が「陛下スリッパが古びましたので新しい物と取替しましょう」と申上げますと陛下は「まだ使えるから良い」と仰せられ、長くご使用になられたとの事であります。それは幼年の頃に乃木院長に教えられたことを忘れませず、「物を大切に」されるお心と拝察いたします。

天皇様は植物のご研究も深く「那須の植物」といふご本に皇后様の美くしい草花の水彩画を巻頭に飾られてご刊行になりました。或ご調査でお出坐しの時「雑草」という言葉を聞かれて「植物に雑草は無い」と仰せられたと云うことは有名なお話です。草にも夫々名が有ります。日本は太古葦原でしたが人間の努力でこれを稲田に変え、草にも大自然のいのちが宿り、天皇様も自然を殊に大事になさいます。草について昭和五十六年十月七日浅間神社では一行十五名で皇居の草取りをご奉仕しました。四日間の中で天皇様がお居出になればお会出来るというのを全国奉仕団は何より楽しみにしており、天皇様も直接国民にお会いになられるのを殊の外お喜びになられたと伺いました。私等の時は皇后様がお腰が悪く吹上御所の御前大通りにて両陛下のご会釈を賜りました。その時両陛下より有難いお言葉を賜りました後、両陛下の御前で、全国奉仕団の方々と共に「天皇陛下萬歳」を三唱し、「君が代」を奉唱してお見送りした感激は何時までも忘れません。

天皇陛下には昭和五年浅間神社に御親拝になられました。昭和五十五年「天皇陛下御親拝五十年祭」を斎行し、ご講演を御学友の永積掌典長様に伺いましたがその中で、かつて九州で陸軍大演習を統監になられ、お帰りは軍艦にてご帰京になられましたが、侍従長がふと気付くと天皇様が見えませんので艦橋に参りますと、お一人で陸地に向って挙手の礼をとられるお姿を発見しました。見ると夕闇迫る海岸にお見送りの国民の提灯の灯が延々と続いております。早速艦長に命じて探照灯にてご答礼の合図をさせましたが天皇様にはこの様に国民の真心をご誠実にお応えになられているのであります。昭和二十年九月二十七日天皇陛下にはモーニング姿にてマッカーサー元帥をアメリカ大使館にご訪問になられました。元帥は戦勝国の司令官として玄関にお迎えも致さず、自分の机の席で足を組んでパイプをくわえたまゝ、動こうとしませんでした。陛下は机の前まで進まれて挨拶のあと二つのことを述べられました。「今回の戦争の責任はすべて自分にあるのであるから自分に対してどのような処置を取られてもかまわない」ついで「戦争の結果国民は飢餓に瀕している。このまゝでは餓死者が出るおそれがある。米国にぜひ食糧援助をお願いしたい。ここに皇室財産をまとめて持参したのでその費用の一部にあてゝいただければ仕合せである」とおゝせられて有価証券の入った大きな風呂敷包みを元帥の机の上に差出されました。

それまで姿勢を変えなかった元帥がやおら立上って陛下の前に進み抱きつかん許りにしてお手を握り心の中で「我れ神をみたり」と叫んだと回想録に記しております。死を伴う責任を申出で、国民を飢より救いたいという何という日本人は有難い天皇様を戴いていると思うのであります。お帰りには元帥自ら鄭重にお送りしたのであります。このあと天皇様には昭和二十一年二月より昭和二十九年九月まで実に八年六ヶ月にわたり国民を激励され、国民も各地で熱烈にご奉迎したのであります。是により生産は驚異的に上り日本の復興は「世界の奇蹟」と云われたのであります。また荒れた国土に緑をとの思召により「全国植樹祭」を行い、これにより「緑の日」が定められましたが、私は「昭和の日」として戴きたく、戦後日本を救い、復興の源となられた天皇を「昭和神宮」として創建し「平和の神」として末永くご聖徳を称へお慕い申上げたいと存じます。

（静岡県　神明社　宮司）

佐古幸嬰先生を偲びて想う

古川雅恵

故佐古幸嬰先生の五年祭の御案内を頂いた。期日は平成十五年五月五日十一時。長男勝久と、佐賀駅朝一番五時四十四分で嵐山松尾大社に日帰りで参拝致しました。

佐古幸嬰先生に御会ひ出来る様なよろこびでいっぱいでした。然し御霊前に飾られた、御写真を拝した時、急にこみ上げてくる涙をどうする事も出来ませんでした。御霊前の先生に、日頃の御無沙汰を心よりおわび申し上げ玉串奉奠をさせて頂きました。御参列の皆様の中に石井壽夫先生の御親戚の方の御顔もみえ、神道講演同志の皆様の御顔ぶれも多く、佐古幸嬰先生もきっと御よろこびだと嬉しくなりました。御さしつかえで参列出来ない方も多かったと思いますが、先生は、神様だから〝いいよ〳〵〟と笑っておゆるし下さったと思います。どんな苦境の時でも、ユーモアなみ心は、御見通しと思います。

佐古幸嬰先生、もっと〳〵この世に生きて下されば・・・　又涙がこみあげてきます。

先生！　二、三日　病みて散りたし　落椿

の最期の御歌をお嬢様は教えて下さいました。美しい色と姿のまゝ散ってゆく落椿。惜しまれ散りゆく落椿、大切にお鉢に生けてあげましょうね。いつまでも〳〵可愛いく、美しく落椿よ、と生けてあげましょう。何も言わない紅椿を。

佐古幸嬰先生！先生は素晴らしい、立派な教育者でした。全神職の幸せを祈って下さった。祖国愛の熱情のほとばしりは、昭和二十五年十一月、戦後の日本の世相を案じられ、日本の行末を思われて、恩師野村清臣先生と懇談下さいました。今こそ神の教えをひろめて祖国を復興しなければならない。先生のこの熱意とま心に河本眞澄先生、宮地保先生、石井壽夫先生の講師先生お揃いで御指導下さいました。私の忘れられない事は、佐古幸嬰先生に出講を命じられ、鍛えられた時代がございました。教化講師を育てようとの御熱意。私は貴重な鍛錬を下さった佐古幸嬰先生にもっとくこの世に生きていて下さいと祈っていましたが、御無理だったのですね。先生が最後に御詠み下さった御歌を、お嬢様がソッと教えて下さいました。

昭和三十四年、私は徳久豊彦先生の御誘いで、御縁が出来て、現在平成十五年、神社本庁直轄研修愛知大会、熱田神宮へ出席致しました。神職となりて、浅学非才の私は、現在まで石井壽夫先生、佐古幸嬰先生のみ教えをしっかりと心に刻んで神明奉仕を致して居り

ます。

神道界にこんな素晴らしい恩師に御縁が結ばれた事を神様に感謝しながら、又研修御参加の熱心な神職皆様の暖い御友情の中に二泊三日の研修の尊さをしみぐ感謝し、勉強出来る事、又神社本庁の親心に感謝致して居ります。

一年に一回の心の禊です。油断のできない日本、教化活動の原動力となる神道講演、第十九回神道講演全国研修大会、熱田神宮に参加出来た事に感謝し、神道人として仲良く、手をとり合って行こうと、励まし合って楽しく勉強が出来ました。神社本庁、神社庁の有難さを今更ながら感謝し、伊勢神宮、靖国神社、全国津々浦々の神社の興隆をお祈り致します。

（佐賀県　金刀比羅神社　禰宜）

神宮大麻は地球を救う

渡邉知宣

①、ガタガタの世の中

今年も世界文明の発祥地で戦争が起こりました。哀しいことです。多くの人々が死に、そして地球環境がまた破壊されました。あらゆる面でガタガタの世界、ガタガタの地球、そしてガタガタの日本です。この先、人類はどうなっていくのでしょうか。

私達のすぐ身のまわりのことを見渡しただけでも、本当にどうしようもない世の中となりました。

戦後の日本は権利や自由や平等の精神を履き違えて、義務を果たさず自分の権利ばかり主張し、自分さえ良ければの世の中となりました。

また自由主義の名のもとに、何でも自由にできるとばかりに悪い事をする人がいっぱいの世の中でもあります。

さらに平等の名のもとに、感謝や尊敬の心が薄れ、敬語も消えつつある世の中ともなり

ました。

その他、親捨ての世の中、働かない世の中、心より物・金の世の中となりました。なによりも残念で悲しい事は、次世代を背負う若い人たちがガタガタになっているという事です。

どうしてこのようになってしまったのでしょうか。その原因と対策について考えてみたいと思います。

②、ガタガタの日本の原因

半世紀前の大東亜戦争の敗戦により、それまでの大日本帝国憲法に代わり日本国憲法が制定されました。帝国憲法は明治二十二年の発布で、長年の調査検討の末、当時の我が国の伝統にふさわしいものが制定されました。

日本国憲法は検討の期間も無く、占領軍の圧力のもとに制定されました。昭和二十一年の公布です。これにはソ連が介入してくる前にと米国が急いだため、とされています。翌年の昭和二十二年には、米国の教育使節団の指示で教育基本法が制定されました。しかしこの昭和二十一年の憲法公布、昭和二十二年の基本法制定の時には、まだ「教育勅語」正確には「教育ニ関スル勅語」が存在していました。

かなしいかな、この教育勅語でさえも法律でないにもかかわらず、米国の圧力のもとに衆参両議院で教育勅語排除失効の決議がなされました。昭和二十二年のことです。このようなことで、教育勅語という宝物を戦後の私達は無くしてしまいました。悔やんでも悔やみきれない出来事でした。

憲法も、教育基本法も、この教育勅語という国民精神の規範とも言うべきものの存在が前提となっていました。憲法や基本法に不足しているものが教育勅語にはありました。それが無くなってしまったのです。一言でたとえれば、片肺飛行片肺教育となりました。

長い間には、無理が来るのは当然です。戦後のしばらくは、戦前の教育を受けた方々が頑張ってくれました。しかし、片肺飛行の戦後教育を受けた人々が親となり先生となって、最近では「教育勅語」は殆ど死語となりました。これと同時に子供達を始め人々の心の中から「父母に孝に　兄弟に友に　夫婦相和し　朋友相信じ　恭倹己を持し　博愛衆に及ぼし　学を修め　業を習い　以って知能を啓発し　徳器を成就し　進んで公益を広め　世務を開き　常に国憲を重んじ　国法に遵い　一旦緩急あれば　義勇公に奉じ」など、人類普遍の教育勅語の精神が消え去り、今ではガタガタの子供達、ガタガタの世の中となってしまいました。　このように、その原因ははっきりしています。対策はその原因を克服すれ

ばよいのですが、これらの精神を無くしてしまった人々が対策をしなければならないところに難しさがある訳です。そして、時がたてば経つほどさらに困難になって行くのも明白です。

③、昭和天皇の御聖断により救われた日本民族

この対策を考える上でもっとも参考になる事を、次にお話してみようと思います。それは、大東亜戦争前後における昭和天皇様の大御心についてです。

立憲君主の昭和天皇は、時の内閣の決定の元に、やむなく開戦をなされますが、その時の御前会議では明治三十七年の日露戦争開戦時の明治天皇の御製

「四方の海みなはらからと思ふ世に　など波風のたちさわぐらむ」を繰り返してお詠みになられたそうです。

専制君主であれば命令ができますが、憲法を遵守される立憲君主としてのお立場から、精一杯の御意志の表現であったものと拝察されます。

そして残念ながら敗戦。私の叔父も、二十三歳の若さで満州で戦死してしまいました。

その終戦の時の決定も、内閣だけではどうしようもありませんでした。本土決戦し、一億玉砕して民族の名前だけでも後世に残そうという徹底抗戦派と、これ以上は無理だとす

る降伏派が御前会議で相半ばし、どうしても決まりませんでした。

御前会議の様子は、その時出席されていた迫水久常内閣書記官長の回想によれば、「深夜に及ぶ会議で結論が見出せず、困り果てた鈴木総理大臣の求めに応じて、昭和天皇は、『自分の任務は、祖先から受け継いだこの日本を子孫に伝える事である。今日となっては、一人でも多くの日本人に生き残ってもらい、その人たちに将来再び立ち上がってもらう他に、この日本を子孫に伝える方法は無いと思う。それにこのまま戦いを続けることは、世界人類にとっても不幸な事である。自分はどうなってもかまわない。耐え難いこと、忍び難いことであるが、この戦争をやめたいと思う。』

陛下のお言葉はさらに続いて、国民がよく今日まで戦った事。軍人が忠勇であった事。戦死者、戦傷者に対する御心持ち、また遺族の事、さらに引揚者に対して、戦災にあった人々に対して、御仁悲のお言葉があり一同は号泣したのであります。陛下のお言葉が終わり、陛下のご退席の時のお姿は、支えてあげなければと思うほど憔悴なされていました。」と述べておられます。

こうして終戦となり、日本民族は全滅から救われました。

次にマッカーサー御訪問のことについてもふれてみたいと思います。マッカーサー元帥

の「回想録」によれば、昭和二十九年、ＧＨＱを御訪問なされた昭和天皇様のことについて

『命乞いに来たとばかり思って服も改めず出迎えもしなかった。天皇は、国民が戦争遂行にあたって政治・軍事の両面で行った全ての決定と行動に対する全責任を負う者として、私自身をあなたの代表する諸国の裁決に委ねるためお訪ねした、と仰せられた。死を伴うほどの責任、それも明らかに立憲君主の天皇に帰すべきでない責任を引き受けようとされる勇気に満ちた天皇の態度が、私の骨のズイまでも揺り動かした。私はその瞬間、私の前にいる天皇が個人の資格においても日本の最高の紳士であることを感じ取った。この日本の元首に対する占領軍の司令官としての私の尊敬の念は、その後ますます高まるばかりであった。』と語られています。

さらに昭和天皇は、昭和二十一年二月から二十九年八月に至るまでの九年間、総日数百五十六日をかけて、沖縄を除く全都道府県を訪れ、敗戦に打ちのめされた国民を励まし続けられました。全行程は三万三千キロにも及びます。このことは、日本の国の復興にどれほどの効果を生み出したものか、計り知れません。

迫水元書記官長は、

「戦後の復興は、自由貿易のためであるとか、アメリカの恩恵によるものだとか色々言われているが、最も大きな原因は、昭和天皇のお陰である。」と昭和四十五年の回想講演で断言されています。

東京裁判の時の裁判長であったウェッブ裁判長は、後年『天皇は神だ。あれだけの試練を受けて帝位を維持しているのは神に違いない』と述べています。

アフガニスタン紛争時のビン・ラディンやイラク戦争時のフセイン大統領との違いの何と大きい事か。

全国民の御病気平癒の祈りの中に、昭和六十四年一月七日、満八十七歳で崩御なされました。一千万にのぼるお見舞い記帳がありました。御大葬には世界中が悲しみ、国家元首五十五名を含む百六十四ヶ国の代表者が参列されました。

私は熊本から飛行機を使い日帰りで、皇居にお参りに行った事を思い出します。感謝の気持ちを込めての皇居勤労奉仕も団長として五回を数えました。来年還暦の年の春三月には、六回目のご奉仕を計画しています。

④、昭和天皇の大御心

昭和天皇は、七歳より学習院へ通われ、乃木希典院長から質素勤勉・質実剛健の大切さ

を学ばれます。

また十三歳より七年間、東郷平八郎元帥を総裁とする東宮御学問所にて、杉浦重剛を先生として「教育勅語」を中心とした倫理道徳の精神を徹底して学ばれます。

また皇室の伝統である神々を大切にされる心をも、しっかりと身につけられます。その敬神の大御心は陛下の御製に見る事が出来ます。

昭和八年三十三歳の時の御製

「天地の神にぞいのる朝なぎの　海のごとくに波たたぬ世を」

昭和十五年四十歳の開戦の年には

「西ひがしむつみかわして栄ゆかむ　世をこそいのれとしのはじめに」

昭和五十年七十五歳の年には

「わが庭の宮居に祭る神神に　世の平らぎをいのる朝朝」をお詠みです。

このほか沢山の敬神の御製が有ります。

このように昭和天皇は、敬神の心に基づく最高の倫理道徳の精神を幼い頃から身につけておられました。

このことの大切さは、御身に代えても国民を守ろうとして終戦を決断され、見事に日本

の国をお救いになられたこと、また御皇室がたとえ国敗れても無くならなかった事、さらにこのような伝統を建国以来持ち続けられた御皇室が、今日まで二千年以上も続いていることなどからも明白に言えることで、確かな歴史の教訓であります。

そして、この教訓の中にこそ現在のガタガタの日本を救う秘訣があるものと思います。

⑤、道義大国への道

世界の国々が、将来向かって進むべき方向として

軍事大国への道は、力の競争となりいずれ世界中の国々が自滅していきます。

経済大国への道は、私利私欲と環境の破壊を増長させいずれ人類が住めない世界となってしまいます。

道義大国への道のみが、人類と地球を守り繁栄させる道であると確信します。

道義大国を目指すには、まず日本の国の伝統にふさわしくない現在の憲法と教育基本法の改正を急がねばなりません。今は片肺飛行ですから、この片肺に教育勅語の精神を盛り込まなければなりません。そしてまた同時に、神道精神を昂揚させていく事が不可欠です。

人々に敬神の念が有ると無いとでは、考え方の深みが違います。

昔は、悪いことをすれば神様のバチがあたる、誰も見て無くても神様が見ておられると

教わりました。この事により見えないものを畏れる気持ち、見えないものに感謝をする、見えないものに祈るという謙虚な気持ちが育ちます。倫理道徳を学んでいる人が無神論者で、神社にもお参りしないようでは、その倫理道徳は口先だけのようにも思えます。敬神の念の基本は、やはり神棚をおまつりしてお参りする事であると思います。家庭に神棚をおまつりせずして、いくら倫理道徳の大切さを言おうとも、愛国心や平和の大切さを唱えようとも、上っすべりのような気がします。

⑥、神宮大麻は地球を救う

当然のことながら、天皇陛下や各宮家にも伊勢の神宮の神宮大麻や暦が献進されています。天皇陛下も神宮さまのおふだをおまつりなのです。「献進大麻」と申し上げます。御皇室が、神道である事はご承知の通りです。

しかし、残念ながら神宮大麻は現在、全国で八年連続減体を続けています。全ての県で減体しています。

最多であった平成六年に比べ、現在は全国で四十万体以上の減体であります。神の国日本がガタガタで、本当の危機であることがこのことからも分かります。

私達神職が、まず第一番に緊急に取り組まなければならないことは、この神宮大麻の減

体を止めることです。

人々の家庭から神棚が消え、敬神の念が薄れていけば早かれ遅かれ人々は神社からも去っていってしまうことでしょう。神職一丸となって神宮大麻の増体に全力を傾け、家庭に神棚をまつるよう働きかける事こそが神職の緊急の使命であると思います。このことが日本の国が道義国家となり、永遠に栄えていく前提になるものと思います。

敬神生活の綱領は、

「神道は天地悠久の大道であって、崇高なる精神を培い、太平を開くの基である」

と高らかに歌い上げています。

神宮大麻は日本を救い、ひいては地球を救うのです。

熊本県神社庁の本宗奉賛特別委員長、渡辺知宣はこのように考えています。

（熊本県　疋野神社　宮司）

「ふりつもるみ雪にたへて・・・」の御製への思い

井上忠衡

私が終戦の玉音放送を耳にしたのは、北支那の開封であった。

「堪えがたきを堪え、忍びがたきを忍び」あのお言葉は、はっきり聞きとれた。そのとたん全員が愕然とした気配に包まれた。その後三～四ヶ月くらい経過した頃、一人の兵士が脱走し、続いて自決する者が出た。中隊長は兵士を集め、ねんごろな講話があった。

それは、「敵の弾に当って戦死するのがお国のためではないのだ。犬死は決してするな。我々は元気で祖国日本へ帰り、祖国日本再建のため、精神的にも、肉体的にも、懸命に献身努力することこそ、お国への真のご奉公ではないか」と涙ながらの講話であった。

私は昭和二十一年五月に復員した。父は戦時中に死亡しており、お社に残ったのは私唯一人。それからは暗中模索。苦しくて、つらくて、情けない日々が続いたが、数年たったある日ふと目にとまったのは

ふりつもる　み雪にたへていろかへぬ

松ぞををしき　人もかくあれ

という昭和天皇の御製であった。

このお歌に身震いをする程強烈な感動をおぼえ、何度も何度も朗読した。朗読するあいだ、何故か涙があふれてしかたがなかった。

私は、このお歌を有難い座右の銘として、今後どんな苦しい事や、つらい事があろうとも、神々に仕へる神主として、神主らしく、その至誠を貫いて行こうと自分なりにその思いを心に誓った。

時は流れ流れて、昨年の四月、神社新報を拝見していた時、図らずもこの御製のことが掲載されていた。私は一瞬この記事を凝視し一気にその文章を熟読した。

昭和天皇のこのお歌は、昭和二十一年正月、皇室伝統の歌会始の時、始めて国民の前に示されたもので、天皇陛下が、ご自身の御心を引きしめられると同時に「日本国民は、日本の誇りを忘れる事なく、建国以来の誠の日本人らしく、節義を守り、雄々しくありたいものだ。」と国民を励まされるお気持ちをこめて、つくられたお歌であった。

私は神主として、ご神徳の高揚はもとよりお社の施設設備の充実、或いはお社を中心とする地域住民の素直な心根を育成することに微力を捧げながら今日に至った。また、昭和

五十年代からは社会に汚点を残して刑を負い、それをつぐなうため国の施設に収容されている数多くの人達に数々の講話を聞かせた。

一人でも多くの人達の心に響くであろう教化活動を進めるなかで、受講する人達が納得したように頷いたり、体を乗り出すようにして話を聞いてくれたり、或いは出所した人人から喜びの手紙が届いたりした時などは非常に嬉しく思った。

両親より生を享けたわれわれ人間は、人間らしく、胸を張って歩みたい、そのために私は収容されている人達に時々次のような事を話しかけている。

家庭の人達は、皆が無事お努めを終え、元気で帰宅する事を朝夕祈り続けている。一年に一度でいゝから『親父、おふくろ元気かい。俺も元気だ。今しばらく待ってゝくれ。』字はまずくていゝ。素直な無言の葉書を出してはどうか。すると聞く者の中には、何故か横を向きそっと目頭を押さえる者も居るのである。

私が行う集合教誨は二階の一室。その部屋から窓越しに見える中庭は広い。その中庭を何人の人達が掃除をするのか知らないが、あの美しく一直線を引いたように掃除をしたカギ目跡・・・　私は受講者に窓越しに「あの掃除の跡をみなさい」とあのカギ目跡を見せる。そして「この美しさは、掃除をする人達が綺麗に掃除をしようと心にきめ、素直な気

持でカギを持ち、素直な気持で掃くから、あのように美しく綺麗なんだ。もし、皆の気持がバラバラで、勝手気まゝに『掃けばいゝジャン』といった気持では、決してこの美しさはないのである。人間は、だれしも志（こころざし）が定まればその気合も盛り上るもの」と、現実の姿を端的に話しかけ、力説しているのである。

これは、私が行ってきた教化活動の一例であるが、収容者一人一人の心に如何に響くか、そして人間らしい人間に立直ってくれるか。その成果の程は、すぐに見えるものではない。然しながら、この御製の精神を出発点とする教化活動に今後共微力を捧げたいものとその思いを心にきざむのである。

皆様方の温かいご指導と、ご助言の程お願い申し上げ私の講話を終ります。

ご静聴有難うございました。

（愛媛県　國津比古命神社　宮司）

英霊未だ甲冑の紐を解かず

木下鍒二

去る五月二十日上京の機会に恵まれましたので、翌日二十一日靖国神社にお参り致しました。

その日は、月次祭の日です。昇殿参拝を許され、宮司以下二十名の神職と三名の巫子、そして五名の楽人によります荘厳な祭典、玉串奉奠をもさせて頂き、深い感動を覚えながら退出し、改めて拝殿の前からお参りを致しました。右手に白い看板が立てゝあって、和歌が一首書かれています。

神がきに涙たむけてをがむらし
　かへるをまちし　親も妻子も

昭憲皇太后の「靖国神社にまうでて」と題する御歌です。

この御歌を拝唱したとき、私の氏子の一人入口武宣氏の事を思い起したのです。

それは平成七年、戦後五十年の節目に当り「日本人は靖国のこゝろに立ち返らねばなら

ない」との思いから、天草遺族連合会から『天草灘・戦歿者の妻たちの戦後史』と題する一冊の本が刊行されました。涙なくしては読み進むことの出来ない本でございます。

その中に入口氏の一文が納められています。一部を御紹介致します。

「昭和十八年の正月を迎えて間もなく、熊本の連隊にいる父から母のもとへ便りが届きます。

近々南方前線へ出動するとの知らせです。急遽、身重の母は、祖父と小学一年生の私、まだ足元のしっかりしない妹を連れ、霜の下りた早朝家を出て、バス、船、汽車と乗りつぎ、熊本駅前の旅館に辿りついた時は夕方でした。翌朝早く、駐屯部隊の父に面会、笑顔で迎えてくれた父の顔、しかしその目には、老いた父母、若き妻、幼き児等を残して戦場に赴く者の言いしれぬ悲しみが秘められていたように思われます。そして父は母にそっと別れの言葉を告げたと言います。

『前回の日中戦争では無事に帰ってくることが出来たが、今回の戦いは状況から判断して生やさしいものではない。まして南方ともなれば、帰還はむずかしい。死を覚悟していかねばと思う。後を頼む、苦労をかける、すまぬ。・・・』この言葉が最後の語らいとなった。」

終戦です。さあ父チャンが帰って来るゾ、入口さんの家からバスの停留所が見えるのです。今日は帰って来る、明日はきっと帰って来ると、バスから降りる人々の中に父の姿を求め続けたのです。しかしその願いはついにかなえられることはなかった。

神がきに涙たむけてをがむらし
かへるをまちし親も妻子も

残された御遺族には、筆舌に尽すことの出来ない悲しみと苦しみが続くのです。何ものにもかえがたい愛する家族を残こして、御国の為なればと散華された御英霊の御心を思うとき、慰霊の誠を捧げても、捧げても尽せるものではありません。

御英霊の遺書を一つだけ御紹介致します。義烈空挺隊の久野正信大尉が出撃に際し、五歳の長男と二歳の長女に宛てたものです。幼い二人が早く文字を習い読めるようにと、カタカナで書かれています。

「正憲、紀代子、父ハスガタコソミエザルモ　イツデモオマエタチヲ見テイル　ヨクオカアサンノ　イヒツケヲマモッテ　オカアサンニ　シンパイヲカケナイヨウニシナサイー中略―ヒトノオトウサンヲ　ウラヤンデハイケマセンヨ　「マサノリ・キヨコ」オトウサンハカミサマニナッテ　フタリヲヂット　見テイマス。（後略）」

「姿は見えないけれど、神さまになって二人をいつも見守っていますよ。」

この遺書には、日本人の死生観がはっきりと見えています。

身は朝露と消ゆるとも、霊魂は神となり仏となって、天かけり国かけり、愛する祖国を、ふるさとを、家族を護るのだ。

だから従容として死地におもむくことが出来るのです。

この事を、平成九年に刊行されました「二十一世紀の遺言」という本の中に、当時靖国神社宮司をなさっていました大野俊康先生が「学徒出陣と靖国のこころ」と題する一文を寄稿なさっています。その大野先生も学徒出陣し、特別操縦見習士官として決死の訓練中に終戦を迎えられているのです。

先生は『徳川家康』で代表されます時代小説作家山岡荘八氏新聞連載記事を引用しながら記述なさいました。かいつまんで御紹介致します。

山岡氏は昭和二十年四月、大本営海軍報道班員として鹿屋基地に配属されます。

基地に着いて先ず目にしたのが、二十数名の特攻隊員の出撃直前の姿でした。

明るく笑顔で語り合っている隊員達、底ぬけの明るさは、彼の予期していたものとは正反対だったのです。死に直面し、死が目前に迫っているのに、まだ二十前後の若い身空で、

何故このような底抜けの明るさが「どうして彼等の肉体を占領し得たのであろうか・・・その秘密だけは、とにかく私なりに解いておきたかった・・・。」と考えた山岡氏は質問の矢をこれはと思う隊員の一人西田高光中尉に向けたのです。極どい質問でした。

先ず「この戦を果して勝抜けると思っているのかどうか。」次に「もし負けても悔いはないのか。」そして「今回の心境になるまでにどのような心理の波があったのか。」

中尉は重い口調で答えました。

「現在こゝに来る人々は、みな自分から進んで志願したものであること、したがってもはや動揺期は克服している」と。

最後に付け加えました。

「学鷲は一応インテリです。そう簡単に勝てるなどとは思っていません。しかし負けたとしても、そのあとはどうなるのです。・・・

われわれの生命は講和の条件にも、その後の日本人の運命にもつながっていますよ。

そう！民族の誇りに・・・」

「私は、彼にぶしつけな質問をしたことを後悔しなかった。（略）

彼が五百キロ爆弾と共に、大空に飛び立っていったとき、見送りの列を離れて声をあげ

て泣いてしまった。」と記しています。

山岡氏はこの時特攻基地での体験を、生涯再び見ることの出来ない天国であり、みじんもウソのなかった世界・・・、この事を肝に銘じた。と述懐しております。

まさにその通りです。なんと清らかで澄みきった心境でしょうか。一片の邪念も曇もない、たゞあるのは憂国の情のみです。正に護国の神さまです。

「人の生命は地球より重い」と申します。しかしその尊い生命も祖国がなくては支えてはくれません。その祖国を国たらしめているのが、その国の歴史であり、伝統文化、特に心の文化、宗教なのです。その心の教育を忘却した結果が、現在の我国の心の荒廃を生み、滅亡の渕へと歩みを進めているのです。

このまゝでは、「後は頼む」の一言を残し戦場の露と消えた御英霊に対し、何と申し開きができましょう。御遺族に対しても申し訳が立ちません。

一人の戦争未亡人が悲しい和歌を詠みました。

かくばかり　みにくき国となりたれば
捧げし人の　ただに惜まる

靖国の御英霊に対し「外国を侵犯した罪人である。特攻隊にいたっては全くの犬死であった。」と平然と広言してはばからないやからが輩出して来ました。

ついに靖国神社を裁判の庭に引き出し、被告の席に座らせたのです。

一昨年八月十三日、小泉首相が靖国神社に参拝したことで、あちこちで違憲訴訟が起こされました。六ヶ所を数えます。特に大阪と松山では靖国神社を直接訴えたのです。

原告の意見陳述では

「犬死に過ぎない戦死者を英霊として美化する靖国神社は、一般の人を戦争に駆り立てるための軍事施設である。」とか、「自分たちに断りなく肉親を合祀した靖国神社はけしからん。」等と全く聞くにたえない暴言の数々です。

これ等一連の裁判は、我国の共産主義化を目論む戦略の上に立つ一つの作戦なのです。先ずは、我が国を日本国たらしめている歴史伝統文化を否定し、特に宗教文化は、日本精神の中核ですから、これを形骸化するのが奴等の目的です。

もう一つ靖国神社に関する重大な問題がございます。皆さま御存知、新しい国立慰霊施設の建設の問題です。

これは、小泉総理が総理に指名される以前から八月十五日参拝の公約を致しておりまし

た。これに対する中国の圧力は実に激しいものがありました。

その圧力は三点です。

1、参拝を八月十五日以外にする。

2、首相談話でこれまで以上の謝罪内容に踏み込むこと。

3、国立慰霊施設を建設すること。

八月十三日は、いわゆる前倒し参拝で物議をかもしましたが、その後の記者会見での談話には愕然と致しました。さらにそれが中国の圧力に百%いいなりになったと分かったときは本当に腹立たしさに煮え返る思いが致しました。

戦歿者の追悼、慰霊、顕彰の場として必要なのは靖国神社である。靖国神社以外には絶対に有り得ないことを、国民等しく腹の底に納め、胆に銘じる必要があります。

先に鹿屋特攻基地のお話をいたしましたが、鹿屋は海軍特攻基地です。鹿児島県にはもう一つ、陸軍の特攻基地「知覧」がございます。

現在この知覧には、立派な知覧特攻平和会館という記念館がございますが、その会館の初代館長であり、今も特攻の語り部として活躍中の板津忠正さんという方がいらっしゃいます。その板津さんは実は御当地名古屋市の御出身でございます。

氏は昭和二十年五月二十八日、知覧より沖縄に向け特攻出撃なさったのですが、エンジンの故障で不時着、奇跡的にも一命を取り止められます。再度の出撃を熱望なさるのです。やっと出撃命令が下ったのですが、その日は悪天候の為出撃中止、そしてついには六月二十三日沖縄の戦いは終結、特攻作戦も中止、そのまゝ終戦です。

ふるさと名古屋に復員なさってから名古屋市役所にお勤めでしたが、その勤務のかたわら土日は必ず、御遺族を訪問なさるのです。ついには停年前に職を辞し、知覧基地から飛び立って戦死を遂げた千三十七名全ての御遺族一軒残らず御家庭を訪問なさって、全員の写真・遺品・遺書・手紙等を記念館に納られたのです。

その完成の年が奇しくも終戦五十年、平成七年とのことです。長い年月と大変な御苦労があったことは容易に想像出来ます。

その板津さんが語っていらっしゃいます。

「私が特攻志願したのは、国のため肉親のために散るの一念でした。満足感がありました。私は二十歳でしたが、当時の仲間は皆そうだったんですよ。

私らは特攻にいくときには靖国神社に当然入るものだと思って、それぞれに出撃して、あちこちで体当りしても、最後は靖国神社の鳥居のところに集まって一緒に中に入ろう。

と言い交わしていました。」

二百四十六万余柱の御英霊は全て、靖国神社という太い絆によって固く結ばれているのです。

板津さんは更に語ります。

「自分達が死んだあと、日本がどうなっていくのか、そのことだけが心残りでした。そのため、私は、靖国神社に参拝するときは、いつも『今、日本はこうなっています』と報告しています。

でも最近は非常に心苦しいときがある。こういう時代になってきたからね。今日の世相を靖国の御霊にどう報告すればいいのか、つらい気持がします。」

特攻の語り部板津さんは、肩を落し力なく語るのです。

このように情けない国となり下がった事を、御英霊に深くお詫びするとともに、日本国民が正道に立返るべく、私達一人一人が力を注ぎ、そして御英霊の御光の輝きを祈らねばなりません。

神風桜花特別攻撃隊出撃三十分前、鉛筆で海軍手帖に走り書きした絶筆の辞世

死するとも　なほ死するとも　我が魂よ　永久にとどまり　御国まもらせ

我が国を覆うたゞならぬ暗雲を思うとき、御英霊の安らぎはないのです。

九段の桜は咲きほこるとも
御英霊は未だ甲冑の紐を解くことが出来ないのです。

我が国に、弱体化憲法あるかぎり、魂の心棒の抜けた教育基本法あるかぎり、東京裁判史観にしばられている内は、御英霊は戦闘状態なのです。御英霊の御心を安んじるためにも、我々は一日も早く、全ての国民に、悠久の大義を明らかにし、倫理を正し、草薙神剣で打ちはらい、神国日本に立ちもどらねばなりません。

（熊本県　大江八幡宮　宮司）

われら皆　同胞（はらから）

佐古一洌

消えし子よ　残せるサボテン花咲けり　かく小さくも生きよと願う

この歌は、北朝鮮に拉致された横田めぐみさんの母上早紀江さんが詠まれたものである。北朝鮮から韓国に亡命した元工作員の目撃談によると、めぐみさんは、当時「お母さん、お母さん！」と毎日叫び続け、部屋の出入口や壁などを引っ掻いたので爪が剥がれそうになり血だらけだった、と言う。

親子が突然無惨にも引き裂かれる。最も悲しい事であります。この〝拉致〟で思い浮かぶものが、日本に古くから語り伝えられてきた、大変悲しい物語に『山椒大夫』があります。

○

東北のある地方で幸せに暮らしていた一家の夫が、西国へ行ったきり連絡が途絶えてしまい、健気にもその妻と子供二人が父を訪ねて旅をするところから物語は始まります。

そして、旅の途中越後の国で恐ろしい人買いにかどわかされ母と子が無情にも引き裂かれ、子供の安寿姫と厨子王丸は丹後の由良に屋敷を構える山椒大夫という者に買い取られます。そこで姉弟は大層な苦労を重ねますが、或る時屋敷から逃げ出す事を計画します。そして無事厨子王が逃げたところを確かめた姉の安寿は、海へ入り自ら生命を絶ちました。

一方厨子王はようやく都へ上り、神仏の加護を得て高貴な人にとり立てられ出世を致します。やがて母が売られたという佐渡島に渡り、母を探しました。

厨子王は、とある百姓家の広庭で筵（むしろ）の上に粟穂をひろげて鳥打ちをしている、みすぼらしい老婆に出会いました。その盲目の老女は、何かぶつ〳〵とつぶやいている。耳を澄ましてよく聞くと、

安寿恋しやほうやれほ
厨子王恋しやほうやれほ
鳥も生あるものなれば
疾（と）う〳〵逃げよ追わずとも

厨子王はその老婆が長年探していた母であることを悟り、駆け寄って涙の再会を果たしたところで物語は終わります。

我々日本人は、この物語を通して親子の絆の固さ、人の心の悲しみを感じ取り又培って来たのであります。

『山椒大夫』は、苦難の末母子は再会を果たし、ハッピーエンドとなりましたが、北朝鮮に拉致された多くの人々が肉親と再会すること叶わず、安寿姫の如く絶望と辛苦のまゝ異国で落命したことは、誠に痛ましく憤ろしい限りであります。

この北朝鮮拉致事件を我々多数の日本人が、数十年間無視もしくは矮小化して来ました。かつて皇后陛下は、この事件が明るみに出た時、「驚きと悲しみと共に無念さを覚えます。何故私たち皆が、自分達共同社会の出来事として、この人々の不在をもっと強く意識し続けることが出来なかったか、との思いを消すことが出来ません。」と極めて根源的なお問いかけをなさっておられます。

ある物事が、他人事ながらももはや決して他人ごとでは済まされぬという認識、と言うよりも共感。その根底にあるものは、生命・血肉を分けた家族。更に自らが同じ祖先、歴史・文化を戴いて来た国家と民族に属しているのだという強い連帯感であります。

我々人間はいつ如何なる時も、どこかに所属しなければ生きて行けないのであります。それが家族であり、国家であり又民族でもあります。

あの拉致問題を通して、戦後この方久しく蔑ろにし、忘れかけていたものに我々ははっきりと気付き、目覚めた思いが致します。

それは、日本人・日本国・日本民族の運命共同体たる同胞感、すなわち皆〝はらから〟と言う何よりも大切なかつ重い真実であります。

（京都府　松尾大社　宮司）

春祭りの後で

芦原高穂

本日は、当神社祈年祭にご参列下さいまして誠にご苦労さまでした。

永く厳しい冬をたえて、北国の旭川でも春の兆しが雪解けと共にあらわになってきました。

数年前隣の旭川中学校のそばを歩いていたら、中学生が数人通りかかりまして、思案げな表情を見せていたので、聞きますと、国語の先生が春の印と思われるものを探してきなさいという課題に取り組んでいるとのことでした。言うまでもなく北海道の春と言えば雪解けであり、正に軒下の残雪から顔を出しているゴミや水たまり、雪に永く埋もれていた草花の萌上がる緑に、北国に住むものとしてそれは力強い春の息吹と映るわけであります。

愈々春の農作業が活発化するわけでありますが、五穀の豊穣や秋の収穫を共に祈るべく只今は神前には手肱に水沫掻き垂り、向股に泥掻き寄せて取り作らむ奥津御年を八束穂の伊加志穂に実らしめ給ひと祝詞を奏上致しましたが、当然の事ながら厳しい農作業から生

み出されるお米は八十八の手間を経て収穫されますが、そうした努力と共に忘れてならないのは、お天道さんや雨などの天地自然の恵みであります。

これら自然の営み無くして実りを秋を迎えることはでき無いのであります。

お米のみならず田んぼや畑から生み出される作物は天地自然の恵みと人の英知と努力の合作であります。

現今伝えられております一番古い歴史書である古事記日本書紀にも、稲作に関する記事が多数見受けられ、古くからの伝承において、稲作がいかに重要な意味を持っていたかを物語るものであるかは、今更申し上げるまでもないことであります。

さて、先日ある方からの質問がありました。

それは、神話において多くの神様が登場されるけれどどうして天照大神が一番上位の神様として尊ばれるのですか、もっと早くから登場される神様もいらっしゃるのに、と言う質問でした。

普段の不勉強を恨みましたが既に遅しでありました。しかしとっさに思いついてお答えしたことがあります。

それは日本書紀の中に出てくる神勅であります。

その中においても重要なのが、天孫降臨に際し、天照大神が皇孫天津彦彦火瓊瓊杵命（あまつひこひこほににぎのみこと）に下された神勅の

豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は是れ吾が子孫の王たる可き地なり、宜しく爾皇孫就きて治せ。行矣、寶祚の隆えまさむこと。當に天壌と窮り無るべし

皇孫が我が国を統治しなければいけないという仰せであり瓊瓊杵命に従う天忍穂見命に授けた

吾が兒、此の寶鏡視まさむこと當に吾を視るるがごとくすべし。與に床を同じくし、殿を共にして齋鏡と為す可しと

これは鏡を以て祭祀に勤しむ事と、鏡に映る顔を天照大神とすると言うのは自分の顔が天照大神であると言うことです

私が皇學館大學に在学中谷省吾先生が講義の中でふれておられまして、よくよく考えますと自分の顔というのは決して自分独自の面影ではなく、そこには先祖代々の姿が投影されているのだと言う風に講義をされておりましたが、単に天照大神を奉ると同時に先祖を祀る意味合いも強く感じるのであります。

皇孫瓊瓊杵命に付き添って天下りされる天児屋命、太玉命に勅して曰く

吾が高天原に所御(きこしめす)斎庭の穂を以て、亦吾が児に御せまつるべし

とのお言葉から稲穂を下されたとの記事が残っておりまして、

天壌無窮、宝鏡奉斎、斎庭の稲穂の神勅は、三大神勅とも言われ、神代から伝わる大切な原理を示した神勅として有名ですが、代々皇室の道統を戴き歴代天皇の統治と祭祀の原理そして生活の糧のとしての経済をも網羅した重要な事柄が示された詔であるわけです。

正に神話における我が国の根本的な姿を示されたのが天照大神であったといえるわけであります。

今や稲作は弥生時代という通説が、つい先日でしたが縄文期において稲作を行っていた遺跡が発見されたことで、もっと古くから我が国において行われたことが証明されておりました。

戦後の歴史学は考古学を中心とした科学性を追求する姿勢で研究が進められましたが、大山のような歴史事実のホンの一隅を突くような考古学の中でも古事記日本書紀の記述を裏付ける遺跡が発掘されておりまして、単におとぎ話の如く否定的に捉えることができないことが判明してきているのであります。

こうした我が国の国体ともいえる基本原理があると言うことは、世の中が乱れれば乱れ

るほど、重要性が高まるのであり、日々の暮らしや個々人の生活を大切にすることもふまえながらも、それを支える社会基盤としての国家社会の健全性を保つためにもこうした神話に伝えられた国柄を大切に守っていかなければならないわけであります。

時代に即応することも大切でありますが、混乱の時代にあってあえて戻すべき國の姿をもっていることの有り難さ、今一度かみしめなければならないと思うのであります。

（北海道　旭川神社　宮司）

慰霊祭にて思う事

大島守彦

今日迄永い間いろんな慰霊祭に接してきましたが、思い出深いものばかりで、年月の流れとともにこれからもやらねばならぬという事を痛感しているところであります。

平成十五年になりまして祭主として行った慰霊祭についてお話し致します。今年も四月二十九日に奉務神社六所神社境内にあります招魂社に於て戦没者の慰霊祭を行いました。いつものなつかしい遺族の人達が参拝されました。祭典が終り私の心情を話しました。戦死された方のお顔が皆さんを見ると浮びます。今日は思いを新たに家族の皆さんとも話をして慰霊をして下さいとお願いをしました。そしてあの頃の事をお話ししました。遺族の人達も又来年もお願いしますといろいろとお話しをして帰られました。

話は変りますが、これから四月十三日に参加しました、奈良橿原神宮境内にて行はれました海軍十三期殉国之碑第三十回慰霊大祭並びに入隊六十周年式典についてお話し致します。

私は昭和十八年海軍甲種飛行予科練習生として三重海軍航空隊奈良分遣隊に入隊し、上海海軍航空隊、高知海軍航空隊と訓練を受けました。特攻兵器搭乗員の志願もし、国を守らねばならぬ一念から空に海に戦しましたが、多くの戦死者を出して終戦を迎へました。その頃の事を思うと今こうして戦後生きてきた事が夢のように思われます。今回の慰霊祭は入隊六十周年記念慰霊大祭として行いました意義深い大祭でありました。

橿原神宮に殉国之碑が出来ましたのは昭和四十八年十一月でありました。神宮の特別の御配慮と同期生の並々ならぬ尽力により出来たものであります。

今回は特に記念すべき年に当りますので、盛大に参拝されました。参加者は千二百人を越へました。神宮大鳥居前に集合し、ネービーラッパ隊の先導にて行進し神宮参拝、宮司の挨拶を頂き、軍歌演奏して若桜友苑殉国の碑前にて同期生一〇〇四柱の慰霊祭を行いました。共に過しし時の事を思い浮べ感無量でありました。

この殉国の碑は建国の聖地畝傍山の麓にありまして、丁度桜花爛漫と咲き匂う時でありました。慰霊祭が終り若桜友苑にて総員集合し、亡き戦友を偲び、誓いも新たに同期の絆を深め、懐かしい仲間と語り合い、杯を酌み交はし、新しい世紀に生きる喜びを英霊に感謝しながら噛しめました。

このような大規模の慰霊大祭は年令的にも今回が最後になりますが、慰霊祭は毎年行っていく事としております。

こゝ橿原神宮は私にとっては特に忘れられない思い出のところであります。昭和十九年十月今は亡き父が初めて面会にきてくれました。父は郷里で永く宮司をしており、又町の壮年団長と多忙の身でありましたので、最初で最後の面会でした。果物を土産にもってきてくれました。分隊長にも挨拶しました。そして父と二人で一日ゆっくりと面会したところがこゝ橿原神宮でありました。神宮に参拝し休憩所にて久々に話をし、近いうちに戦局の急変に伴い新しい任務につく事となるので、もう会へる事は出来ないだろうという事を伝へました。母や妹弟達の事など聞き、なつかしい一日の面会を過した忘れられないところであります。

あれから六十年こうして慰霊祭にまいりますと、亡き父の事が浮びあの頃のいろんな事が思い出され、なんともいへない気持であります。

福岡県でも護国神社他慰霊祭に参加しておりますが、年とともに参拝者が少くなってきており、やむを得ぬことではありますが淋しい思いが致します。

私は今福岡県甲飛会の久留米地区支部長をしております。毎年慰霊祭を行っております

八月十三日は県護国神社でみたま祭りが行はれることになっております。つとめて出席することゝしております。

今年の慰霊祭をいつもの通りやってきましたが私も大正生れですので、昭和平成といろんな経験をして今日迄やってまいりました。

太平洋戦争中昭和二十年末上海海軍航空隊にいた時は夜空に北斗七星をながめながら二度と日本に帰る事はないと心に決めていましたので、よくぞこゝまでやってこられた事だとつくづく思います。

これからは生ある限り慰霊祭を行い、祖先を敬い、国を守るの精神を子供孫に語りつづけ、機会ある毎に多くの人達に慰霊の心を語り伝へて行きたいと思います。

（福岡県　六所神社　宮司）

褌にみる日本人の粋（いき）

村田昭彦

皆様こんばんは。本日のみそぎ会にようこそご参集下さいました。今夜は初めて参加される方や若い女性の参加も見受けられますが、みそぎの前に、今日は、世界に誇るべき日本文化の粋なものの一つであると言っても過言ではない褌について少しだけお話申し上げたいと存じます。

褌と申しますと、男性の下着でございますが、神社の祭や水泳、またみそぎにも使用いたしますけれども、この褌を取り上げてみまして、ごくごく基本的なことを申し上げます。

この褌、一般に大きく分けまして「六尺褌」、「越中褌」、「もっこ褌」の三種に分かれます。その他、特殊なものとして「相模のまわし」などがあります。

先ず、「六尺褌」に付きまして、これは最もポピュラーな褌の一つで、各地の裸祭りなどでよく見られると思います。この六尺褌は、一枚の長い布を股間から腰に巻き付けて着用するタイプで、これには前垂れのある型とない型があります。

前垂れのある型は、前から見ますと一見この後申します越中褌と同じように見えますが、後ろから見るとこのようにちゃんとTバックになってますので区別出来ます。前垂れのないタイプは、年輩の方は御存知かと思いますが、だいたいこれが古くの水泳用のタイプともいえます。

次に「越中褌」ですが、これは六尺褌と並んでポピュラーな褌です。みそぎをされる男性方はこれです。

一メートルほどの布の一端に紐が付いていまして、全体としてT字型をしています。後ろにあてて、前で紐を結んで本体を股間から前の紐の内側を通して前垂れを紐にかけて垂らした型で、歴史的には新しい形のものです。締め心地は六尺褌とは対象的に非常に軽快で、股間を締め付けられることもなく、現在のトランクスのごとき軽快感です。

そして、次に最も新しいタイプの褌に「もっこ褌」というのがあります。これは、六尺褌を簡単にしたような形で、形態的には股間を覆うだけの長さの布の両端を袋縫いにして紐を通したもので、その形が荷物運搬用のもっこに似ているというらしくて、この名前が付いたようで、かつては市販品もあったそうです。また、この形は中高年の方には懐かしいかもしれませんが、かつて子供用の水着として広く用いられた「黒猫褌」というものに

よく似ております。

この他にも、褌には「割褌」「九尺褌」などの種類があり、各部の名称や締め方などもあるようですが、本日は大きく三種に分けて、ごくごく簡単な定説を申し上げました。

ところで、褌と申しますと、どうもいまいち恥ずかしくて、という声も聞きますし、今の若い女性の方々からも卑猥だと敬遠されがちでございます。

そもそも、この褌が恥ずかしいとか、使用しなくなった大きな変わり目というのは、いったい何時頃なのだろうか、と思うわけです。そして、それが時代の一つの変わり目とも重なっているんじゃないか、とも思うわけです。

例えば、明治維新、江戸時代までは、褌は男の仕事着のような役割として、籠かき、大工、漁師など、粋な姿で仕事に励んでいました。少なくとも江戸時代あたりまでは、褌は恥ずかしいというような衣装ではなかったはずであります。

文明開化の時代、外国人が日本に入ってきて、この頃から日本人の外国人に対する劣等感のようなものが生まれてきたのではないか。その後、日本人の変わり身の早さ、外国に影響されやすい国民性も手伝って、西洋かぶれの風潮が日本人の中に芽生えていきます。

殊に、西洋化することが、より近代的と考える風潮が日本人に芽生えてきた時には、こ

の頃から褌は下品でみっともないと意識して、褌姿で町を歩くことも禁止されました。洋服をはじめ生活風土全般にわたって洋風化されていったわけです。

しかしながら、日本には日本の風土があります。日本の風土に適応したものが、これが一番大事であります。高温多湿の日本、衣食住の風土を考えてみましても、西洋のパンツは日本には合致していないような気が致します。

そして昭和になり、軍隊の定番下着でもありました越中褌が、終戦と同時になくなっていきまして、段々と今日のパンツに変わっていったんだと思います。言わば、褌は日本の気候・風土・民族衣装に育まれた長い伝統に根付いてきた日本文化の一つであると言えます。

ところで、話はころっと変わりますが、先日、広島県の江田島旧海軍兵学校を見学する機会に恵まれまして、心身ともに健全なる海軍将校養成の基地として、その教育方針の徹底した厳しさのお話に、国を守る任務を果たす人材育成の大切さを伺い知るとともに、今日の平和を想う時、第二次大戦中の戦場に向かう若き特攻隊の残した数々の遺書や手紙、遺品に胸を打たれ、当時の彼らの生活や国・家族に対する想いが垣間見られました。

その折り、私、ふと頭に思い起こした事がございました。

今から丁度十三年前、平成二年のことになりますが、三重県神道青年会の創立四十周年記念式典の折に、記念講演として拝聴致しました、当時東京大学教授で、現在は同大学名誉教授、明星大学教授、日本会議副会長でいらっしゃいます小堀桂一郎先生のお話でございます。

「蘇れ大和心　大嘗祭の秋(とき)を迎えて」と題しての先生のお話の中で、「本居宣長の有名な歌、『敷島の大和心を人とはば朝日に匂ふ山桜花』には、大和心の定義みたいなものが歌われてゐる」と述べられまして、神風特別攻撃隊で突撃していった若者たちを、「大和心とは専ら命を惜しまぬ武士(もののふ)の潔さの象徴的な表現で、桜の花がまだ衰へない、色も変はらない内に美しいまま散ってゆくあの姿は、確かに死を恐れぬ若い武士(もののふ)の魂の在り方を思はせる。その大和心を、今の衰へた状態から呼び覚まさう。我々は大和心に対して目を覚ませ、息を吹き返せと呼びかけなくてはならない。そして、いかに明文をもって法に規程された権利と雖も、人間がその権利の上に安住して、居眠りしてはならない。伝統とてもそれを守護し、正しく後世に伝へて行かふといふ意思に緩みが生じた時には、やはり安泰とは言へない。伝統の持続が文化の一つの価値であり、大和心を子孫に伝へていくことが変わらざる繁栄と生存の必須の条件であり、我々の責任である。」と結ばれました。

今、このお話が、ややに脳裏をよぎるのであります。

冒頭申し上げました褌に関わらず、視点を変えて見れば、それは恰も、終戦後の占領下における圧力によって、昨日までの善が悪に変わってしまっても何も反論することが出来ない時代であったと言われますが、六年半の占領が終わって、サンフランシスコ条約の締結により、日本は晴れて独立。独立したにも拘わらず、今なお教育勅語の否定、歴史・文化・伝統の否定、日本人を骨抜きにするための政策の後遺症は重く、個人の尊厳や人権ばかりを教え、日本人の心を自覚することなく、今日までずーっと民族の精神性の衰退が続いているわけです。そして、そのような中で育った世代が、私も含めまして子を持つ親となって、社会の中心になっているのが、今日の日本の姿であります。

昨今、様々な論争を醸し出しております、国立追悼施設建設の問題、教育基本法改正や教科書問題、男女共同参画社会などの問題もしかりであります。

その根本たる憲法の見直しに及ばず、無自覚なまま、とかく物質的な豊かさのみを追い求め、悠久の歴史・伝統と先人の知恵によって築き上げられてきた尊き大切なものを置き忘れてきたように思われます。それは、日本人としての粋な姿、潔さなのではないでしょうか。

本日は、単なる褌を取り上げて雑多なお話を申し上げましたけれども、褌に関わらず、こういった日本の風土・歴史・伝統によって培われた日本の文化、日本の古き良き美風・美徳といった二十一世紀に誇るべき日本の再構築に向けて、微力ながらも、ここで褌をしっかりと締め直して、日本人の魂、誇り、粋な姿を取り戻そうではありませんか。

御静聴有難うございました。

（三重県　椿大神社　権禰宜）

鉄路の呻き声が聞える

河本文夫

先の大戦で、国難に殉じられた英霊をお慰めする慰霊祭も、すでに六十回近くなります。戦後も半世紀以上。この様に半世紀も経ちますと、戦争を知らない世代が増えてまいります。そうすると、どこからともなく毎年護国神社の慰霊祭並びに護持の為、社費を集めるけれど、そろそろどうかと思うと言った声が聞えて来ます。「そろそろどうか」と続く言葉は有りませんが、そろそろ盛大にと言った意味ではない様です。何となく理解出来なくは、ないのですが、確かに、昨今の厳しい経済状況の中、出費も多いのですから、切実な問題ではあります。とは言え、私達の現在の繁栄は、多くの同朋が先の大戦で、国難に殉じられた先人達の礎の上に、今の繁栄があると言っても過言ではありません。

さて、私は、過去のこの点に関して、考えさせられる経験を致しましたので、紹介いたしたいと思います。

戦後、世界は、米ソの二大強国に別れ、核拡大に走り、即ち冷たい戦争と言われる時代

が長く続きました。ところが一九九一年、ソ連邦の崩壊です。ああこれで平和に成ったと思ったのもつかの間、各地で民族戦争等が勃発しましたが、この件は、さて置き、商品を扱うビジネスの世界にも、大きな変革が起こりました。今迄は、西側、東側諸国という中でしか流通しなかったものが、その壁が取り払われたものですから、コストの安い国から、高い通価を求め商品が世界を右往左往する事になります。この事は、我国ではコスト競争力を失ない、工場を閉鎖することに繋がるわけです。私の扱っていた商品も、ごたぶんに漏れず工場閉鎖、海外にそのソースを求める事に成りました。私達は、世界各地を調べました。その結果、我々の要求する品質を満足し、コスト的に魅力ある工場が見つかりました。その工場は、旧ソ連のウラル山脈の西麓、北緯六十度の地にソリカムスクと称す町が有り、この町に有ったのです。さて商品の輸送となりますと、ソリカムスクからシベリア鉄道の一駅、ペルミに、そして一路東へ、ウラジオストック迄、約六千キロの旅です。これが信じられない程の安い輸送費です。夏この地を訪ずれると、行けども行けども、白樺林。シベリアの大地に沈む夕陽は、それは美しいものです。ところが冬ともなりますと、凍てつく寒さに、厳寒の地、氷点下五十度の気候を思いしらされる事に成ります。

さて、シベリアと言えば日本人にとりまして忘れる事の出来ない、あのシベリア抑留の

悲しい現実です。一九四五年、敗戦と同時にソ連軍によって、旧満州にいた日本人が、騙されて、この厳寒の地、シベリアに連行されたのです。その結果待ち受けていたものは、日本とは似てもにつかぬ極寒の地でありました。この抑留者に課せられた仕事は、鉄道建設、鉱山開発、森林伐採等であります。寒さと、餓え、厳しい重労働、祖国日本に帰れる日を夢見、父母兄妹を思い必死で重労働に耐えたはずでありますが、しかし多くの日本人が、寒さと餓えにより、この大地に消えたと言われております。その数五万三千人。

ものの資料によりますと、鉄道建設では、枕木が一本施設されるたびに一人又一人と日本人の命がシベリアの大地に露と消えたとも言われています。たしかにこの大地を走る鉄路の響は、旅情豊であります。しかし見かたを変えますと、遠々と続く鉄路、これは、私達の同朋の屍の上にレールが敷かれているとも思えますし、鉄路の軋む音は呻き声にも聞こえます。その上を今、コストが安いと言うだけで、今日の私達の生活を支える物資が、ぞくぞくと日本に入ってまいります。それを思いますに、戦後わずか半世紀余りで、過去の悲しい現実を忘れ去ろうというのでは、人間として余りにも寂しいと思います。

戦勝国アメリカでさえ、リメンバーパールハーバーと歴史を再認識しております。我国でも当然、忘れるなシベリア抑留をと同時に、先の大戦で命を断たれた英霊に対し、最高

の敬意を表わしたいと思うのであります。

（山口県　宮尾八幡宮　禰宜）

神へのまごころと命のつながり

櫻井田鶴子

皆様ようこそおまゐり下さゐました。今まさに梅雨、この時期に咲く花と言へば紫陽花でせうか。しかし、私は、何故かドクダミが印象的で、我家の庭の隅々まで草木を縫って、驚くべき生命力で繁茂する様子を眺め、子供のころ、あの独特な臭気と、その名前の強烈な印象の為、愛でる心など生涯抱くことはなゐ、と思ってゐたのですが、歳を取ったのでせう、ドクダミの真白な清楚な花弁と、濃ゐ緑のコントラストが周囲の草木を引き立て、その控へ目な美しさが私を魅了させ、あれ程嫌ゐだった匂ひも、今では元気を戴くエキスとなり、庭の手入れをしなければならなゐと思ひつつ、どうしても抜く気になりませむ。今までこんなに美しゐと思ったことはありませむでした。

さて、神道は森羅万象に神々がお宿りになると言はれてゐます。ここで古代の人の世界観を表はした文章を紹介ゐたしませう。「おそれある御事なれども、神道のあらましを申奉らは、水をひとつ汲といふとも、水には水の神霊がましますゆゑ、あれあそこに水の神

罔象女神様が御座成れて、あだおろそかにならぬ事におもひ、火をひとつ燈すといふとも、あれあそこに火の神軻遇突智様が御座なさるゝゆゑ、大事のこととおもひ、わづかに木一本用ゆるも、句句廼智様が御座なさるるもの、草一本でも草野姫様が御座なさるものをと、何に付角に付、触るる処、まじはる処あれあそこに在ますと、戴き奉り崇めたてまつり、やれ大事とおそれつつしむが神道にて、かういうなりが則常住の功夫ともなりたるものなり。」この文章は、江戸中期の垂加神道家、若林強齋の『神道大意』の冒頭の部分でござゐます。便利な生活を営む現代人が失った世界、大昔の話と聞き流す子供達、こんな不自由な生活はコリゴリと避けて通る大人達、ところが、山川草木に神の存在を認め、自分の命と重ね乍ら生きる古の人々の世界観が、古代の人の研ぎ澄まされた生活と重なり、私の中で蘇り、今まで眠ってゐた体細胞が急に活動し始め、満されなゐ空しゐ心にも光がさし、失った宝をやっと手に入れた幸せに涙がこみ上げてきました。井戸水は生活にとって命の水、枯れた杉葉や桧、薪で焚く御飯や風呂、火をひとつ燈すにも火がつかずマッチを何本も無駄にした日のこと、落ち葉は掃き集め、自然に帰せば腐葉土として肥料に蘇り、人は常に自然の恩恵を受け成り立ってゐる事を教へられ乍ら育った子供時代。思へば枯枝に火を燈せば炎として新しゐ命が生まれ、一杯の水も乾乾ののどを潤し体中の細胞が活動する。

これも命の蘇りの何ものでもなゐのです。自然の物は自然にお返しする。すると再び蘇りはじめ、新しゐ命となって命はつながれてゐくわけです。『神道大意』は、その循環の中に人の命も、自然の恵みを戴き生かされ、何に付角に付触れる処、交はる処あれあそこに神が座しまして、日常生活の一瞬一瞬が神道ですよ、と主張してゐます。すっかり物と心が離れてしまった現代人の生活に、人の道を説き、生活の規範・倫理・道徳の教へが日本の古ゐ習慣の中で培はれ、神と深く関はり、日々神々に感謝し、神のまごころをまごころで戴き、戴ゐたまごころにまごころを捧げ神恩感謝する心は、時代が豊かになっても人々の心の底に生き続けていることを教へてゐます。一般には、稲作耕作は弥生時代に始まり、国家も出来ました。当時の稲の出来、不出来は生活を左右してゐただけに、事の他稲を大切なものとしてきました。生命の源である稲、実り豊かな秋をと願ひ、神を祭りただただ、ひたすらひたすらひたすら祈り続けたのです。祈ることがなければ神様のお恵は戴けなゐことを信じ切ってゐました。今日その祭典が祈年祭・新嘗祭でござゐます。このやうに古代の世界観は万物と共生し、神と人、人と人の交はりを中心とした共同体の営みから発生した信仰、アニミズム信仰なのです。生きとし生ける物全てに神の存在を自覚し、畏敬と尊崇の念が、人の道・規範を生み、宗教を越へたまさにスーパー宗教なのです。戴ゐた命

は千古の歴史を超へた現代でも生々と生き続け、一人ひとりの命は明日に継げる尊ゐ命なのです。「正直の頭に神宿る」、神の御心は大変清らかなので、私達も清らかな心を捧げませう。そして最高のおもてなしをいたしませう。きっと神様はお喜び下さゐます。これは決っして弥生時代の話ではなく、人の命や心、物があまりにも粗末にされてゐる社会を思うにつけ、大人達よ目覚めよ。あなたはこの世に何を残すのですか。あなたの使命は何でせうと問うてみたゐのです。足下に咲く一輪の花にも目を注ぎ、心を寄せた時、日本人の失ってしまった宝が、実は手の届く身近な所にころがってゐたことに気付くでせう。私はその宝を、私の心の中にあると発見ゐたしました。豊かな世界から自分の姿は見へにくゐものです。大自然に身を投じ、同じ呼吸をし、語ってみませう。きっとご祖先の教へや祭典に、現代を生き抜く教へが潜むでゐると信じます。神道とは、温く、優しく、大らかな古の教へです。そして命は学問より尊いものであり、人は蘇り乍ら成長してゐくことを子々孫々まで継げませう。

（島根県　山邊八代姫命神社　禰宜）

太鼓保存会青少年の部発足奉納にこと寄せて

川﨑　太久美

本日は太鼓保存会の皆様方多数ご参拝いただき、長老の方々から小・中学生の皆様にいたるまで、各層にわたり、太鼓浮立のご奉納をいただき、ありがとうございました。

さぞかし大神様も大変およろこびのことと存じあげます。

私も感きわまる思いで、太鼓の響きを聞いておりました。

そこで、時間をいただき、少しばかりお話をさせていただきたいと存じます。

わが国は、ご存知の通り、昭和二十年八月十五日、大東亜戦争（太平洋戦争）に敗れ、無条件降伏をいたしました。敗戦と同時に日本の国家は、すべてが連合軍により支配され、占領されてしまいました。

その占領軍は、日本を支配する方法、日本占領政策のやり方として、日本の神社神道、つまり、神の教えをやり玉にあげたのです。

では、なぜわが国の神社神道、神の教えをやり玉にあげたのでしょうか。

それは、わが国の神社を中心とする神の教えが、日本の歴史が始まって以来、脈々として、ずっと日本人の魂の中に受け継がれ続け、日本人の精神の構造と日本文化の基礎を形づくって来たからなのです。

言い方を換えますと、日本人の精神の根となり幹となっているもの、つまり、日本人の魂の根本を形成しているものは、神社におまつりしている神様の教えであります。そのために、神社は日本人の魂のふるさと、心のふるさととして、日本人の精神の中に深く根をおろし、常に日本人の精神活動の原動力となり、中心となって、大きな力を発揮してまいりました。その神社の神道の教えに、破壊的な決定的な打撃を加えれば、日本人は魂のよりどころを失い、精神を奪われて、ふぬけた骨抜き同然の、精神的に脆い、弱い、二度と立ちあがることのできないような人間になるにちがいない。そうなれば、自分たちの思う通り縦横無尽に、実に手玉に取るように日本を支配し、占領することができる。そうすれば占領政策はすべて成功を納めることになると考えたのです。

一口にして言えば、これが世に言うところの神道指令というものであります。この神道指令によって、神社は大変な打撃を受け、苦難の道を強いられることになりました。

神社に昔から伝えられていたいろいろな祭典や貴重な伝統行事また、歴史的に価値の高

い太鼓浮立や鉦浮立のような神事芸能までが制約や抑圧を受けたことは言うまでもありません。

今日、皆様がご神前に奉納していただいたような太鼓浮立などもその一つで、神道指令のあおりで、奉納者や後継者が遠のき、ついには日の目を見ることなく廃れていったものもあります。まことに残念なことですが、日本人の魂が心のふるさとを失い、それによって日本の文化が消滅していったその証なのです。

今日の太鼓浮立も、いったんは廃れかけたものを、「自分たちの代になって、このまま消滅させてしまっては、昔から受け継いできた先祖に対して申し訳が立たない。」という長老有志たちの熱い思いが漲って、太鼓保存会が結成されました。そして、さらに、特有の音色と響きを後世に伝えなければならないという強い願望によって、小学生や中学生の皆さんを説得して、指導に励まれ、稽古を積まれて今日が来たとうかがいました。すばらしいことです。

青少年の部が、打ち方といい、その響きといい、年の割りにはあまりにもすばらしいので、長老の方にお尋ねしたところ、「子どもは覚えが早いので、すぐ上手になって、大人顔負けになります。」というお話でした。まことにこの上もなく、よろこばしい限りです。

昔から伝わって来たものが、いったん廃れかけ、それが元通りに復元されて、あらたに若者たちに引き継がれ、神社のお神楽の一環として、伝統行事や神事芸能の中に組み込まれながら、地域の中に定着して行く。これこそ本当の日本文化の継承であり、すばらしい祖先たちの魂の躍動と祈りが受け継がれて行く厳然とした伝統の姿であると言えます。

今日奉納していただいた太鼓浮立の響きは、若い皆様方の祖先が神様に祈りを込めて捧げるお神楽として始められたものが、幾世代も受け継がれながら、今ここに時を越えて、若者の魂の中に生き生きと蘇り、しっかりと根付いたのです。

皆さんが一丸となって奉納された気魄の籠もった今日の太鼓浮立の響きこそ、戦後の占領政策による日本弱体化の流れをはね返す日本人としての再出発の目ざめであり、呼び戻された魂の響きと跳躍であり、日本人としての自己回帰の響きであると同時に日本文化の回帰であると信じます。

その証拠として幸い文化庁からも補助があるというお話で、まことにおめでたい限りでございます。

しかし何はともあれ、何よりもこの日を待ち望んで、およろこびなさっていらっしゃるのは、太鼓の響きをじかにお聞きになっていらっしゃったこの社の大神様であると存じま

す。

（佐賀県　福富神社　宮司）

「いのち」の大切さ

松吉宣和

今年五月五日、松尾大社において、佐古宮司ご夫妻、親族、ゆかりある人達が集い、佐古幸嬰先生の五年祭に、参列させていただき、御霊に新たなる、いぶきをいただいたことに、感謝申し上げます。

今、私たちが生活をしている中に、ご先祖様に日々の感謝をして、過ごされている家庭がどのくらいあると思いますか。ふるさとの語りべとして、中学校から母親学級での、講演の依頼があり、乃木将軍ご夫妻の生活と教育について、今の義務教育との相違を話をさせていただきました。

乃木さんが明治天皇より学習院の院長を命じられて、至誠と忍耐を持てる、強い子供の教育に携わるように言われ、教育理念の基本を、道徳教育にあり、教育勅語をとりあげています。

まず子供は、親に孝養をつくし、兄弟、姉妹はたがいに力を合わせて助け合い、夫婦は

仲むつまじく解け合い、友人は胸襟を開いて信じあい、そして自分の言動をつつしみ、すべての人々に愛の手をさしのべ、学問を怠らず、職業に専念し、知識を養い、人格をみがき、さらに進んで、社会公共のために貢献し、また法律や、秩序を守ることは勿論のこと、非常事態の発生の場合は、身命を捧げて、国の平和と、安全に奉仕しなければなりません。そして、これらのことは、善良な国民としての当然のつとめであるばかりでなく、また、私達の祖先が、今日まで身をもって示し残された伝統的美風を、更にいっそう明らかにすることでもあります。この学習指導によって、人とのふれあいを、大切にされました。今の先生は道徳教育を知らないで教育にたずさわっている先生もいます。

何故か今、家庭不和が多くなっているようです。親は子供に、自分が子供の時の話をすることは、子供とのふれあいのひとつであり、ただ強い口調で話をすると子供は反抗し、子供に親の話方の態度を聞いてみると、子供の話に対して、理解せずに、親の言う事を聞くのが子供であり、子供との話し合いをしようとしない。子供は益々反抗的になり、気がついたときは、法律や、秩序を守らず、家庭内暴力等、取り返しのつかないことになってしまい、両親が先祖に敬いの心、「幸を招く基は、朝晩先祖に向ひて、手をば合わせよ」の初心（乃木将軍家訓）で子供に接すれば、両親の先祖を大切にし、神さま、仏さまに手

を合わせる子供たち家族の姿を見て、親は胸をなでおろし、大きな希望に夢を抱き、常に前向きの姿勢で生活していることに、喜びを感じることが出来、親族との親交も深まり法律や、秩序を守り、ご先祖にいただいた、いのちを大切にされると思います。

最近は、いのちを粗末にする事件が多く、親は子供への虐待、子供は、親、兄弟への暴力、親族との争い、何故このような事が起こるのか、我が子の生命まで親は、奪う権利はないはずです。人を妬み、自我のため人を傷つけたり、生命を奪う等という行為は、決して行ってはならない行為です。

何故このような行為になるのか、その過程に、核家族の生活にあると思います。ただ自分がより良い生活が出来れば良い、以前の一家団欒の生活を忘れ、いろんな行事に、参加出来ず、自我欲のため、親にも相談出来ず自分自身を苦しめて、行動に移してしまっているようです。

自分のおなかを十月十日かけて育てた生命、どんな理由があろうとも、奪うことは出来ないはずです。両親の魂からの産声、子孫繁栄を自らの手で断ち切る事は、大人になるまで育ててくれた両親、先祖に対しても、取り返しのつかない行為です。また、親族に対して卑劣な行為であり、永遠に拭いさることは、出来ません。

草花や樹木、野鳥、昆虫、魚貝類、動物皆生命があり、人間が生活して行くため、すべて共存していかなければなりません。

季節の昆虫のホタルは、九ヶ月もの間水中での生活、そして陸にあがり、土の中で三十日間、地上に出て、一週間、人間に対して、無限の感動のひかりを与えてくれます。私が子供の頃、ホタルのひかりは、ご先祖様の霊魂、精霊であることを知りました。自然環境の適した所しか生息しない、このすばらしい昆虫、次の子孫を残すために、一匹の雄に二匹かに三匹の牝が交尾して、三百から四百の卵がかえり、ほんのわずかが成虫となり、一年後に、小さないのちの、ひかりを照らす昆虫、人間より以前から地上に生息しています。

平成十三年五月二十七日、島根県隠岐郡海士崎の地に、大正十年五月二十七日に名馬壽号慰霊碑が建立されてはじめて八十三年ぶりに、霊前において、御霊まつりをご奉仕させていただき、下関より三十名の方々が参列、今もなお、日露戦争で、多くの戦死者の御霊とともに、壽号の御霊も、島民の生活を見守って下さって、いる感謝され、崎郷土史会の会員、原寿子様より、短歌を戴きました。

壽号祭（スゴウまつり）

旗建てて、歴史を今に、水師営、馳せ来し人と、壽号を祭る。

佐古、山本先生はじめ諸先生に指導いただいた事を、忘れず神明奉仕致します。

目にみえぬ　神の心にかようこそ　人の心のまことなりけり。明治天皇御製

（山口県　乃木神社　宮司）

三種の神器

村田和之

ちなみに今の若い人達に「三種の神器」とは何ですかと質問したならば「電気冷蔵庫」「洗濯機」「掃除機」と答えられるかも知れません、その通りです。

しかし「三種の神器」と読めば知識ある人は「八咫鏡」「草薙剣」「八坂瓊勾玉」と答えられるかも知れません。どちらも正解であります。ただ読み方が「じんぎ」と「しんき」との違いがあっただけのことですが、意味は全々違うのであります。

私は岩波書店の広辞苑をひもといて見ました。「神器」とは三種の神器に継がり王位としての受け継ぎに使用するウンヌンと有り。

「神器」の場合は神事に使う器とありました。やはり区別されているのだなーと思ったのであります。

同じ様な例は他にもたくさんあります。二十年毎に行なわれるご遷宮の中で「お木曳き」行事というものがありますが、これは「お木曳き」、しかし字は違いますが「お置引き」

とにごりますと他人様の物を、だまってしっけいすることになり、読み方が、にごるか、にごらないかによって大きな違いが生じるのであります。

さて日本における「三種の神器」、ご存知天皇が代替りされた時、王位を現わす印として使用致しますが昭和六十四年一月七日臨時閣議において新天皇の即位に伴なう儀式の内、皇位のしるしとされる神器の受け渡しをする剣璽等承継の儀が決議され即位に伴う儀式の中核として位置付けられたのであります。

こうした国家としてのご神宝は、王位を現わす王冠や付随品等として他の国にも色々見ることができます。

王国制を今に伝えている国には「タイ・ヨルダン・サウジアラビア・イラン・モロッコ・エチオピア・オランダ・ベルギー・デンマーク・ノルウェー・スエーデン・トンガ・そしてイギリス」等ありますがイギリスの場合日本と違い十種類あります。それは「冠・衣・拍車・剣・腕輪・珠・指輪・笏・油入れ・匙」であります。又、アメリカはワシントンの愛用した聖書・ソ連の場合はレーニンの愛用した遺品・インドネシアは独立時の国旗と宣言書・タイのエメラルド仏像・ビルマの釈迦の歯等それぞれ国の独立記念・遺品等その国の歴史と意味が込められているのであります。

日本の「三種の神器」は遠い昔、天照大神様が日本を統治する為に孫に当るニニギの命にさずけられたもので、天照大神様が岩戸がくれされた時、岩戸の前に設置された玉と鏡であり剣は須佐之男命が八岐大蛇の尾より取り出された天叢雲剣といわれ又の名を日本武尊が草を薙ぎ払って敵の火をふせいだ剣ともいわれる草薙剣であります。

ご存知、鏡は伊勢神宮に、勾玉は宮中に、そして剣はここ熱田神宮のご神体として祀られているのであります。

この三種の神器、天照大神様が天皇の身側に祀り、私の魂として、ひたすらに私を拝するつもりで祀りなさい、このご神鏡に照らして神のお心として国を治めなさいと申され「宝祚の隆えまさむこと、まさに天壌と窮まりなかるべし」との勅を仰せ下さったものであります。

かの有名な三島由紀夫が生前中に石原慎太郎氏との対談で「三島さんは日本の何を守るのか」との問いに三島氏は「それは宮中三殿であり、三種の神器だ」と答えられたそうですが、あの昭和天皇も大東亜戦争の末期、我が国が万が一の時には自分がお守りして運命を共にするとおおせになられたと聞いております。正に三種の神器は命がけでお守りされ今日に至っているのであります。

しかし今注目すべき事柄が生じているのであります。アメリカの中等教育用の社会科の教科書の中で日本の国の照会がなされ「三種の神器（じんぎ）」にふれた部分があり、こともあろう日本の文部科学省の説明で三種の神器は、古墳に見る副葬品で鏡と勾玉の二種は記載されておりますが剣は照会されないで本来は二種の神器であると示されている点であります。

私達この日本の国は一番最初の祖先を神と仰ぎそして代々の天皇がその子孫であります。従がってその直系の天皇が元首として最高の権威のあるもので他にはありません。人間の力を越えた日本特有の文化であり伝統、その最たる王位を受け継ぐ証として「三種の神器（じんぎ）」があるのです。私達は今生きる日本人として日本の歴史を正しく伝える責務があるのであります。

明治天皇御製

おごそかに　保たざらめや　神代より
受けつぎ来る　うらやすの国

（広島県　長束神社　宮司）

神道講演構成法

神道講演の大先達、渡辺武清先生を始め、野村清臣先生、宮地保先生、河本眞澄先生、石井寿夫先生、佐古幸嬰先生など神社界のために一生を捧げられた大先生が神去りまして久しい、先生の教えの万分の一でも恩返しできればと門下生は各地で祈りの庭のひろがりを願い神明奉仕に励んでいますが、講演内容を組立てる構成法を参考迄に佐古先生の「庭のおしえ」より抜粋し、神道講演の手引きにしてみました。

「論」と「証」

一般には序論、本論、結論からなる三分法が主ですが「序」「論」「証」「結」の四分法からなる構成法の必要性を説かれています。

それは、本論をさらに分析して「証」を独立させ「論」の正しさを証明する。

「論」で神道の古典を引用し大綱をしめし、その真実性を証明するために具体的な例話「証」を語る。

内容として

Ⅰ 何のために語るか（祈願）
1 神命をかしこんで立つ
2 まず祈れ
3 正しい志を
4 まじめな生活を
5 話は生きている
Ⅱ 何を語るか（内容）
その一 体験を語る
1 体験を語る
2 体験を反省する
3 二つの「門」
① 自然のいのちのなかに神様を見る
② 人間のいのちのなかに神様を見る
その二 講演の内容
1 岩戸を開け、門にとどまるな

2　位に中す
3　講録をつくる
①　話の材料を集める
②　話の材料を選ぶ
③　話をまとめる
④　特に切り捨てについて
Ⅲ　いかに語るか（表現）
1　わかりやすく語る
①　話はわかりやすく
②　自分の言葉で語る
③　抽象的な論理よりも具体的な事実を
④　話には〝うねり〟を
2　至誠をもって語る
①　主催者にも聴衆にも深い感謝を
②　至誠をもって語る

③ 遺言の覚悟

3 自然に語る

① 講録をはなれて

② 自然に語る

③ 個性ある語りぶりを

以上、紙面の都合で構成法を簡単に記して見ました。詳細については各地で活躍している門下生、又は、事務局迄お尋ね下さい。

第十九回神道講演全国研修大会　愛知大会の記録

於　熱田神宮

名誉会長　工藤　伊豆（神社本庁総長）

顧問　阿部　信（神社本庁長老）

〃　片岡　昭雄（三重県神社庁庁長）

〃　小串　和夫（愛知県神社庁庁長）

〃　矢田部正巳（静岡県神社庁庁長）

〃　森　磐根（岐阜県神社庁庁長）

〃　林　克三（長野県神社庁庁長）

〃　真弓　常忠（住吉大社宮司）

〃　大野　俊康（前靖國神社宮司）

〃　大宮　四郎（忽那島八幡宮宮司）

〃　黒岩　龍彦（宮崎神宮宮司）

々	矢野　憲一	（元神宮禰宜）
大会会長	小串　和夫	（熱田神宮宮司）
実行委員長	村田　和之	（長束神社宮司）
実行副委員長	佐古　一洌	（松尾大社宮司）
実行委員	渡邉　知宣	（疋野神社宮司）
々	芦原　巖夫	（旭川神社名誉宮司）
々	田中　正也	（矢合神社宮司）
々	徳久　豊彦	（與賀神社宮司）
々	二橋　一彦	（熱田神宮権宮司）
々	藤井　昭彦	（神宮禰宜）
々	秋野　義正	（神明社宮司）
々	谷田　勉	（桜山八幡宮宮司）
々	中野　幸彦	（多賀大社宮司）
々	大野　順弘	（橿森神社宮司）
事務局長	生嶌　經和	（松尾大社権宮司）

事務局員　川﨑日出夫（熱田神宮禰宜）
〃　畠田　明彦（松尾大社権禰宜）
〃　村田　和弘（長束神社禰宜）
〃　村田　佳子（長束神社権禰宜）

神道講演全国協議会　役員名

顧問	阿部　信	神社本庁長老	幹事	二橋一彦　熱田神宮権宮司
顧問	工藤伊豆	高山稲荷神社宮司	幹事	秋野義正　神明社宮司
顧問	真弓常忠	住吉大社宮司	幹事	藤井昭彦　神宮禰宜
顧問	大野俊康	前靖國神社宮司	幹事	谷田　勉　櫻山八幡宮宮司
顧問	大宮四郎	忽那島八幡宮宮司	幹事	中野幸彦　多賀大社宮司
顧問	黒岩龍彦	宮崎神宮宮司	幹事	佐藤文彦　大館神明社宮司
顧問	矢野憲一	元神宮禰宜	幹事	大野順弘　橿森神社宮司
会長	村田和之	長束神社宮司	幹事	落合偉洲　久能山東照宮宮司
副会長	佐古一洌	松尾大社宮司	幹事	木下鍒二　大江八幡宮宮司
幹事長	渡邉知宣	疋野神社宮司	事務局長	生嶌經和　松尾大社権宮司
幹事	芦原嚴夫	旭川神社名誉宮司		
幹事・監査	田中正也	矢合神社宮司		

平成十五年七月　現在

あとがき

平成十五年六月二十五日より二十七日にかけて「三種の神器」の一つ草薙の剣の霊剣を祀る熱田神宮で第十九回目の神道講演全国研修大会・愛知大会が開催され全国各地より四十七名の神主が集結、盛会裡の内に終了した。

熱田神宮、小串和夫宮司様は神社本庁常務理事、東海五県の代表のお立場、一年前より協議会の両会長出向、小串宮司に大会々長を乞願、心よくお引き受け頂き、次で近隣各地に声を掛け勧誘下さり心暖まるご協賛ご協力、この上ない喜び、何としても成功させなくてはと役員一同ことの外力が入った。

平成十年第十四回京都大会より神社本庁直轄研修、十四年第十八回鹿児島大会より「神社本庁主催」による研修会と昇格、参加者も多方面に渡り、又、初参加者も多く目立ちはじめた。

平成八年総会の折、本庁の初任・中堅研修に講演実習を取り入れるべく要請、本庁の指導のもと地方研修会での取り組み実施、お陰で最近では、昔と違って仲良しグループの感

じより脱皮しつつあり執行部の目指す成果が少しづつ表われて来たように思います。

この度、図らずも初めて神社本庁の庁報「月刊若木」十二月号で協議会の紹介をさせて頂くこととなり全国各地からの反響と、ご指導ご鞭撻を楽しみにしている処です。

「一寸の光陰軽ずべからず」参加された諸先生には熱田の森での研鑽を思い起し、「初心忘るるべからず」日々ご精進下さることをお祈り申し上げます。

末筆ながらご多用の中、開講式ご出席頂きました小串宮司をはじめ、記念講演の二橋権宮司、職員各位、又、東海五県の各神社庁及びご協賛賜わりました著名神社、当会事務局員の皆様方に紙面を借り厚く厚く御礼申し上げ挨拶といたします。

平成十五年初冬

第十九回神道講演全国研修大会

愛知大会実行委員長　村田和之

講話集　剣のこころ

— 第十九回 神道講演全国研修大会 講話集 —

発　行　平成十六年六月一日

編集者
装幀者——神道講演全国協議会事務局

印刷所——呉市広白石一―二―三四

製本所——株式会社　ユニックス

発行所——神道講演全国協議会

〒六二六―〇〇二四　京都市西京区嵐山宮町三　松尾大社社務所内

TEL（〇七五）八七一―五〇一六　FAX（〇七五）八七一―三四三四

落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします